
わたしのあいしかた

葵一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのあいしかた

【Nコード】

N80200

【作者名】

葵一樹

【あらすじ】

繁華街にほど近い裏通り。

人波から離れ街路樹の影にしゃがみこむ少女の手には、一台の携帯電話が握られていた。

ディスプレイを見つめる目は鋭く、親指は忙しなく動き続ける。

やがて何かを打ち終わると、彼女はそつと顔を上げた。

行き交う車のヘッドライトに照らされたその顔には、妖しく艶やかな笑みが浮かんでいた。

日常

「じゃあね、また明日」

午後九時半。繁華街に近い国道沿いのテナントビルから、ありきたりな別れの言葉とともにばらばらと数人の少年少女たちが姿を現した。ビルの二階には学習塾の看板。一階の通用口から出てくる子ども達はその生徒なのだろう。その服装は学校指定のジャージであつたり制服であつたりと様々だ。そして彼女達はお互いに手を振りながら、歩き出したりビルの前の歩道に停めてある自転車に乗ったり、或いは母親の運転する自家用車に乗り込んだりして、一人、また一人と姿を消していく。

しかし、一人だけその場から一向に立ち去ろうとしない少女がいた。彼女は友人達を笑顔で見送りながら、何をするでもなく歩道の植え込みを囲うセメントブロックに座り込んでいる。

「璃子、帰らないの？」

やや遅れてビルから出てきた少女が、車道に足を投げ出しながら座っている彼女に気づき声をかけた。璃子と呼ばれた少女は顔を上げてにつこり微笑むと、学校指定の青いショルダーバッグからケータイを取り出して、小さく肩をすくめる仕草をした。

「親待ち。まだ来れないって言うからさ」

「そつかあ。あたしも待つてようか？」

「いいよ、大丈夫」

「だって、もう十時になっちゃうし、璃子一人じゃ危なくない？」

「へーきへーき」

璃子は笑いながら片手を顔の前で振って、友人の話を遮った。華奢な手首と黒いハーフパンツから伸びる脚から想像できるすらりとした肢体には、不似合いなほど大きいサイズの学校ジャージを着ている。対する友人も同様に、身体を二回りは大きく見せるような、

だぶだぶのジャージ姿である。

「沙織なんてチャリじゃん。早く帰ないと親が心配すんじゃない？」

「でも……」

「だいじょぶだつて、うちの親が遅いのだつていつものことだし、変な人とか来たら塾に逃げるし」

ね、と璃子は沙織の自転車を指差して、自分は植え込みから立ち上がって見せた。ぱんぱんとハーフパンツに付いた砂を払い落とすと、その動きに合わせてウェーブがかかったような癖毛が肩で跳ねる。

「どうせまだ迎え来ないみたいだし、宿題の質問でもしに戻るよ。心配しないで」

璃子は明かりの付いている窓を指差し、くりくりの大きな目を惜しげもなく細めて笑って見せた。整ってはいるが可愛い印象の顔が、途端にくしゃっとした愛嬌のある笑顔に変わる。沙織はそれにつられるように笑うと、それじゃあといって自転車にまたがった手を振って沙織を見送ると、璃子は再び歩道の植え込みにしゃがみこんだ。教務室へ質問に戻る気などさらさら無い。鞆から先ほどとは異なる青いケータイを取り出し、電源ボタンを長押しした。

親が迎えに来るというのも嘘だった。この三年間、いや小学生時代を含めて五年間、両親のどちらかが塾まで迎えにくるなんて片手で数えてもお釣りがくるだろう。二人とも自宅にだって滅多に居ないのだから。

青いケータイが起動すると、璃子は慣れた手つきで目当てのサイトを開いた。そしてマイページを表示させると、新着メッセージを片っ端から削除する。どうせ全てが出会い目的のメッセージだと予想できるからだ。このケータイサイトも登録した途端に「遊ぼうよ」というメッセージが日に何通も届くだけで、面白いことや興味が持てそうなことを見つけられない陳腐な出会い系サイトだった。地域や学校の裏話の掲示板をチェックすると、璃子はそのサイトを閉じ

る。

そろそろ友人達は自宅に着いた頃だろうか。温かい食事やにぎやかな団欒に迎えられているのだろうか。

一瞬、璃子の目つきが変わった。しかし苛立ちとも諦めとも、静かな怒りとも取れるその色は、行きかう車のヘッドライトに照らされた彼女が目細めると同時に消えてしまった。璃子は再びケータイのボタンを押し、「お気に入りフォルダ」のあるサイトへとアクセスした。画面をスクロールさせパスワードを入力すると、黒いゴシック調の画面に切り替わる。

「J中掲示板」

俗に言う、学校裏サイトである。

植え込みの影でケータイのディスプレイを見つめる璃子の顔を、時折通過する車のライトが浮かび上がらせる。その中学三年生という年齢の割に大人びた表情は、学校ジャージを着ていなければ高校生とも間違われそうだ。瞬きするのも忘れているかのようにディスプレイを凝視し、カチカチと親指を動かし画面をスクロールさせていく。毎晩、暇な時間が出来ると、数ある裏サイトの中でも書き込み数の多いこの掲示板をチェックするのが日課になっていた。

書き込みのほとんどが他愛のないゴシップと悪口。たまに核心をついた情報が書かれることがあるので、璃子はこの裏サイトをよく利用していた。円滑な学校生活を送る上で、良い意味でも悪い意味でも情報は大切な武器だった。

一通りスレッドに目を通し、自分に関する書き込みがないことに胸を撫で下ろすと、璃子は一際コメント数が多いスレッドの親記事をクリックした。そこに書かれているホームページアドレスを選択しましたボタンを押す。画面が切り替わり、開いたサイトを見た璃子

の口元からため息にも似た笑いが漏れた。

飛んだ先は同級生の男子によるブログだった。彼と交際している彼女のプライベートな日記を綴りながら、細々とやってきていたのだろう。まさか裏サイトにアドレスを貼られるとは思っていなかったのか、ご丁寧にも本名や写真まで掲載されている。

璃子は最新記事のタイトルをクリックした。既に百件を超えるコメントとアダルトサイトへのトラックバックで溢れている。コメント欄を開いた璃子は、微かにしかしはつきりと笑いをこぼした。思った通り、匿名で二人をからかうコメントやブスだのキモイだのという中傷コメントですっかり荒らされている。

しかしそれ以前の記事にはほとんどコメントが付いていない。アイカイプを見れば半年前からほぼ毎日綴られている二人の交際記録なのだが、いちいちチェックをする暇人も少ないらしい。

「ばーか、もつと遡れよ」

軽く舌打ちをし、璃子はケータイのディスプレイに向かって毒づいた。彼女は知っていたのだ。このブログを遡ると彼らの赤裸々な交際の様子が綴られていることを。しかも今年の夏休み中の記事には喫煙風景や二人のキスシーンの写メ、更には二人がベッドで戯れた後の写メが掲載されているということ。

そう。裏サイトにブログのアドレスを貼り付けたのは、他ならぬ璃子だった。

もつと「炎上」しちやえばいいのに。

璃子は最新記事のコメント欄を開き、「八月の日記に注目！」と打ちかけてその手を止めた。これを書き込んだらきつと皆こぞってその写真を見に行くに違いない。そうしたら今より「炎上」するとは明らかだ。

しかし璃子は鞆からもう一つのケータイを取り出し、メール画面を起動した。暗がりのなか、彼女の手元で白いケータイのボディが

ぼんやりと街灯の明かりを反射する。器用に左手の親指を区失してアドレス帳の中から担任の番号を探し出すと、手早くメールを作成して送信ボタンを押した。コメント欄を荒らすより、ずっと効果的な「いたずら」を終えた璃子の顔には、なんともいえない艶のある笑みが広がっていく。

「これで、明日も面白い」と

ぱちんと二つのケータイを閉じ、璃子は植え込みから立ち上がった。サブディスプレイに浮かび上がる時刻を見ると、もう十時半を回っている。ビルの二階を見上げると、教務室にあたる窓にはまだ煌々と電気がついていた。

まだ講師達は仕事なのだろう。小学六年からこの塾に通い続けている璃子は、この建物の電気が消えているところを見たことが無い。塾に来る日はほぼ毎回こんな風に道路脇に座り込んでケータイを弄って時間を潰しているが、十一時を過ぎて璃子が腰を上げる頃になっても講師が建物から出てくることはなかった。

来週になれば各学校で二学期の中間テストが始まるから、きっとその対策授業の準備でもしているのだろう。そういえばもうそんな時期だった、と璃子はテストの日程を思い出し少し憂鬱な気分になる。高校入試の内申点には今更何の問題もない璃子だったが、ここまで来て手を抜くのも癪である。

「……ダルいなあ」

でもやらないわけにはいかない。テストで首位を獲得すること。中学生になつてからの璃子は、そのことにだけはこだわり続けた。もとも勉強は出来る方だ。しかし首位を獲得し続けるということは、部活動や委員会活動もある多忙な中学生にはなかなか大変な努力が必要だった。

仕方ない、いつもより早いが帰るか、と璃子は自分の自転車をビルの陰から引つ張り出した。

「璃子、まだいたのかよ」

まさか人が近くにいるとは思わなかった璃子の身体がびくりと反

応じた。しかし恐怖はない。少し低めの、しかし聞き覚えのある声にいささかばつが悪くなり、そつと上目遣いで振り返る。彼女が振り返るとほぼ同時に、ぼすんと大きな手が頭の上に乗せられた。

「いったーいっ」

叩かれるでも、撫でられるでもない微妙な力加減。しかし璃子は
大袈裟に身をすくめながらその手を払いのけた。女子の平均より僅かに背の高い璃子より頭一つ以上背の高い声の主は、彼女が通う塾の講師だった。払いのけた手をそのまま振り回して叩く真似をした璃子から、講師は動きも軽く数歩後ずさる。動きに合わせて夜の湿った空気が動くと、講師の服についたタバコのおいが鼻腔をくすぐった。慣れ親しんだその匂いに、璃子はわざと握りこぶしで鼻をこすって抗議する。

その様子を見ながら小さく笑うと、講師はワイシャツの胸ポケットからタバコを取り出した。どうやら一服しに降りてきたらしい。「家の人が来ないなら早く帰るか、教務室にいるかしらっていつも言ってるだろう？」

璃子を横目で睨みながら、彼はタバコに火をつけた。旨そうに顔を綻ばせた彼を見ると、さもお前はついでと言われているようで、璃子はわざと口を尖らせる。

「相田つちにはカンケーないじゃん」

「カンケーあるの。塾ってもんは、おうちの人から大事なお子さんを預かってるって意識でやってんの。どうせテスト前だし、勉強しなきゃいいだろ」

「してたって」

「授業中はな。終わってからずっと、ここで遊んでたんだろ？」
「遊んでたわけじゃないし」

相田と呼ばれた講師は白い煙を吐きながら、つい先ほどまで璃子が座っていた植え込みに顎をしゃくった。どこから見られていたのか、バレていたらしい。街路樹の陰になっているから教務室からは見えないだろうと高をくくっていた璃子は、慌てて首を横に振りつ

つ言い訳を考える。単にケータイ弄りをしていただけだが、見ていたのはあまりおおっぴらに言えるサイトではない。また、なんとなく親が来ないとか、帰りたくないとか、そんな言い訳はしたくなかった。

しかし何を言っても嘘くさい気がする。特に相田は一年の頃から塾で担任をしているだけあって、璃子の家庭の事情や性格も良く知っているのだ。

「ちよつと、メールしてただけだつて」

結局、曖昧に濁して視線を泳がせることしかできない。

「ふうん、今日だけ、ねえ」

意味ありげにタバコを咥えなおす相田の視線から逃げるように、璃子は肩の辺りでゆるくウェーブがかかった髪を指先でもてあそぶごまかしきれていないのは明白だ。しかし相田はそれ以上追及することもなく、吸い終わったタバコを携帯灰皿に放り込んだ。そしてネクタイを緩めて大きく伸びをすると、まあいいや、と呟いて璃子に背を向ける。もっとしつこく追求されるかと思っていた璃子が拍子抜けしていると、くるりと相田がまた振り返って彼女を指差した。「明日からさ、自習室開けといてやるからさ。暇なら勉強してけ」

じゃあな、と言い残すと、相田は璃子の返事も待たずに軽快な足取りでビルの中に戻っていった。暗がりの階段に白いワイシャツの背中だけがふわふわと揺れて、やがてそれも見えなくなる。

ほぼ条件反射のように璃子はその後姿に向かって手を振っていた。我ながら「女子中学生」が板についているものだと内心では呆れていたが、これも学校生活を円滑に送る上で大切な「技能」なのだ。「技能」が使えない奴は周りから孤立する。自ら作り出す孤立ならまだいいが、周り勝手にが作り出す孤立は「いじめ」だ。人と異なるものは排除される。出すぎた杭は打ち砕かれる。ほんの僅かなほころびから、人はターゲットを見つけて集団から孤立させるのだ。

ターゲットにはなりたくない。

誰しもが同じことを思うだろうが、璃子はことのほかその思いが強かった。ただでさえ毎回のテスト成績が良いことで、暗に周囲の妬みを買っているのだ。しかしその成績が譲れない以上、その他のことではできるだけ目立たないように、はみ出さないように、立ち居振る舞いから友人づきあいに至るまで璃子は細心の注意を払っていた。

相田を見送ると、璃子は改めて自分の自転車に鍵を差込み鞆を力ゴに放り込んだ。学区内にある塾から自宅までは自転車で十分。飛ばせば五分ちよつとの距離だ。自転車のサドルに腰を下ろし、璃子はまたちよつと躊躇する。帰りたくない、しかしそろそろ帰って勉強しなければ睡眠時間が減ってしまう。

「帰ろっ」

暗い自宅を想像して萎えかけた気分を奮い起こすように、璃子はわざと帰宅の意思を口にした。ペダルに足をかけ、思い切って立ち漕ぎをしてスピードをつける。こういう時に学校ジャージは良い、足元に余計に気をつけなくて済む。五分で帰ってやる、と自分に言い聞かせ、繁華街とは反対側の人通りが少ない住宅街へと自転車を走らせた。

五分後。案の定門扉の外灯以外明かりの付いていない自宅の前で、璃子は静かに、しかし深いため息をついて立っていた。

のろのろと鞆から自転車の物とは異なる鍵を取り出しながら、自転車を押しつつ門扉を開けて玄関に向かう。目標の五分で塾から帰宅できたものの、やはり帰ってこなければ良かったと軽く後悔した。門扉脇のガレージの隅に自転車を停めるが、母屋の玄関までの数メートルの道のりすら遠く感じた。重い足取りで玄関まで辿り着き、暗がりの中で鍵穴を見つけ鍵を開けた。

途端に璃子の表情が陰しくなった。するりと家の中に入ると後ろ手のまま施錠し、靴を脱ぎ捨て電気も付けずに階段を駆け上がる。

真つ暗に近い家の中で、ぶつかつたり間違つたりすることもないまま自室へ駆け込むと、そこでようやく壁に取り付けてある電気のスイッチを乱暴に叩いた。

ぱつといきなり明るくなった視界に視力が追いつかず、目を瞬かせながら璃子は鞆を机に放り投げた。机の電気スタンドのスイッチも入れ、ベッドの枕元に置いてある電気スタンドのスイッチも入れる。

部屋に煌々と明かりが灯ると、険しかった璃子の表情がやっとほぐれた。そしてそのままの勢いで部屋を出ると、璃子は家中の明かりを片っ端から点けていく。

階段やトイレに至るまで照明を付け終わり、家の一番奥まつたところにあるダイニングの照明を付け終わるとようやく璃子は動きを止めた。誰も居ないダイニングの真ん中にあるテーブルに、いつものように一人前の食事がラップをかけられて置かれている。しかし璃子はこれには手をつけない。冷めた目つきでちらつと一瞥しただけで、キッチンの冷蔵庫からゼリー飲料を取り出した。一気に飲み干すと容器をダイニングテーブルへ放り投げる。

容器がこつんと音を立ててコップに当たった。ぶつかつた勢いでプラスチックのコップが倒れると、わざとぶつけたようなもののなかにそこに食器が並んでいることに苛立つ。誰がこんな食事を食べると思っているのか。璃子はこれを作ったであろう女の顔を思い出し、その顔に料理を投げつけてやりたい衝動に駆られた。しかし捨てたり投げつけて壊したりすることはできなかった。悪いのは自分ではない。それを分からせるためには、ここでキレてはいけけないのだ。唇を噛み締めながら璃子はこのテーブルを見なかったことにするために、放り投げたゼリー飲料の容器を片付けコップを元に戻した。

再び冷蔵庫を開け買い置きしてあるオレンジジュースを取り出すと、璃子は照明を消すことなく自室へと戻った。机の上に放り投げられた鞆の中から二つのケータイを出すと、白い方にメールの着信を示すランプが点灯していることに気がつく。

はつと璃子の顔つきが変わる。帰り際に相田と話していたせいで、担任へメールしたことなどすっかり忘れていた。璃子は友人達からのメールでないことを期待して、ぴかぴかと光るケータイを開いた。にやつと璃子の口角が上がる。ケータイのディスプレイにはメール着信以外にも、何件か留守電の記録があった。わくわくしながらメールボックスを開くと、やはり表示されているメールの送り主は担任の女教師だ。

メールありがとう。さっきの件についてちょっと話を聞きたいのですが、このメールを見たら電話かメールをください。

釣れた。

璃子は低く笑い声を漏らした。

翌朝、いつもと同じ時間に璃子が登校すると、教室の中では既に噂が一人歩きしていた。クラスメイトのケータイ所持率は八割を超え、その何人かは例の掲示板の利用者だ。あのブログの噂が広まらないはずはない。おまけに晒された当の本人が、今朝登校すると同時に教務室へ呼び出されるというおまけ付き。そんな状況で噂をするなどというほうが無理というものだろう。

「璃子、聞いた？」

机に学校鞆を置くや否や、少しぽっちゃりした体型の小柄な少女が璃子の元へと駆け寄ってきた。先週縮毛矯正したという、さらさらだが不自然なストレートヘアの前髪を斜めにヘアピンで留めている。

「何？」

内心ほくそ笑みながらも、璃子は興味なさげに少しぶつきらぼうに応えた。

「前島の噂。あいつのブログ見た？」

「うっん、興味ないし」

「すつごいよ、炎上してて」

「ホント？ 何で？」

「女と付き合ってる日記書いてるの。昨夜誰かがどっかの掲示板に貼ったんだって」

誘導したの私だし、と言いたいのを堪えて、璃子は驚いた表情を作った。

「誰がそんなことするんだろね」

「ね、暇人って感じ」

それよりもね、と少女は声を潜めた。少し璃子の耳に近づくように背伸びをし、女とやってる写メ載せてたんだって、と面白そうに付け足した。

正確には「ベッドで戯れた後の写メ」なのだが、どうやら少女はそこまで確認してないらしい。しかしちよつと噂に尾ひれがついていることに、璃子は密かに満足感を得ていた。

「ホントに？ 載せちゃってたんだ？ 沙希、見たの？」

片手を口の前に当て、大げさに驚いた表情を作る。沙希と呼ばれた少女はううんと首を横に振り、スカートのポケットからケータイを取り出して何やら操作を始めた。

「それがさ。見ようと思ったらブログ消されてて見れなくなっちゃったんだよね」

ほら、と沙希はディスプレイを璃子に向けた。そこには既にそのブログが閉鎖されたことを示すメッセージが表示された画面が映し出されていた。ブログ主である前島がコメント欄の炎上振りに慌てて削除したのか、それとも管理サイドが学校からの削除依頼に応じたのかは分からない。璃子が昨夜寝る前、といっても今朝三時の時点ではブログが存在していたことを考えると、朝になって消したということか。

「前島は？」

「教務室。やつぱさ、ヤバいんじゃない？」

璃子は曖昧に頷くと、席について頼杖をついた。横で何やら沙希

がしゃべり続けているが、もうそれは頭に入ってこない。頬杖をつきながら、前島がこの後どうなるだろう想像してみる。

沙希は「先生にバレた」ことがヤバイと考えているようだが、本当にヤバイのはこの後だろう。秘密にしていた「悪いこと」が教師にバレたところで、説教されてお終いだ。せいぜい親を呼ばれて怒られる位で、あとは日常生活に戻れば済むことである。しかし今回は教師が火消しをする前に噂が広まった。前島は決してクラスの中心人物というわけではない。力が強いわけでもリーダーシップがあるわけでもなく、特別格好がいいわけでも勉強ができるというわけでもない。良くも悪くも普通だった彼がこんな騒ぎの中心人物になった。

出る杭になったのだ。

妬み、羨望、嫌悪、嘲笑。様々な感情の対象になることは間違いない。

しばらくは前島がターゲットだな、と璃子は沙希のマシニングントークを上の方で聞きながら、ぼんやり前島の頼りなさげな笑顔を思い出していた。

観察

スパーンという小気味良い音とともに視界が上下に揺れた。目の前にちかちかと星がちらつく。

「いつまで遊んでんの」

一瞬の衝撃の直後、頭上からかけられる声にはつと璃子は我に返った。机の端に描かれた落書きに焦点が合う。使い古された机は塾のものだ。参考書とノートが開かれてはいるものの、ペンケースは閉じられたままだしノートは真つ白のままである。手に持っていたケータイを慌てて閉じた。場を誤魔化すために照れ笑いを浮かべて見せながら、璃子がそつと顔を上げると、薄手のテキストを丸めて腕組みをしながら仁王立ちをしている女性と目が合った。

大人のくせに璃子を見下ろしながら唇を尖らせてはいるものの、そのタヌキのような垂れ目は笑いを含んでいる。春から理数を担当しているこの女講師は、口は悪いが愛嬌があるのか女子生徒からは懐かれている。付き合いは相田より短いものの、璃子も彼女が嫌いではない。彼女の目が笑っていることに気付き、璃子はホッとして大袈裟に頭を擦る仕草で応戦した。

「痛いよ、伊東ちゃん」

「何言ってるのよ、ぽふぽふしたところで叩いたんだから痛くないだろ」

「伊東ちゃん馬鹿力だし」

「失礼なっ」

口調とは裏腹に、伊東は大きく口を開けて笑いながら、璃子の真向かいの席に座った。

通常授業の時間まではまだ一時間以上ある。パンツスーツにスニーカーという、至極機能的な反面色気に欠けるファッションに身を包んだ彼女は、机に頬杖を付きながら机の上に開かれていた璃子のテキストをぴらぴらとめくってため息をついた。

「勉強する材料がないなら、教務室来ればいいのに」

伊東によってめくられた英語のテキストのテスト範囲は、全て解答で埋められ採点まで済んでいる。難易度の高い問題の数問に赤字で修正が入っているだけで、あとはほぼ模範解答だ。

「昨日終わらせちゃったの忘れてて、他の教科とどっちにしようか迷ってたんだよね」

「で、ケータイいじっちゃった、と」

しょうがないなあ、と笑う伊東から璃子はテキストを受け取り、鞆から数学のテキストを出した。理数担当講師の手前、何か質問しとく問題はないかと探す振りをする。実際は英語同様ほとんどテキストの問題はやり終えてしまっていて、特に質問することもないのだがせっかくだからと難易度の高い問題のページをめくる。しかし璃子が開いた数学のテキストを、正面から伊東は覗き込んで肩をすくめた。

「教務室の別の問題集のコピー持ってこようか？」

「社会がいい。公民の問題集忘れちゃった」

「オッケー、待ってて」

そう言つて伊東が軽やかに椅子から立ち上がると、僅かに甘い香水の匂いが漂った。化粧つきのない伊東から香水の匂いがすること若干の違和感を覚えながらも、教室を出て行った後も香る残り香の軽い甘さが気に入った。後で何を使っているのか聞いてみよう。璃子は机に広げられたままの数学のテキストを鞆にしまいこみ、先程閉じたケータイを再び開いた。

今日、結局前島は教務室に呼び出された後教室に戻ることなく早退した。保護者が呼ばれることはなかったらしいが、あれだけ噂が広まった教室に戻ることは飢えたハイエナの群れに突入するのと同じくらいの勇気が必要だったのではないだろうか。教務室で誰とどのような話がなされたのかは分からない。朝の学活の時間に教室へやってきた担任の女教師は、騒ぎがどのくらい大きくなっているのか知ってか知らずか前島の件については何も語らなかった。小太りの体を揺らしながら、ただ学活が遅くなったことを簡単に詫びただけだった。

ブログ自体も閉鎖され、本人も出てこない、教師が火消しもしない。そうなるともう憶測が憶測を呼び、噂は璃子が当初想定していたものより遥かにえげつないものになって行つた。そして学校が放課になり、自由にケータイをいじれる時間になった今、裏サイトや個人のケータイホームページなどでは、昼間口に出すことが憚られた内容の書き込みが大量に舞い踊っている。ムカつく、不細工、なんてものではない。噂に尾ひれが付きまくり、もはや前島の彼女は「中絶して自殺未遂したらしい」などと書かれている。

そんな書き込みを見てほくそえんでいる璃子が関与したことなど

誰も知らなかった。担任へは「ブログを偶然見つけた、炎上している」とだけ伝えてある。誰も、璃子が裏サイトへ貼り付けて炎上を誘導し、学校側へリークしたなどとは思わないだろう。動機がない。大体にして、璃子が前島のブログを見つけたことだって暇つぶしの偶然だったのだから。

この噂をしばらく追っかけていくのも面白そうだ。噂で前島がどうなっていくのかを観察するのもいい。ケータイサイトの書き込みを読むのは、夜の時間の恰好の暇つぶしだった。

一通り裏サイトの書き込みをチェックした頃、ガラッと扉を開けて数枚の問題用紙を持った伊東が教室へ戻ってきた。途端に教室の中にタバコの匂いが紛れ込む。

「伊東ちゃん、臭い……」

璃子の抗議に伊東はぎょっとした顔になる。ええっと小さな悲鳴のような声を上げ、腕や髪の毛の匂いを嗅ぎ始めた。服の動きに合わせるかのように、タバコの匂いが空中に放り出され、璃子は眉をしかめ不快感を顔にした。さっきまでの心地よい残り香が台無しだった。

「タバコ、吸うの？」

ああ、と伊東はようやく動きを止め、申し訳なさそうな表情になる。

「給湯室の前通ったから。相田先生が吸っちゃってたから匂いが付いちゃったんだわ。ごめん、上着脱いでくる」

「いいけどさ……」

相田の名前を出され、璃子は少し膨れて見せた。なんとなく、素

の表情を伊東に見られなくなかった。

昨夜、相田はわざわざ屋外に出てタバコを吸っていた。そういえば通常の授業がない時間帯には、相田をはじめ喫煙者の講師達は給湯室でタバコを吸っている。あの時間であれば、わざわざ外に出て吸う必要もなかったはずだ。兄と言ってもおかしくない程の年齢である相田に「気にされていた」と思うと、何だか妙にくすぐつたい。

「相田っち、まだ給湯室？」

「ん？そろそろ終わってるんじゃないかな。もうすぐ小学生の授業だから」

「ふうん……」

「何か相田先生に用事？」

「いや、そうじゃないんだけどさ」

璃子に指摘され、しきりに淡いグレーのジャケットとゆる巻きにした明るめの髪の毛の匂いを気にしていた伊東は、ほらつと璃子に数枚のコピーを渡す。ばらばらと問題を見ると、教務室の問題集の中からテスト範囲と思われる部分をそのままコピーしてきたのだろう、基本の一問一答から記述問題まで網羅されている。これがあれば少なくとも授業の時間までの一時間、暇を持て余すことはなさそうだった。

余計な事と思う気持ちと、やるべきことを与えられて安心する気持ち。相反する感情に挟まれて、璃子は苦笑いをした。そんな璃子の表情を横目で確認した伊東は、にやりと笑いながら机の上で開きっぱなしになっている璃子のケータイを閉じた。

「さてと、あたしも授業あるから、そろそろ行くけど何か質問あったら教務室行きな？ ほったらかすなよ？」

「はいはい、ありがと」

伊東に閉じられたケータイを鞆にしまい込み、璃子は片手を顔の横で振る。了解の意味もあるし、もう行ってくれという意味も含んでいた。これ以上は何か余計なことまでしゃべってしまいそうな気がした。

片手を振りながらぱたと出て行く伊東を見送ると、教室には鼻の奥をくすぐるタバコの残り香だけが漂っていた。璃子は本来タバコの匂いは大嫌いだ。学校を終えて帰宅して玄関を開けると、時々鼻を突き刺すような強烈なタバコの残り香がすることがある。両親はヘビースモーカーであるため、玄関に充満するその残り香は璃子の留守中にどちらかが帰宅していたという事実を示しているが、同時に璃子には顔も見せずにまた仕事に出たという現実をも見せ付けていた。

普段なら「臭い」と窓を開けてしまう璃子だったが、何故か今日は窓も開けずにその残り香を深く吸い込んでいる。詳しくは分からないけれど、昨夜の相田が吸っていたタバコの煙と同じ匂いに感じられた。

嫌いなはずのタバコの匂いに包まれながら、どこかくすぐりたい思いを隠すように、璃子はやっとかばんからペンケースを取り出して問題に取り組み始めた。

元々勉強が嫌いなタイプではない。幼い頃からの習慣もあるが、やり始めたら璃子の集中力は途切れることがなく、コピーされた数枚分の問題にさくさくと解答を書き続けた。最後の記述問題以外の解答を終えると、シャーペンを赤ペンに持ち替えて、ご丁寧に添付されている模範解答で答えあわせをした。

璃子以外誰もいない教室に、赤ペンが円を描く規則正しい音が途切れることなく続く。しゃっしゃっしゃつと一定のリズムで赤ペンは円を描いていた。しかし数秒後、その音はぴたりと止まった。

「ミスった……」

模範解答と自分の解答が違う。璃子は小さく舌打ちをした。

基礎問題など全問正解するつもりでいただけに、自分のミスに自分で悪態をつきたい気分になる。バツ印をつけて正答を書き写そうとして、璃子は問題を確認した。

「あれ？」

改めて問題文を読んでみたが、模範解答の解答では辻褄が合わない。璃子の解答で合っているはずだ。読み直した問題番号と模範解答の番号を照らし合わせてもズレていない。

「ミスプリじゃん、これ」

璃子は自分の解答に景気よく丸印を描こうとペンを持ち直したが、ふと思い直してペンを置く。公民はまだテスト勉強が十分でないため、自分が間違っただけで解釈している場合があることも否定できない。恐らく放っておいても成績には影響しない。しかし幼い頃からの習慣もあり、勉強に関しての疑問点は解決しないと気が済まない性格でもある。しかもそろそろ一人で自習するのも飽きてきた頃合だった。

いささか面倒に思いつつも、璃子は問題と模範解答のコピーを持って教務室へと向かった。

静か過ぎた教室から廊下へ出ると、途端に小学生たちの騒がしい声

が聞こえ始めた。壁時計を見ればもう六時半である。丁度小学生の授業が終わった頃なのだろう。ばたばたと威勢良く教室から飛び出してくる子ども達にぶつからないように、璃子は早足で教務室へ向かう。

そろそろ相田も伊東も授業が終わって教務室にいるかもしれない。そう思うと、ミスプリかどうか聞くだけの用事で向かうのに、何故かその足取りがいつもより少しだけ軽く感じる。教務室前の掲示板に貼ってある、定期テストで目標達成した生徒たちの名簿がはがれかけているのを見つけ、手近にあった画鋏でそつと留め直すと、璃子は大きく開け放たれている教務室の扉からひよこつと中を覗き込んだ。

敢えてそちらを見ないようにしたつもりでも、視界の端に教務室の窓際にいる相田の姿が入った。いつものように声をかけようとした次の瞬間、璃子の唇はきゅつと結ばれた。

「あ、璃子だ！」

「居たの？ いつから？」

顔を出すと同時に、教務室の中から数人の少女が声から声がかかったのだ。

およそ十二畳の教務室の中を見渡すと、既に同じ学校や隣の学校の塾生たちがおしゃべりに花を咲かせている。男子生徒も数人、それぞれお気に入りの講師の傍に陣取って、すっかり立ち話に興じていた。もちろん相田の隣には、声をかけてきた数人の女子生徒がたむろしている。時間を考えれば居て当たり前だった。塾が始まる前のいつもの風景だ。

しかしそんな「いつもの風景」に、璃子の胸は何故かざわついた。声をかけてきたクラスメイト達に返事をしなければ、と気持ちは焦る。ただ相田の周りに居る女子生徒が目に入るたび、ざらついた粗

い紙やすりで胸元を擦られるような不快感が襲ってくる。どうしても笑顔が上手く作れていない気がして、慌ててコピーを持ち上げて顔の前で指差した。

「おう、どした璃子？」

その様子に気が付いたのだろうか、相田が席を立って璃子の方へやってきた。相田の担当は英語と社会だ。他の教科の質問をしても可能な限り教えてくれるので男女問わず人気があるのだが、若い相田はいつも女子生徒に囲まれている。分かりきっていることなのに何故か苛立ちが募った。

「ここ、答え何？」

少女たちのたむろしている場所に近寄らなくて済み、幾分ほっとしながらも璃子はそれを悟られないようにぶつきらばうにコピーを指差す。どれどれ、と璃子の目の前で相田がそれを覗き込むと、その塾講師にしては茶色過ぎる頭越しに少女たちの姿が見えた。そちらを見ていることに気づかれないように、前髪で目元を隠しながら上目遣いで少女たちの様子を伺う。

その中の一人と一瞬目が合った。ような気がして璃子はぱっと視線を落とした。

心臓の鼓動が早くなるのと同時に、頭の中で警鐘が鳴り響く。何故か分からないけれど、なんとなく早くこの問題を解決してあの輪に入らなければ危険な気がする。

「相田っち、わかった？」

璃子は慌てて相田を急かした。早く、早く何食わぬ顔であの輪に

入ってしまわなければ。

「璃子の書いたやつ合ってるぞ？ 先週の授業のノート見るよ」

「じゃ、いいや」

「どうした？」

「いって。分かったから」

ぱつとコピーを取り上げて相田を遮ると、璃子は無理矢理口角を上げて笑顔を作った。ありがとと軽く礼の言葉をつぶやくと、あっけに取られたような相田の脇をすり抜けて先程の少女達に駆け寄る。少女たちはもう既に別の話題に夢中のようにだったが、璃子はその輪の中にするりと入り込んだ。

「璃子早かったんだね、何してたの？」

「自習。家帰っても親居ないしさ。それよりおなかへったあ」

「ポッキー食べる？」

「食べるー！」

「それよりさ、皆今日の十時からのドラマ見る？」

「見る見る！ ビデオも予約してきたし」

「えー、璃子ちゃん今度貸して！」

「オツケー、来週持つてくるよ」

「来週テスト前じゃん？」

「げー、勉強してないしっ」

「亜矢とかもうワーク終わってたし」

「うっそ、はやっ！」

まるで先程の動揺など何も無かったかのように、璃子は差し出されたお菓子に手を出し、笑いながら会話に混ざって行った。会話の内容なんて本当に他愛ないものばかりだった。テスト勉強だって璃子は「している」くせに「していない」と話す。本当のこととか、本音とか、悩みとか、わざわざ面と向かって話すようなことなど皆無だ。必要性を感じない。会話に乗っているようでも、片手にはケータイを持ち、せかせかと何かを打ち込みながら笑っている子もいる。

時折、ちらつと視線を走らせて目が合ってしまった少女を伺う。彼女もまた、先程のことなど忘れたかのように、大きな口を開けて笑いながら会話に興じていた。同じ塾生で何回かしゃべったこともあるが、苗字以外は良く分からない子だった。皆と同じ様に縮毛矯正した不自然なストレートヘアで、肩に付く辺りで切り揃えられているし、見るからにガリガリな細身体型だ。

M中の高野亜衣さん、か。

学校ジャージに大きく記された校章と名札を見て、璃子はそつと名前と学校を確認した。これさえ分かれば、あとはどうとでもなる。

そして六十分授業が二コマ終わり、璃子達は昨晚と同じように思い思いに手を振りながら塾を後にした。自転車に乗って帰る者、母親が迎えにくる者、徒歩で帰る者、バスで帰る者、皆ばらばらに散っていくと、また璃子はいつものように植え込みの陰に座り込むのだった。帰り際、相田に引き止められそうになったため、今日は急用があるから帰ると言ってわざわざ自転車に乗って数百メートル離れた歩道まで帰る振りまでして。

そしてケータイを開くと、検索ワードにある言葉を入れて送信した。

「M中、三年、高野、亜衣……と」

数秒後、検索結果のトップには「アイ&マオの部屋」というホームページが表示されていた。貼り付けられた写メは、ぼやけてはいるものの見覚えのあるストレートヘアの少女が知らない子とピースサインをしているものだった。

「あたりー」

実に簡単だ。例えそれほど親しくなくたって、知りたければこうやってすぐ情報は手に入る。

暗がりの中、璃子は悦びの笑みを浮かべていた……。

それからというものの、翌日も翌々日も、璃子は学校帰りに塾へ寄って自習を続けた。それも自習室ではなく、教務室で勉強することにした。そんな璃子を見て、紗織や他の女子も同じように教務室に通いつめるようになった。おかげで毎日教務室はJ中の女子で占拠され、相田の周りには鉄壁のガードが形成されることとなった。

初めは何か言いたげにしていたが、数日もすると高野は塾へは来るものの教務室へ顔を出さなくなった。いつも大人しそうな、マオと呼ばれている少女と教室に籠ることが多くなり、璃子へ何か言いたげな視線を向けることも無くなっていった。

あの日検索したサイトは高野とマオの二人が日々の思いを書き付ける場所らしく、数ヶ月前から高野が塾の講師の一人に恋をしたというような内容の書き込みが続いていた。書き込みを見ればソレが相田のことであることは一目瞭然だった。璃子のことについても若干触れていた。書き込みはアイとマオの二人だけ。閲覧数もそれほど多くないところを見ると、本当にナイショ話をするだけのつもりで開設したのだろう。

璃子はそこへほんの一言、「アイは細すぎてキモイってアイダが言ってた」と書き込みをしただけ。

たったその一言だったけれど、その後の高野は璃子から隠れるようになってしまった。

誰のものかも分からない書き込みに対する恐怖心、淡い恋心を知られた羞恥心、容姿に関するコンプレックス。たった一言の書き込みで、高野は十分にダメージを受けたようだ。おまけに塾では目当ての相田に璃子や璃子の友人達が貼り付いている。例の書き込みの「犯人」を当て推量で名指ししても、自分達に有利な展開にはならないと踏んだのだろう。

ざまあみろ、と璃子は一人ほくそ笑む。

塾に通いつめるようになり、家に帰って腹ごしらえをしなくなった。財布の中の小遣いが瞬く間に消えていったが、璃子はそんなこともお構いなしに塾へ通った。どうせ小遣いはまたねだれくれるのだ。「勉強しに行って」いるのだから、親だって文句は言わないだろう。そもそも、親は璃子の行動などには無関心である。何時に起きて何時に帰るうとも、いつだって彼らは家に居なかった。父親は土建屋。

母親はジュエリーショップオーナー。自分達の城がある彼らは、平日はもちろん休日もほとんど外出してめったに顔を合わせることもなかった。物心付く頃には既に家のことは家政婦が取り仕切っており、璃子は家政婦を通じて両親からの言伝を聞いたり小遣いをもらったりしていた。しかしその家政婦とも、璃子はここ数ヶ月までもに顔を合わせてはいない。あんな女には会いたくも無かった。今日も「お金をもらって置いてください」と書置きをしてきたただけだ。

それでもきつと、今日の夜か明日の朝にはダイニングのテーブルに一万円札が何枚か置いてあるに違いない。いつものことだ。

そして今日も璃子は学校が終わると塾へ直行した。途中にあるコンビニでお菓子とおにぎり、紅茶飲料を買い込み、満面の笑みで教務室へ乱入する。まだ早い時間の教務室は昨夜のタバコとコーヒーの匂いが残っていて、あまり気分が良い空間ではないがこの際それは無視することに決めていた。窓際の席でパソコン作業をしている相田を見つけると、スキップでもしそうな勢いで近づき隣のデスクに荷物を広げる。手早く英語のテキストを出すと、にっこりと笑顔で相田の肩を叩いた。

「相田っち、英語教えて？」

「んあ？」

ぼりぼりと頭を掻きながら相田は顔を上げた。いつもと違って黒縁の眼鏡をかけ、あごにはうっすら無精ひげが生えている。

「どしたの相田っち！その顔、めっちゃ疲れてるし」

「うあ……頼む、でかい声出さないで……」

「顔青いしっ」

「やーめーろーって……」

相田は璃子の声に苦しむかのように、両手で頭を抱えてデスクに突っ伏した。その様子にぎよっとする璃子を尻目に、教務室の至る所でくすくす笑う声が聞こえる。

「璃子、やめてあげて」

入り口近くの伊東が笑いながら声を上げた。璃子はそれでも意味が分からず、きょとんと教務室の講師達と相田を交互に見る。

「相田先生、今日ね……」

「うわ、伊東先生止めてくださいって」

「いいじゃない、どうせすぐには良くなるんだし」

くすくす笑いながら、相田先生二日酔いなよ、と伊東は続けた。

「二日酔いつて、もう夕方だよ？」

「しょうがねえだろ……俺達飲み始めるのが夜中過ぎだったんだから」

「平日じゃん、相田っちまぬけ……」

「うるせ……」

様子を見る限りかなり具合が悪いらしい。璃子と話している最中にも、デスクに肘を付き重い頭を支えるようにしきりにこめかみや眉間を押している。見たことのない相田の姿に、璃子は口実である英語の質問をすることも忘れて見入ってしまった。

「まあ、それにしても飲み過ぎですよ。いくら歓迎会だって言っても、歓迎する側が潰れてたんじゃ世話ないですよ」

「小川先生……ひどい」

璃子と向かいあわせのデスクで作業をしている、塾で一番若くて可愛いと評判の小川が顔も上げずに指摘した。言葉にほんの少しだけトゲが含まれているような気がして、璃子は思わず小川の表情を伺う。長い黒髪をショップの店員のように高い位置でおだんごにして流行りのぱつん前髪にした彼女は確かにメイクも上手で可愛らしい。璃子の視線に気がついた小川は顔を上げて、なあに、と微笑む言葉ほどトゲのある表情ではないことに、璃子は胸をなでおろした。

「そう言えば、歓迎会って誰の？」

璃子の知る限り、教務室に新しい顔は見当たらない。秋も深まるこんな時期に新人社員が来るわけもない。きよるきよる見回してみても、相田や小川、伊東と他にも見知った顔ばかりだ。

「まだ来てねえよ……非常勤の先生だから、来るのは夜だけだ」

ふうん、と璃子は唇を尖らせてうなずいた。アウトドアとは無関係そうな相田の白い肌が、今日はいつもより青黒く見える。いつもはワックスで上手くまとめられている髪も、今日は洗いっぱなしのよ

うだ。よくよく見るとものすごく睫毛が長く、二日酔いで物憂げな表情が無精ひげさえセクシーに見せるから不思議だった。いつもは「お兄ちゃん」な相田が変に大人臭く見えて、璃子とはとっさに話題を振った。

「男？ 女？」

「男」

「若い？ オジサン？」

「超若い。俺より若い。俺十八歳だから十三歳くらい」

「相田っち十八歳なわけないし」

「良いんだよ、俺は永遠の十八歳なのっ」

「カッコいい？」

「俺よりカッコ悪い」

「自意識過剰だし！」

璃子はぱつと顔をあげて、遠くの伊東に質問の矛先を変える。隣で相田がまた頭を抱えたがこの際放置だ。

「伊東ちゃん、どっちがカッコいい？」

「相田先生以上、栗林先生以下じゃね？」

伊東も相田にはお構いなしにシレつと答える。伊東の隣の栗林は照れたように頭を掻いた。璃子が小川を見ると、小川も作業の手を休めてうんうんと腕組みしながら頷いている。

「じゃ、めっちゃカッコいいし！」

「璃子でめえどういう意味だソレ……」

「ねね、相田っち。その先生うちのクラス入る？」

「ハイクラスには入らねえよ。あ、入試理科なら入るか……頼むからちよつと静かに……」

「えー、じゃあうちも入試理科申し込む！」

「あー、もう、分かったからさ……」

璃子の声は決して甲高い方ではない。どちらかといえば低音になるが所詮女の子の声である。かなり酷い二日酔いらしい相田は、璃子が大声で話しかける度にこめかみを押さえてうずくまる。しかし璃子はそんな相田にお構いなしにテンション高く話しかけた。

「いつ来るいつ来る？」

「入試理科始まる来週から……」

「何時頃から来るの？ 早く見たい！」

「見せモンじゃねえぞ」

「だっていつも同じ顔ばかりだから、新しいセンセって新鮮じゃん。カッコいいなら尚更見たいし、うちらが塾の中教えてあげたらしいし」

「今からそれじゃあ、来週からはもつとうるさくなりそう……女の子皆騒ぎそうですね」

「皆若い男に飢えてるんだよ」

「若いのならホラ、小学生そろそろ来るわよ？」

「若過ぎー！」

「お前ら俺をいじめて楽しいか……」

いつの間にやら作業を止めた小川が璃子の話に乗ってすっかり騒がしくなった頃、教務室の外で甲高い小学生達の騒ぎ声が聞こえた。窓越しに黄色い帽子が見え隠れし、その中に見覚えのある学校ジャージ姿の中学生もちらほら混じっている。璃子と同じ中学校の生徒達だ。小学生を掻き分けるようにやってきた中学生達は、教務室に一言自習させてと声をかけると璃子に手を振りながら自習室に向かつて行った。

「ほら、璃子もそろそろ勉強しな？ 明日から中間でしょ？」

「はい、今日はもう仕上げだからあっちでやろうかな。相田っち、また後でね」

「もう来んな……」

伊東に促され、璃子は鞆を抱えて友人達を追うべく教務室を後にした。明日の科目は英語と国語だ。どちらも得意科目だけれど油断はできない。志望校に対する内申点も申し分ないはずだが、ここはもうひと分張りして満点でも狙ってやろう。小走りでそんなことを考えながら自習室に着く頃には、もう璃子の頭の中から「非常勤の先生」のことなどすっかり追い出されてしまっていたのだった。

邂逅

高鳴る胸の鼓動が抑えられない。

グレーの制服のスカートを翻して、璃子は自宅へ向かってほぼ全力に近い速さで走っていた。背中に担いだ学校鞆の重さもほとんど感じられない。ゆるくウェーブのかかったくせ毛が向かい風に煽られても、いつもは隠している額に汗がにじんでも、薄く書いた眉が消えかけていることも構わない。ただ一刻も早く家に帰りたい。十月に入って衣替えした冬服を着ていることが恨めしいくらい、今日は気温が高い。学校が放課すると同時に下校したのでまだ十分すぎるほど日も高い。冬服のジャケットを脱ぎ捨ててしまいたくなるような暑さだった。ようやく自宅前にたどり着き足を止めると、璃子は全身から汗が吹き出してくる感覚に襲われた。

数回深呼吸を行い上がった息を整えた。七月に部活を引退してからこんなに走ることなどなかったため、久しぶりの全力疾走は全身を心地よい疲労感で包みこむ。ぱつとガレージに目をやると、そこには一台のベンツが止まっていた。それを確認した璃子は、門扉前で汗をぬぐい手ぐしで髪を整え、できるだけ平静を装うようにゆっくり歩いて玄関へ向かった。

璃子が慌てて下校したのには理由があった。我ながらひどく子どもっぽい理由だと苦笑いしたくなるような、ほんの些細な、しかし璃子にとってはとても重要な理由。

大体三時から四時くらいの時間は家政婦が夕食の買出しに行く時間だった。この時間に帰宅すれば、家政婦に会わずに済み、尚且つ運がよければ仕事のついでに寄った父親か母親を捕まえることができ

るはずだ。今日こそは、今日こそは捕まえてこの鞆に入っている「結果」を親たちに見せ付けたい。これを見たらきつと「言葉」をかけてくれるはずだ。肩から鞆を下ろして抱えると、璃子は淡い期待に胸を膨らませそつと玄関の扉を開けて中を覗き込んだ。

ドアを開けると玄関にはきれいに磨かれた男物の黒光りする革靴がきちんと揃えて置いてある。

居た！

しかしその隣にちよつとくたびれた女物のグレーのポンプスが置いてあることに気がつき、璃子は一瞬動きを止めた。嫌な予感があった。そのまま音を立てないように玄関へ入ると、そつと廊下の奥にあるリビングの様子を伺った。

僅かだが人の気配があつた。璃子の身体に緊張が走る。自宅であるにもかかわらず、知らず知らずのうちに息を潜めその姿勢さえ低くなつていった。

見ちゃいけない。見てはだめ。

見るな！

自分が自分を制止する。しかし璃子の目は理性の制止を振り切つて、いや、制止の声など聞こえていないかのように、ドアの隙間からリビングの中を盗み見た。濃い色のカーテンを引いた薄暗い室内の中央にあるソファで、何か白っぽいものがうごめいている。ドアを隔てているのに、璃子の耳にも荒い息遣いが聞こえた。

引き返せ。

璃子の理性は最後の警告を発した。しかし璃子の目はそんな警告

を全く無視して、ソファの上の白いものへと焦点を合わせる。それを見た瞬間、璃子は激しい公開と嫌悪感に襲われた。嫌な予感的中し、酷いショックでその場に立ち竦む。全身から血の気が引き、心臓を鷲掴みにされたような痛みが走った。

どさりと抱えた鞆が足元に落ちる。見るな、聞くな、立ち去れ、と脳裏で飛び交う文字の後ろで消防車のものに似たサイレンが鳴り響く。しかしまるで囚われてしまったように、璃子の目はそれを凝視したまま動かない。早く目を背けたいのに、見たくないのに、璃子の目はそれを映し続け、脳は鮮明にそれを記憶する。

「それ」が一際高い嬌声を上げたとき、璃子の中で何かが弾け飛んだ。

呪縛から解き放たれた璃子は瞬時に目を逸らす。ぎりつと唇を噛み、痛いほど強く拍動する心臓に静まれ静まれと繰り返す音が、それは璃子の意思に反してどんどん速さを増していく。胸の痛みと息苦しさには押しつぶされそうだった。

ここに居てはだめだ。胸を押さえた璃子はじりじりと後ずさりをして、玄関の扉を後ろ手に掴んだ。そして音を立てないようゆっくり扉を押し開くと、隙間に身体を滑り込ませるように外へ出たのだった。

途中何度も吐き気を催し立ち止まりかけたが、璃子はなんとか踏みとどまって歩き続けた。何処へ向かうでもない。しかし一刻も早く、少しでも遠くへ行きたかった。

汚い。汚い。汚い。汚い。汚い。

こみ上げてくる涙を必死に堪え、璃子はひたすら歩き続けた。住宅街を通り抜け、大通りを渡り繁華街へと突き進む。いつもは賑や

かに感じる街の雑踏も、アーケードから流れる有線放送も、うるさいキャッチやナンパの声も何も聞こえない。周囲の色彩は全て足元のアスファルトと同化し、まるでスクリーンのように璃子の脳裏に浮かぶ映像を映し出す。

いやだ。いやだ。いやだ。いやだ。いやだ。

目の前に浮かぶ残像を払いのけるように、璃子は時々首を横に振った。それでも残像は消えずに目の前をちらつき、記憶した映像をリピートし続ける。何百回と繰り返し浮かぶあの場面。堅く目を瞑って耳を両手で塞いでも、瞼の裏にあの場面が映し出され耳元であの荒い息遣いと嬌声が聞こえるようだ。そして最後に見たあの姿アレは確かに……。

ついに耐え切れなくなり、璃子はその場にしゃがみこんでしまった。往来だということも忘れ、膝に顔を埋めて両手で頭を掻き毟る。声にならない叫びと共に、堪えていた涙が溢れて膝やスカートを濡らした。ダメだ、思い出すな、あたしは知らない。呪文のように何度も何度も繰り返しつぶやいた。見てない、聞いてない、あたしは知らない。あたしは知らない。家になんか帰ってない……。

そんな呪文を何回繰り返し返した頃だろうか。首筋を撫でる風が冷たくなっているのを感じ、璃子はようやく膝に埋めていた顔を上げた。家を出てどのくらい歩いたのだろうか。そしてここにどのくらいしゃがみこんでいたのだろうか。冷たい風が泣き腫らした顔に心地よく当たると、ようやく少し冷静になった璃子はもう時刻が夕方六時を過ぎていることに気がついた。周囲は閑散としたビジネス街で、夕方だというのに人通りもまばらだった。いつのまにか繁華街を通り越し、駅の反対側まで来てしまっていたらしい。

見覚えのあるビル街を目にして、璃子は苦々しい思いに駆られた。

こんなところに来るつもりは無かったのに、全く無意識に歩いていったつもりなのに、ほんの十数メートル先には母親の経営するジュエリーショップが煌煌と明かりをつけて営業していたのだ。

早くここからも立ち去ろう。そう思っただけで立ち上がるつもりが、あまりに長い時間しゃがみこんでいたために上手く力が入らずに立ち上がれない。こんなところでウロウロしていたら、また何か不本意な現実を突きつけられるかもしれない。それよりもこの泣き腫らして尋常でない顔を見られたくない。璃子は焦った。

ふくらはぎと腿を握り拳でとんと叩き、両手を膝に当ててよいしょと立ち上がる。我ながらオバサンみたいだ、と自嘲気味に笑う。ホントにオバサンになれば、こんな子どもっぽいことで悩まないのかな。自分の家族を持っていたら、今の家族のことでなんか悩まなくても済むのかな。見上げた街頭の明かりがにじみ始め、璃子は慌てて手の甲でそれを拭った。

「璃子ちゃんじゃない！ こんなところで何してるの？！」

閑散としたビル街に突然若い女の大声が響き渡り、璃子の心臓は再び大きな手で驚き、みにされるような痛みを覚えた。ちらりと動かしただけの端に、ラメ入りの黒スーツを着て店先からこちらに手を振っている若い女の姿が見える。

大関という、母の秘書のようなことをしている女なので、璃子にとってもよく知った顔なのだが今はタイミングが悪い。いくら暗くなった時間帯とはいえ、近づかれたら泣いていたのがばれてしまう。どうしよう、と焦る璃子だったがそれに反して大関はこちらに近寄ってくることなく、ちよつと待っててと一旦店に引っ込んでしまった。

待っててと言われても今は事情がある。前髪をささっと手ぐしで整えて目元を隠し、少ししびれた足を引きずるようにして、璃子は店と反対側に向かって歩き出した。

「璃子ちゃん！」

再び店の方から大関の高い声がした。ビル街だから反響すること
を差し引いても、既に店から百メートルは離れているところに居る
璃子にまで聞こえる、よく通る声。直後にアスファルトを高いヒー
ルで走る、カツカツという音が背後からすごい勢いで近づいてきた。
ぐいっとな肩を掴まれて、璃子は観念して歩みを止める。

「待つてつてば！」

「大関さん、恥ずかしいよ……」

「え？何が？」

自分の声がよく通る大きな声だということに気がついていないの
だろうか、大関はきよとした顔をする。泣いて火照った顔を見
られないように、璃子は少しうつむいたまま大関の様子を伺った。
一日中仕事をして、その後ヒールで百メートル走をしたとは思えな
い程涼しい顔。ばっちり決めたメイクは崩れていない。そんな大関
は璃子にはい、と一枚の茶封筒を寄越した。

「何？これ」

「オーナーから、璃子ちゃんへって。せっかく会いに来てくれたの
に、今日これからオーナーとあたし、クライアントと商談なのよ。
そのお詫びだつて」

「お詫び……」

一瞬にして顔の火照りが治まってしまったかのように、璃子は頭から血の気が引いてしまうのを感じた。夜風のせいではない。ずっと自分が覚めた目になってしまったのが分かる。焦って立ち上がった、慌てて店に背を向けたり、自分の取った行動がいかに滑稽なことか。手にした茶封筒の軽さがとてつもなく空しい。無意識とはいえここまで歩いて来てしまったことに後悔し、璃子は無理やり目を細めて笑顔を作った。

「……ありがと、お母さんにも言うておいて」

「うん、ごめんね。もうあたしも行かないと時間ないわ。また今度ゆっくりね」

来たときと同じくハイヒールで走り去る大関の背中を、軽く手を振りながら見送る。しかし彼女はこちらを振り返ることなく店まで走りきると、そのまま店内へと姿と消した。それを見送ると、手にした茶封筒を乱暴にスカートのポケットに突っ込む。どうせ中身はいつもの一万円札だろう。そう、こんなのいつものことだ。璃子は胸に溜まった何かを吐き棄てるように、短いため息について店の看板を睨み付けた。

ポケットの中へ茶封筒を押し込むと、指先に堅いものが当たった。ストラップが付いている感触がある。いつもインターネット閲覧用に使っているケータイだった。あれ、と璃子は自分の背中や周囲をきよろきよろ見渡す。今更ながら璃子は自分が手ぶらであることに気がついた。鞆はおろか、財布すら持っていない。

この時間だ。家政婦は夕食の支度を終え自宅に帰ったのだろうか。父親はもう会社に戻っただろう。食欲は無かったが制服のまま夜の街をウロウロするわけには行かない。しかし財布や私服を取りに戻る気にもなれなかった。

束の間の逡巡の後、璃子はポケットに押し込んだ茶封筒を引っ張り出した。そつと中身を確認すると案の定一万円札が入っている。まだ時間は七時前だ。

璃子は踵を返して繁華街のショッピングモールへ向かっていった。

ショッピングモールの入り口に近い大きなショーウィンドウには、チェックのミニワンピースを着せられたマネキンが胸や腰の凹凸を強調するようにその体をくねらせている。店は夜の七時になっても高校生で混雑していたが、さすがに中学校の制服そのままの璃子は居心地が悪い。足早に客の波をかわしつつ、手早くロング丈のパーカーワンピースとデニムのショートパンツを選んでレジに向かった。

「以上でよろしいですか？」

店員の問いに無言で頷き、ポケットから一万円札を出した。ショッピングバッグに入った服は合計でも七千円弱。差し出されたつり銭とレシートを受け取ってそのままポケットにねじ込む璃子に、顔馴染みの店員は不審な顔を向けたようだった。詮索を避けるように、璃子は品物を受け取ると軽く会釈をしてレジを後にする。そのまま近くのコンビニへ駆け込むと、トイレを借りて買ったばかりの服に着替えた。足元が通学時と同じスニーカーだが、まあこれでも似合わないこともない。トイレの鏡で髪を直し化粧が剥げかけていることに気づくと、店の中のメイク用品コーナーのサンプルで眉とリップだけ整えた。

制服を詰めたショッピングバッグを斜めがけすると、とりあえず高校生くらいには見えそうだ。これで多少夜の街をうろついていても変に目立つことはないだろう、と璃子はやっと人心地ついた気分で路肩

の植え込みの下にしゃがみこんだ。

頬杖をつき、夜の街を行き交う人々に目をやる。しかし、色とりどりの靴を履いた人々がせわしなく通り過ぎていくのを、感情が伴わないガラス玉のような目に映しているだけで何を見ているわけでもない。焦点が定まらない無表情な視線は空を彷徨い、のっぺりとした起伏の無い脳内のスクリーンには父や母の姿が断片的に映し出されては消えていく。映し出される映像はモノクロで、父のスーツのグレーと母の口紅の色だけが鮮やかだった。

こんな時、いつも自分は何をしていたらう。塾でもあれば暇な時間も潰せただらうし、誰かと話していればこの空虚な気持ちも紛れただらうに、こんな日に限って塾は「定休日」。腹立たしいという気持ちも起きないが、気持ちの切り替えどころを失った璃子はぼんやりとしたままポケットからケータイを取り出した。

手に持ったケータイのアドレス帳から、適当な相手を見つけて電話をしようにも踏ん切りがつかなかった。電話は正直面倒くさい。というより、相手の都合を考えなければならぬのが煩わしく、クラスメイトも璃子も用件の殆どをメールで済ませていた。何かあれば時間も関係なく、すぐにケータイを片手にぱっとメールを打ち込み送信すれば、瞬時に、いやそうでなくてもいつの間にか返信が来る。手紙のように堅苦しくもじっくり考えたりする手間もなく、かといって電話のように時間や声音を心配する必要も無い。

文字面だけのやり取りは、相手との心地よい、しかし冷たい距離を作り出していた。

視線をケータイの画面に移し、璃子がかちやかちやとキーを操作し始めた。お気に入りに入れてある友人達のホームページや各掲示板などを画面に表示するが、どれもこれもテストが終わったという書き込みや結果を悲観する書き込み、他者の成績を気にする書き込みばかりだった。そういう流れに水を差すような気分でもない。そ

して数日間放置している自分のホームページを見た。クラスメイトが知っているはずのページであるにも関わらずカウンターが殆ど動いていないことに対して鼻でせせら笑う。

更新の有無より「絡み」の書き込みがなければ他人のホームページの閲覧さえしない友人たち。話題に乗り遅れないようにと必死に「絡み」コメントを入れていた時期もあったが、いつしかそれも面倒になって相槌と適当な絵文字で返すようになった自分。その返信も絵文字だらけの相槌だった。

話題などいつも代わり映えせず、まともな会話などもない。ただ、インターネットというツールで得られる連帯感が欲しいだけなのだ。

面倒くさい。

「絡み」は義務だ。ただ今はその義務を自分から請け負おうという気力も無い。膝を立ててしゃがみこんだまま、頬杖をとって璃子は自分の膝にその顎を埋めつつ溜息をついた。

親指でクリアキーを押すとさわやかな青い壁紙のサイトは閉じられ、ケータイの画面には無料サイトでダウンロードしたゆるキャラの壁紙が顔を出した。いつも無視できるそのキャラクターののほほんとした表情に苛立ち、璃子の親指はケータイをすぐさまインターネットへと接続する。そしてお気に入りの中から、これもずいぶんと放置している自分のプロフィールサイトを開いた。

友人に教えてもらったサイトだが、ここで璃子は年齢と名前を偽って登録していた。「子」の付く名前が気に入らなかったため、雑誌の表紙で可愛く媚びた姿を見たとき即座に「アキナ・十八歳」と打ち込んだのだ。別に他意は無い。指が勝手に動いただけだった。まるで個人掲示板のように頻繁にプロフの書き込みを更新しアクセスランキングを気にする友人が多かったので、登録後しばらくして

アクセスすらなくなっているサイトだ。

画面をスクロールしてランキングを見ると、放置しているだけあって随分下の方である。画面を眺めながら璃子は何気なしに編集ボタンをクリックする。プロフィールの編集画面が表示されると、親指一本で器用に画面をスクロールさせてページ一番下のウィンドウを開いた。

開いた「今の一言」を書き込むウィンドウに、璃子は「誰か一緒にいて」と打ち込んで更新ボタンを押した。アクセスランキングがこんなに下のプロフの、ほんの一言を更新したところで誰の目に留まるはずも無い。しかしただ一言書きたかった。精一杯の我慢をしている少女の漏らした本音だった。

更新を終えると璃子はそのままケータイを閉じ、植え込みの木に隠れて同化してしまうかのように、膝を抱えて顔を伏せてしまった。

その数秒後。

璃子の握ったケータイが、メールの着信を知らせるメロディーを奏でた。ぱつと顔を上げた璃子の顔は明らかに焦っている。心臓は鼓動を速め、指先に緊張が走る。このケータイのアドレスを知っているのは限られた人たちだけだった。自宅に鞆を落としてきてしまっているの、ひょっとしたら父親か、まさか母親がメールを寄越したのではないか。微かな期待と大きな不安が入り混じった表情で、璃子は意を決してケータイを開いた。

しかし、画面に表示された差出人は父でも母でもなかった。肩透かしを食らい、鼓動は急速にそのペースを落としていく。諦めに似た感情とどこかほつとしている自分の気持ちを誤魔化すように苦笑いしつつ、閉じようとした画面をもう一度よく見る。プロフサイトからのダイレクトメールの表示だった。何やらメッセージが届いたらしい。璃子は再びインターネットへケータイを接続させた。

メッセージは一通。開いたメッセージを読んで、璃子は迷わず返信ボタンを押していた。

どこいるの？ 付き合っよ？

困惑

待ち合わせのファミレスで、璃子はじつとりと汗ばんだ手の平を、何度も買ったばかりのワンピースに擦り付けた。

客の話し声とBGMでざわめく店内。繁華街にほど近く、少々遅いがまだ夕食時のせい、少なくともテーブルは高校生や若い客でほぼ満席状態である。店員達は皆せわしなく動き回り、客が食べ終わった皿がすぐさま引き上げられる様子は、まるで「早く帰れ」と客を急かしているようだった。璃子は一人でテーブル席を使っているのが申し訳ない気分になり、ドリンクバーのコーラを飲みながらソファの端で小さくなりながらケータイで何度も時間を確認した。

ホント？

最初のメッセージにそう返信すると、五分としないうちにまた返信があった。「右京」と名乗ったその相手が指定した時間は八時半。もう数分でやってくる。時間が経つにつれ、本当に来るんだろうかという不安が頭をもたげる。いつもであれば絶対無視するであろうナンパメールに即答し本当に待ち合わせ場所で待つなど、普段の璃子であれば考えられない。数ヶ月前にはナンパメールの相手に待ち合わせを約束し、待ちぼうけを食らわせて遠くから友人達と笑い転げた。

まさか今度は自分がその立場だとしたら。実は既に遠くから笑われているとしたら。客の全てが自分をからかうために集まっているのだとしたら。

ぞくり、と背筋に冷たいものが走る。目に見えない視線が絡み付いているようで、聞こえないはずの嘲笑が聞こえてきそう、璃子は必死に平静を取り戻そうとグラスのコーラを一気に飲み干す。時間を確認する振りをしながら、ケータイを何度も開いたり閉じたりして、液晶画面に表示されるはずのメールの着信を待った。

液晶に表示される時刻は一向に進まない。一分がその何倍、いや何十倍の長さにも感じた。焦れた璃子は再びケータイを開くとゲームサイトにアクセスし、そのトップページの一番上に表示されている新作ゲームをクリックした。

簡単そうなパズルゲームだったが、震える璃子の指では上手く操作ができない。一ステージもクリアできないうちにゲームオーバーになってしまった。溜息をつきながら、璃子はパチンとケータイを閉じてソファの背もたれに体を預けた。

突如、入り口近くの席で笑い声が起こった。若い女子大生風の四人組の声かけたたましくあたりに響く。場所をわきまえずに会話が盛り上がってしまったのだろう。一瞬の後、店内の注目を浴びたその笑い声は収束したが、璃子はケータイを膝の上で両手に握ったまま顔をあげることができなかった。手はじっとりと嫌な湿気を帯び、上気した耳に対して顔色は恐ろしく青い。震える手でケータイを開くと、既に約束の時間を三分過ぎていた。

帰ろう。

璃子はテーブルに置かれている伝票を掴むと、ケータイをパーカーワンピースのポケットにねじ込みながら立ち上がりかける。するとその時、テーブル脇へすっと誰かが近づいてくるのが見えた。

「アキナちゃん？」

男声だが軽快な低音。誰を呼んでいるのか、邪魔だ、とその人影を避けようとして、璃子ははっと顔をあげる。

そうだ。今、自分は「アキナ・十八歳」として待ち合わせをしていたのだった。その名前で呼ばれたということは、今ここに立っている人が「右京」だということか。本当に来たのか。ほっと胸をなでおろしつつ、璃子は恐る恐る声の主を見上げてみた。

年の頃は二十歳くらいか。男性は人懐こそうな笑顔を浮かべていた。それほど背は高くなく、細身のシンプルな白っぽいTシャツの首元にはキレイな色味のストールが巻かれている。金髪に近い明るい色の短髪を立たせているが、太い黒縁の眼鏡が落ち着いた雰囲気を出すのに一役買っているようだった。

「……はい」

あまりじろじろ見ては失礼だろう。ニコニコしながらこちらを見ている男性から視線を外し、璃子は小さく頷くと姿勢を正してソファに座り直した。よかった、と男性はそのまま璃子の向かい側の席へ腰を下ろす。テーブルの上にグラスしか乗っていないことに気がつく、さっとメニューを取り出して璃子の方へ開いた。

「ゴハン食べた？」

「あ、いえ、まだ、です」

「俺もまだだし、食べない？」

「あの、私……」

お金が殆ど無い、と言いかけると、男性はそれを片手で制してメニューを指差した。

「大丈夫、ここは奢るから気にしないで。腹減ってるし早く食べちゃおう?」

ニコニコしながらメニューを選ぶと、男性は呼び出しボタンを押して店員を呼んでしまった。せかせかと足早にやってきた店員にステーキハンバーグのセットを頼むと、璃子の注文を促すようにメニューを手渡してくる。店員を待たせるのも悪いと思い、璃子は恐縮しながらもおずおずとオムライスを指差した。

注文を繰り返した店員が厨房に去ると、二人の間にはなんとも言いがたい沈黙が流れた。何かしていなければ場が持たないように思えたが、混雑している時間でもあるため頼んだものがすぐに運ばれてくるわけもない。璃子は黙ったままケータイのストラップを弄んでいた。

そもそも最初のメッセージで会うことを決めてしまっていたが、今日の前にいる男性はこの誰なのか。何の目的で璃子にメッセージを送ってきたのか。改めて考え始めると実は結構危ないことなんじゃないか、と今更ながら璃子は後悔し始めていた。

「えっと……」

沈黙に耐えかねたのか、男性はポケットから財布とケータイをテーブルの上に取り出し、財布の中から何かカードのようなものを抜き出した。

「多分、ちょっと警戒されちゃってると思うんで。一応、俺こういう人ね」

抜き出したカードは免許証だった。手渡されてよく見ると、「中山右京」と書かれたソレは確かに目の前の男性の写真が付いていて、生年月日も現住所も記載されている。ハンドルネームだと思った「右京」も本名だと分かり、璃子は少々驚いた表情をして見せた。

「ホントに右京さんっていうんですね」

「そうそう。ハンネでも誰も本名と思わないでしょ？ 敢えて使ってるんだけどね」

けらけらと笑う右京に、璃子の表情もほぐれ始める。わざわざ身元を明かして来るとは思わなかった。それで安心というわけではないが、少なくとも誰だか分からないと後々泣きを見ることは少なそうだ。念のため、とそつと璃子は住所と生年月日を記憶した。

「ありがとうございます」

免許証を返すと右京はそれを財布に挟み込む。よく見るとその財布も海外の高級ブランドのものだ。さりげなく光る人差し指の指輪も璃子たちの世代ではちょっと手が出ない、シルバーで有名な高級ブランドのものと分かる。金髪に眼鏡、ブランド物。右京の動きに合わせてほのかに漂う香水の匂いが、塾や学校ではない、いつもとは違う大人と一緒にいることを意識させた。

「アキナちゃんは、ホントにアキナちゃん？」

「いえっ！…あ」

しまった、と璃子は口を押さえる。調子が狂ってつい口が滑ってしまった。しかし右京はそんなことは予想の範疇なのだろう。平然とした顔で話を続けた。

「で、どうしたの？」

「どうしたって……」

「誰か一緒に居てって、何かあったんだろ？ ナンパメールにほいほい付いてくるくらい」

飲みたい気分ならそれもアリだよ、と右京は続ける。見ず知らずの相手なのに、何故今一番欲しい言葉をくれるのだろう。ぎゅうつと胸が締め付けられるようで、璃子は黙ったまま首を横に振りつつ視線を膝に落とした。

「あ、アキナちゃん未成年だっけ。悪い、酒は無しだな。俺も車だし」

「車、乗ってきたんですか？」

「ん？ 俺、怠けモノだから」

「うち、いや、あたし、歩き……」

「うわ、すっごい健康的じゃん。俺もうメタボ一直線なのかもね」

右京はまだ掴む程もない腹回りの肉をつまむ真似をしながら、しれっとした表情でおどけて見せた。表情を探り探り会話のネタを探

してくれる右京に、璃子の堅く握られた手も次第に緩み始める。

「右京さん全然痩せてるし」

「そう？」

「うん、もっとオタクっぽい人が来たらどうしようかと思ってた」

「俺も十分オタクだよ、機械オタク」

「全然オタクっぽくないよ」

「毎日朝から晩まで研究室に籠って機械いじってるんだぜ？ 機械がトモダチ」

「仕事？」

「いや、大学院の研究室で。アキナちゃんは高校生？」

テンポよく進んだ会話に乗せられて危うく首を横に振りそうになり、璃子は慌てて数回大げさに頷いて見せる。さすがに中学三年生ですとは言いがたい。右京は自分を高校生だという点は疑っていないようだ。せつかく一人で鬱々とせずに済みそうな状況なのに、中学生だと言ったらすぐに右京でも引いてしまうかもしれない。ごまかすように璃子はテーブルに身を乗り出し、実はモデルなの、と小声でウソをついた。

「へえ、アキナちゃんかわいいのも納得だね」

目を丸くして驚く右京の言葉に、少しくすぐったくなって首を振

った。同性異性問わず「かわいい」という形容をよくされて慣れているはずなのに、何故か今は妙に気恥ずかしい。胸元で髪をくるくると弄びながら、顔が上気してくるのを感じた。

「別に。読者モデルとかだから。そういう子大勢居るし」

「謙遜謙遜。俺もラッキーかも、そんな子と会えて」

「あたしもラッキーかも。右京さんみたいな人だったらごはんも楽しそう」

顔を見合わせて二人でクスクスと笑う。ようやく緊張がほぐれ、タイミングを見計らったかのように注文した食事が運ばれてきた。待つてましたとばかりに右京はハンバーグステーキを頬張る。そういえば、給食の時間以外に人と食事を共にするのはいつ振りだろう。そんなことを考えながら、右京の食べっぷりに圧倒されつつ璃子もオムライスを口に運んだ。

合間に研究室のこと、趣味の車いじりのこと、好みの芸能人のことなど、右京が冗談を交えながら話し、それに対して璃子は笑いながら相槌を打っていた。右京が来る前までは店内のざわめきや笑い声に過敏になっていたが、今はもう全く気にならないどころか右京との会話以外耳に入ってこないようだ。

「右京さん、話上手い」

「そう？ メシは楽しくなくちゃ」

食後のドリンクバーを楽しみつつ、璃子は久しぶりの満腹感を覚えて驚いていた。最近空腹を満たすために何か食べたとしても、

ダイエットが気になったり食べる気がしなかったりで、脳が「満腹だ」と満足するまで食べていなかった気がする。おなかの張り以上に、食事を終えたときの満足感にびっくりしていたという方が正しいかもしれない。

さて、とコーヒーを飲んでいた右京が時計を見た。じきに十時を差す時計の針に、璃子はもっと進むのが遅くなればいいのにと願わずにはいらなかった。もっと話していたいと思っているのに、それが上手く言葉になって出てこない。不満を顕にした表情で右京を見た。しかし右京は伝票を手に取り、金額を確認しながら璃子に退席を促す。璃子の表情には気がついていないかのようだ。

途端に璃子の膨らんでいた心が、空気の抜けた風船のような勢いで萎んでいく。また一人であの家に戻れというのか。いつもいつも帰ろうと決心しなければ玄関を開けられない家に、今日はどうしても帰りたくない。少なくとも今はまだ「決心」ができないのだ。激しい焦燥感が璃子を襲った。

しかしどうしても言葉にならない。結局璃子は押し黙ったまま、右京が会計を終えるのを待って店の外へ出た。

ありがとうございました、とも言えない。まだ帰りたくない、とも言いたい。店の外で璃子は俯いて立ち尽くした。

「ゲーセンでも行く？」

「え……」

さらりと右京は言った。さりげなく差し出された右京の左手は、璃子の手が乗ることを待っているかのように大きく開かれている。

「まだウサ晴らしきれてないんだったら付き合っよ？ 格ゲーとかすつきりするけど？」

「何で……」

口にしていない要求をあっさり叶えられ、璃子は動揺を隠せなかった。見上げた右京の眼鏡の奥の目が、優しく璃子を見つめてくれている。

璃子は大きく頷いて、右京の手を取った。

二十二時以降のゲームセンターでは自称十八歳以上の人々で賑わっていた。

様々な電子音とBGM、人々の大声で璃子の耳はすぐ麻痺してしまったようだったが、不思議と手を引いてくれている右京の声はよく聞き取れた。それほど大きな声でもなく耳元で囁かれていたわけでもない。話すときに璃子の顔を振り返り、その大きな目を見ながら口を動かしてくれただけだろうか、単語の一つ一つがしっかりと聞こえるように感じた。眼鏡の奥に光る瞳がこちらを見る。その心地よさを求め、璃子の意識は右京の目に釘付けになっていた。

もっと見て欲しい。もっと話して欲しい。もっと聞いて欲しい。

暗めの照明やゲーム機の電飾、タバコの煙で視界は悪いはずなのに、右京とその周りだけは天気の良い屋外のようにクリアで鮮やか

に見えた。

しかし「ウサ晴らし」というだけあって、右京の選ぶゲームはハードなものばかりだった。話題のアクションゲームを皮切りに、シューティングゲームやレーシングゲームにダンスゲームまで、璃子はひたすら画面に集中し手足を動かさなくてはならなかった。時には右京と対戦し勝った負けただで大騒ぎをしたり、軽く暖房のついた店内で汗をかく程に興奮しながらゲームに興じた。

店内にある殆どのゲームをやりつくした頃、笑いすぎて息を切らせた右京が店の入り口近くにあるクレーンゲームを指差した。真面目そうなスーツ姿のカップルが、あれやこれやと言いながら景品を物色している。

「ああいつの、やる？」

「あたし下手なんだよね。右京さんは？」

「俺、すごい下手」

二人は顔を見合わせてくすくす笑った。下手なら誘わなきゃいいのに、という皮肉も出てこない。友達と遊びに来るとお互いのお財布事情ややりたいゲームに気を遣ってしまうが、今日は右京がリードしてくれたおかげでとことん楽しめた。迷う余地も無いほど次々とゲームの筐体へ引っ張って行かれ、どんどんコインを入れられてしまい結局全て右京に払ってもらっていたことに今更ながら気がつく。

じゃあさ、と璃子は手で顔を扇ぎながら店の一角を指差した。

「プリ撮ろうよ。あたし払う」

「いいよ、俺出すよ」

「いい。これはあたしに出させて？ 記念」

璃子は右京の腕を取り数台のプリクラ機に誘った。機体に垂れ下がるビニール製のカーテンには、壁紙の種類や落書き機能などの説明が添えられている。撮るなら一番かわいく撮れる機体がいい。璃子は右京の腕を引きながらざっと機体を物色すると、中の一台に目を留めた。

「これ！ 最新のだ！」

カーテンの中に入り右京を待たせるとコインを入れ、光量や壁紙等を調節する。ピンクと白のグラデーションの壁紙に決め、璃子は右京の元に戻った。ささつと前髪を直し、鏡でポーズを確認して右京に寄り添う。それを受けた右京の左手は璃子の肩に寄せられ、画面に映る二人は恋人同士が抱き合っているかのようだ。

とくんつと心臓が跳ねる。

次第に速くなっていく鼓動は、夕方とはまた違った種類の胸の痛みへと変わっていく。ヤバイ、とゲームではぐれたはずなのに、璃子はまた自分が緊張していくのを感じた。密着しているせいでこの高まる鼓動が右京に伝わってしまったか、少しだけ体を離そうとするが右京の手が背中から肩にかけられているのでなかなか難しい。無理に体を離せば右京が気にするかもしれない。せつかく仲良くなれた気がするのに、そこに水を差してこの満足感を失うのは怖かった。

赤くなっていく頬と耳を意識しながら、それをごまかすように璃子は手を伸ばして撮影ボタンを押した。

タイマーが作動する音が響く。

しかし数秒後に聞こえるはずの、シャッター音は璃子の耳には届かなかった。

突然目の前が真っ白になったように感じ、璃子の思考は停止した。かろうじて感じる頬に当てられた手の平の冷たさと、こつんと軽く小突かれた額の痛みで我に返る。目の前でちかちか星が瞬いているような、足が地面から離れてふわふわ浮いているような、不思議な感覚に璃子はよろめきながら右京に体を預けた。

厚みのない右京の胸だが、華奢な璃子を受け止めるには十分だ。頬に感じる筋肉の弾力に戸惑いながらも、璃子は自分の体に力を入れることができない。夢うつつの璃子の肩を抱き、右京はデータ確認する。そして悪戯っぽくも満足げな表情で、データをケータイへと転送すると写真を璃子へ手渡した。

「ほい、記念」

指先に上手く力が入らないまま璃子が写真を受け取ると、そこにはなんとというタイミングの良さだろうと感心する程によく撮れた、二人のキスの瞬間があった。

思惑

こんなに心穏やかに、また胸を高鳴らせて目を覚ましたのはいつ振りだろう。

見慣れた自室の天井やカーテンが朝日を浴びてきらきらと輝いている。レースのカーテン越しに見える空は真っ青で高く、これが日曜日であれば行楽日和とも言って出かけたくなるような天気だ。いつもより三十分は早く目覚めた璃子だったが、二度寝に移らずベッドから身を起こして傍らに置いてあるケータイを手に取った。さすがにメールの着信は無いが、待ち受け画面を見ると頬が緩むのを止めることができない。

帰りの車の中で撮った、右京とのツーショットである。

昨夜はゲームセンターを出た後、結局右京の車で自宅まで送ってもらってしまった。帰宅するにはまだ発散し足りないところもあったが、平日だったということもあり外泊するのも気が引けてしまったからだ。もちろんさすがに初対面の男性と一晩共に過ごす勇氣もない。零時を回っても相変わらず真っ暗な自宅を見たとき少しだけ帰りたくないといふが、髪を撫でながら静かに右京がなだめてくれたおかげで、別れた後も部屋に入るなりすぐ眠りにつくことができた。

しかし着替えも入浴もしないままベッドに倒れこんだので、服や髪にはファミレスやゲームセンターで付いたのであるうタバコの臭いがこびりついている。顔をしかめて服を脱ごうとすると、雑多なおいの中で不意に右京の香水の匂いが鼻腔をくすぐった。ずっと右腕を右京に絡ませていたせいだ、パーカーワンピースの右袖から右京

の残り香がするようだった。

別れ際にもう一度重ねた唇の感触を思い出し、璃子はそつと自分の唇を指でなぞる。別にキスなんて初めてというわけでもないのに、思い出すだけで胸が高鳴るのは何故だろう。照れ笑いがこみ上げ、璃子はベッドから跳ね起きると勢いよくバスルームへと走っていた。

小走りに階段を下りると、玄関の端に璃子の鞆がきちんと置かれていた。一瞬ぎくりとして調べてみたが、中身を開けられた形跡も無く返却されたテストも璃子が束にして折り畳まれたまま入っていた。父がこの鞆に気がついたのだろうか、それともあの女か。帰宅するなり小学生のように鞆を放り投げて遊びに行つたとも思っているのだろうか。いずれにせよ今の璃子にはそんなことどうでもよく思えた。おそらく「昨夜の夕食」が並べられているダイニングには目もくれず、シャワーを浴びると手早く身支度を整えて家を飛び出した。

今日は職員会議だかなんだかで確か午前放課のはずだった。午前放課の日は塾で講師らを相手にしゃべり倒すのが常だったが、今日はおもしろい塾までの間の時間にまた右京と会える時間が取れるかもしれない。昨夜のうちに直メールのアドレスと電話番号はもらっていたので、大学院がどういったところか良く分からないがメールや電話をするくらい大丈夫だろう。そう思うと璃子の足取りは益々軽くなっていった。

向かう先は繁華街のはずれにあるファーストフードの店だ。今朝は登校するまでずいぶん余裕がある。いつもはコンビニで済ませる朝食も、今日は鞆に財布もあることだし気分も良い。璃子はちよつと寄り道して豪華な朝食を楽しむことにした。

朝も早いというのに店は大学生らしき客やサラリーマン風の客で賑わっていた。さすがに店内に中学生の姿は見当たらないが、夜遅くにジャージで来店しているわけでもないでそれほど奇異の目を向けられることも無い。何せ「孤食」が問題視される世の中だ。世間もきつと璃子を「かわいそうな子」だと思ってくれるだろう。璃子は朝食メニューの中からホットケーキセットとサラダを選び、会計を済ませて品物を受け取ると窓際のカウンター席に座った。

温かいうちにホットケーキを平らげると、サラダをつまみながらポケットからケータイを取り出した。メールボックスを開いて、おそらくまだ寝ているだろうと思いつつも右京にメールを打つ。

おはよ！ 今日午後から学校休みで時間空くんだけど、会えますか？

打ってから、璃子はふと考えた。いつもの癖で絵文字を駆使したメールになっちゃったが、大人の男性は絵文字入りのメールにどんな反応をするだろうか。それもぱつと見ただけでは絵と助詞が連なる暗号のような文面だ。さすがにこれは読めなかったらまずい、と全て文字で打ってみたがそれはそれで堅い文面になる。会いたいということ伝えたいのに、これではそっけなさ過ぎないだろうか。璃子はサラダを右手のフォークで弄びながら、ああでもないこうでもないメールの文面を消しては打ち、打っては消してという行為を繰り返した。

同世代の男の子と付き合ったときはこんなに迷うことも無く、お互い一方的に暗号のようなメールを送りあっていたものだった。「カレシ」がいることがステータスのようなものだから、カッコさえ良ければ別に会話の内容なんてどうでも良かったし覚えてもない。好きだったかどうか怪しいくらいで、別れるときも「なんとなく」

が理由として認められた。

しかし右京に対する感情は別物だ。自分からそばに居たい、幻滅されたくないという思いが自然と湧いてくる。昨夜たった数時間一緒にいただけなのに、彼は初めから璃子の欲しい言葉をくれた。あの心地良さと安心感を手放したくない。

これならどうか、この絵文字は使っていいか、子どもっぽいと思われないか。ケータイを片手にサラダをかき混ぜ続けながら、璃子の表情はこころ変化を続けた。近くに座っていた客が席を立てても、また別の客が隣に座っても、それすら気がつかない程に璃子の視界はケータイの画面に集中している。

結局二十分以上もサラダをこね回した拳句にメールの文面が決まらず、溜息を吐きながら璃子は顔を上げてしまった。レジ付近の時計に目をやると時刻は既に七時半を回っており、そろそろ学校へ向かわねば遅刻してしまう。皿の上でぐちゃぐちゃに混ぜ合わされたサラダを急いで掻きこむと、傍らのドリンクを一气飲みしてトレイを片付け店の外へ駆け出した。

璃子は歩きながらケータイをかちやかちやと弄り続けた。文面がどうしても決められなかったのだ。しかし学校に近づくにつれ徐々に道行く生徒の数も増えてきた。クラスメイトに声をかけられたらメールどころではない。仕方なく璃子は初めに打ち込んだメールを日本語に直し、文末には申し訳程度に絵文字を添えて送信ボタンを押した。

押してしまつてからもあれで失礼がないか、変に思われないか、返事は来るか、等様々な思いが頭をもたげてきた。そんなことを考えていると、余りに自分がカッコ悪く思えて笑えてくる。璃子は自分自身に対して笑いを押さえられず、ケータイをポケットにしまいながら弾む足取りで校門をくぐった。

学校には本来ケータイは持ち込み禁止だ。とはいえ持ち物検査は

抜き打ちで行われることも少ないため、ケータイを持っている生徒はかなりの割合で鞆に忍ばせて持ち込んでいる。その中でも璃子は友人たちとのやり取りで使ういわばオフィシャルなケータイと、ウェブサイトを閲覧などに使うプライベートなケータイの二つを持っている。

見つかる厄介なので、いつも学校にいる間は鞆の奥にメイクポーチと一緒に入れておくのだが、今日は少しでも早く右京から来るであろうメールを確認したい。こっそりポケットに忍ばせたプライベート用のケータイを手探りでマナーモードにして、授業中や休み時間ごとにちらちらと着信が無いかチェックした。おかげで授業の殆どをうわの空で過ごしてしまい、指名されても満足に答えられない失態を演じてしまった。

しかし四時間目が終わる頃になっても、右京からの返信は無かった。

大学院はどういったところか、中学生の璃子には分からない。朝から行かなくてもいいところなのか、まだ寝ているのか、それともメールに気がついていないのか、返信をしてくれないだけなのか。期待に膨らんだ胸は時間の経過と共に急速に萎み、今度は言いようも無い不安が璃子の思考を支配する。

ウソアドレスだったらどうしよう、でも昨夜はオヤスメメールが来たからウソアドじゃない、じゃあ絵文字がウザかったのか、やっぱり日本語ばかりで堅かったのか、それとも右京に何かあったのではないか。

考え始めたらキリが無い。朝の穏やかな気持ちはどこかへ吹き飛んで、璃子は泣きたい気持ちをどうにか我慢しなければならなかった。授業が終わったらもう一度メールしよう、と時計と机の上のノートへ交互に目をやる。一分、一秒が昨夜右京を待っていたときより長く感じた。

「璃子、今日どうしたの？」

四時間目が終わり帰り支度をしていると、さすがにいつもと様子が違うことに気がついた沙希が声をかけてきた。小柄な体で精一杯背伸びをして、璃子の額に手を当てる。

「顔色あんま良くないよ。熱とかある？具合悪いの？」

「ううん、別に平気。ちょっと昨夜寝るの遅かったかも」

そう、と沙希は璃子の額から手を離れた。小首をかしげながら唇を尖らせ、不審そうな表情を隠さない。沙希は情報通だ。勉強はできるほうではないが人当たりが良いせい、友人も多く話題が集まりやすい。しかし逆に言えば色々な人に話しかけて情報を握りたがる、取材癖というような一面も持っていた。璃子にとって話題の情報源ともなる相手ではあるが、あまり自分のことは詮索されたくない相手でもあった。

「それよりさ、前島、学校来ないね……」

さりげなく話題を変えるため、璃子は窓際の席に目をやりながら例の彼の名前を口にした。

「ああ。あいつね。なんかネットでいろいろ書かれて人間不信みたい」

テストも保健室だったらいいよ、と沙希は付け加える。間にテスト期間を挟んだおかげで、教室の中では既に前島の話題に触れる生徒はいなかった。表立って非難や嘲笑を口にする者もない。しか

しその反面、表には見えないネット等の書き込みは相当酷い中傷もあったようだった。テスト勉強の傍らで経過観察のために掲示板を見ていた璃子も、目を覆いたくなるような口汚い中傷が書かれているのを知っている。それらを誰が書いているのか分からない。そんな状況であれば人間不信で教室へ来れないのも当たり前だった。

ほんの少しだけ、璃子は自分の胸がチクリと痛むのを感じた。

「カワイソーだよね」

「うん……あ！ ごめん！ 帰る！！」

突然、璃子のスカートのポケットが小刻みに震えだした。メールの着信を知らせるリズムに、呼応するように心臓が飛び跳ねる。あつけにとられた表情の沙希を残し、璃子はばつと制服の上からケータイを押さえると、机に置いてある鞆を抱えて教室を飛び出した。

息を切らせて校門から走り出ると、すぐさまポケットのケータイを取り出してメールをチェックする。差出人を見て璃子は顔をほころばせた。待ちに待った右京からの返信だ。その名前を目にしただけで、璃子の頬は少し紅潮し胸は高鳴る。「会える」という答えを疑いもせず、もどかしい思いを抑えながら璃子は受信メールを開いた。

しかし次の瞬間、璃子は表情を曇らせた。予想に反して右京の答えは「今日は会えない」といったものだ。すうつと頭から血が降りていく感覚が璃子を襲う。約束をしていたわけでもなんでもないし、右京には右京の都合があるだろう。根拠無く舞い上がっていた自分が悪い。そんなことは十分分かっているはずなのに、璃子の心は急に足場を失ったかのようにぐらついた。

ケータイをパチンと閉じポケットにしまいこむ。歩道のアスファルトの裂け目から生える雑草を、つま先でザッと蹴り払った。通り

過ぎていく下級生達が驚いた顔で璃子を振り返り、何事か囁きあいながら去っていく。それを苦々しい思いで睨みつけ、璃子は吐き捨てるような溜息を漏らした。

「バツカみたい」

誰に対して言ったものか。自分でも分からないまま、璃子は踵を返して早足で歩き出した。向かう先は繁華街の外れにある塾。こうなったら教務室で仕事の邪魔をして過ごそう。講師たちの困った顔を思い浮かべながら、璃子は仏頂面を隠すことなく歩き続けた。

「まいどー!!」

勢いよく教務室の扉を開けると、中に居る講師達は一斉に驚いた表情で璃子を振り返った。塾もまだ始業したばかりで生徒の来訪など予期していなかったのだろう。ざっと見渡すとあからさまに渋い顔をした相田と目が合う。璃子は顎を上げてわざと得意気な表情を作り、相田のデスクへと近寄った。

「何しに来やがった、こんな早くに。一旦家帰れよなあ」

「いいじゃん別に。帰っても誰も居ないしっ」

「ったく、何なんだよ。ベンキョーしろ受験生」

「そついうことはこれ見て言つて？」

あっちへ行けとばかりに手を振る相田に対し、璃子は鞆から数枚の紙の束を取り出して広げて見せた。

「じゃーん！」

おお、と相田の目が丸くなる。当たり前だ。璃子が広げたのは昨日返却された五教科の答案用紙。そのどれもが満点なのだ。

「どう？　頑張ったでしょ？」

「おお、すつごい頑張ったなあ。お前最高！　璃子さんカッコイイ！」

先程とはうって変わって、相田は満面の笑みを浮かべて璃子の頭をくしゃくしゃに撫で回した。相田の大声に講師達もどれどれと集まってくる。その誰もが答案を見るなり目を丸くして璃子の顔を振り返り、次の瞬間には璃子が望む最大限の賞賛の言葉を浴びせてくれた。

「璃子すごい、500点満点なんて初めて見た！」

「よく引つ掛けにもかからなかったなあ。頑張った」

「さすが、今回気合入ってただけのことはあるわ。よくやったね、璃子」

「もちろん校内1位だろ？　つかこれで通算何回目？」

絶え間なく降り注ぐ賞賛は璃子のプライドを十分満足させる。ずっと相田に頭を撫で回されるままにすることで、イラついた心の隙間が埋まっていくのを感じた。

「昨日全部返ってきたんだよね」

本当に見せたかった相手には見せられなかったけど、とは言えない。思い出したくもない光景が浮かびそうになり、璃子は慌てて相田の腕を取って立ち上がらせた。

「頑張ったからご褒美！」

「何だそれ」

「コーヒーでいいからさっ」

「しょうがねえなあ」

内緒だぞ、と相田はデスク脇に置いてある鞆から、チョコレートの箱を取り出した。食玩入りのそのチョコレートは最近特に相田が気に入って買っているらしく、デスク周りはおまけのゆるキャラフィギュアたちで溢れかえっている。それをそのまま璃子に渡すと、相田は哀願するような目で言った。

「フィギュアは俺んだからね」

その間の抜けた声に、璃子は思わず大笑いをしてフィギュアを返してしまっただった。

璃子がチョコレートを食べ始めると、テスト結果で沸いた教務室

も次第に落ち着きを取り戻し、講師たちはそれぞれの仕事に戻っていった。相田もデスクのパソコンに向かい、帳簿のようなものを開きながら何か入力作業を始めてしまった。

こうなると璃子の居場所はない。キーボードを叩く音やコピー機の作動音のおかげで静寂とは程遠い空間ではあるが、璃子は仕方なしに空いているデスクに陣取って問題集とノートを開いた。一応勉強するポーズくらい見せておかなければ、いかに璃子とはいえ教務室から追い出されてしまう。

時折チョコを口に運びつつ、問題集に取り組んでいる振りをしながらポケットのケータイを手探りで弄る。マナーモードになっているのだから、バイブレーション機能が作動しなければメール着信も無いということは分かりきっているのに、璃子は未練がましく右京からの連絡を待っていた。

夕方はムリでも夜なら会えるよ。

期待したらショックが大きいただけだということは分かっている。しかし、璃子はそんな都合の良いメールが来ることを祈らずには居られなかった。しかしケータイは璃子の祈りを無視するかのように沈黙を守り続けた。いつの間にかチョコレートの箱は空になり、手持ち無沙汰となった璃子は盛大に溜息を吐いた。

「お前、景気悪いことしてんなよ」

作業の手を止め、相田が璃子を振り返る。ほぼ真っ白なままのノートに気がつく、大袈裟に肩をすくめて首を振った。そして璃子のスカートのポケットにちらりと視線を走らせると、自分のポケットを意味ありげにばんばん叩いて見せる。どうやら手探りでケータイを弄っていたこともバレてしまっているらしかった。

初めから勉強するつもりで来たわけではないが、いざバレていると分かるとばつが悪い。璃子は照れ隠しに口を尖らせて、椅子に座ったまま大きく伸びをした。背もたれが軋んで嫌な音を立てる。

「テスト終わったばつかだもん、勉強したくないし」

「受験生だろ？」

「息抜きも必要だって言っただじゃん」

「だったら帰れよ」

「やだ、帰ってもつまんないし」

ぶくつと膨れて見せると、相田はやれやれといった表情で立ち上がった。一服するつもりなのだろう。背広のポケットにライターがあることを確認すると、目で璃子を促して教務室から出て行った。どうせここにおいてもケータイを弄るかノートに落書きをするか、やることは限られる。璃子は促されるまま相田の後に付いて教務室を出た。

てつきり給湯室で一服するのだと思っていたら、相田は階段を降りて外へ出て行ってしまった。訝しく思いながらも付いて行くと、どうやら相田はタバコそのものを切らしてしまっていたらしい。隣のビルの入り口にある自動販売機に向かって小銭を投入しているのが見えた。ダメ元だ、と璃子は少し甘えた声で相田に擦り寄った。

「ジュース奢って？」

「自分で買え」

「ケチー」

やっぱりなと思いつつも、璃子は相田に少し感謝した。昨夜のコーヒーやタバコの臭いが残る教務室に居続けるより、ちよつと寒い気もするが外の空気を吸っていたほうがいい。相田は璃子の風下に回り込み、買ったばかりのタバコに火を付けた。璃子は階段にしゃがみこみ、相田がゆっくりと吐き出す煙をぼうつと眺めていた。

「璃子さー」

「ん？」

「志望校どうすんだ？」

唐突な質問だった。ゆらゆら揺れる煙に見とれていた璃子は、質問の意図が分からずきょとした顔を相田に向けた。志望校ならとつくに希望調査票を出してある。通える範囲内で一番偏差値の高い高校だ。それを知らない相田ではないはずである。

「どうするも何も……」

「いや、A高のままだってことは分かってんだけどさ」

目の前の通りを走り抜けていく自動車を眺めながら、相田は一息深くタバコの煙を吸い込む。

「お前さ、通える範囲で一番つてとこ選んだだろ？」

「当たり前じゃん」

「そうじゃなくてさ、どうせならって気持ちにならないか？」

「どゆこと？」

未だに相田が何を言わんとしているのか把握できない璃子は、首をかしげて相田を見上げた。五教科満点を取ったのに、この辺で一番の偏差値を誇る学校を受けるなどとも言いたいのか。煙を吐きながら言葉を濁す相田に少し苛立ち、璃子は次第に唇を尖らせていく。しかしそんな様子を意に介した風でもなく、相田は璃子と同じようにしゃがみこんでゆつくりと話を続けた。

「んとさ、璃子、K高校って知ってるだろ？」

相田の口から出た言葉に、璃子はこくりと頷いた。県内で一番偏差値が高く、部活動も盛んな高校だ。県内の各中学校から、選りすぐりの精鋭達が集まるという噂は聞いたことがある。ただし、酷く交通の便が悪く、殆どの生徒が併設されている寮に住んでいるらしい。ものすごいところだなあという感想以外、持ったことがない高校だった。

しかし相田の次の瞬間、その程度の感想しか持ち得なかった璃子にとって、衝撃の一言をあっさりと放り投げた。

「どうせならさ、受けてみないか？K高校」

「え？」

「だからさ、今日の結果もそうだけど、今までの模試の成績も含めて考えても圈内だと思っただよ。チャレンジしてみる気はないか？」

あまりの衝撃に、璃子は言葉を返すことができなかった。いつの間にか「高校は家から通うもの」と勝手に思い込んでいた璃子にとって、K高校への進学など考えたこともなかったからだ。瞬きすることも忘れ、大きく見開いた目で相田を凝視する。当の相田は次々に走り去る車を眺め、璃子の様子を伺うことも無くゆっくりとタバコの煙を燻らせていた。

「ちょ、待って、考えたことも無い……」

やつのことでそこまで言うと、璃子は混乱した頭を整理するべく数回深呼吸をした。言われたことが少しずつ飲み込めて来ると同時に、心拍数がどんどん上昇していく。いつの間にか固定観念に囚われていた自分が急に恥ずかしく思えてきた。

「まあさ、急な話だからびつくりしたかも知れないけど。俺、璃子がA高つてもつたいねえと思うんだよな」

「……うん、ちょっと、びつくりした」

「もちろんお前がA高でやりたいことがあるなら全然構わないと思うし、K高行くとなると多分寮だから、無理にとは言えないけどさ」

混乱した璃子を落ち着かせるように、相田は穏やかな口調で続けた。低い声が耳に心地よい。璃子は次第に落ち着きを取り戻し、「K高校」の受験について考え始めた。

模試の成績は今のところA高が余裕で合格圏内である。K高の偏差値がどの程度高いのかはつきりとは分らないが、相田の話し振りは合格も見える範囲なのだろう。大学に行くにも偏差値の高い高校の方が有利なのだろう、とも思う。「県内一」のブランドは、璃子のプライドをくすぐるのに十分過ぎる程魅力的だった。

「うち、受かると思う?。」

「無理じゃない。今まで通りやってりゃ十分狙える」

それにさ、と璃子を振り返って相田は続けた。

「お前だって今より目標が高くなった方がやりがいあるだろ?。」

口角を上げてにやりと意味深に笑う相田。その笑みに後押しされるように、璃子はこくりと頷いた。受験勉強へのモチベーションが急激に上がっていく。璃子は立ち上がると、冷えた空気を胸いっぱいに吸い込んだ。相田はそれを満足そうに眺めると、手に持っていたタバコをアッシュケースに入れながら立ち上がる。璃子もぐつと腰を伸ばして空を見上げた。

「ベンキョ、しよっかな」

秋の晴れた空に向かってぽつりと、しかしはつきりと呟く。相田も同じように空を見上げ、璃子の頭にぽすと手を載せた。手の重みと暖かさがじんわりと伝わってくるようだった。

「偏差値とか倍率とか、内申とかそういったのは調べといてやるよ」

「うん」

二人は顔を見合わせると、悪巧みを共有した友人のように笑い合っ
てビルの階段を登っていった。

教務室に戻ると相田は受験資料だろうか、デスクの引き出しから

出した数枚の書類をコピーし始めた。璃子は本棚に並べられている受験問題集を手に取り吟味をする。まだ相田と二人で話し合っただけなので、本当に受験するかどうかは分からない。しかし一回テンションが上がってしまったため、何かやらなくてはどうにも落ち着かない気分だった。

「受験勉強する気になったの？」

「うちいつもやる気だしっ」

伊東の茶化しにも笑顔で応えつつ、璃子は次々とハイレベルな受験問題集を手にとってぺらぺらと捲り続けた。いざやる気になってみると、問題集に掲載されている設問があれもこれも苦手問題に見えた。全て解いてみないと気が済まないような気分になる。

少しずつ問題を見る目に熱が籠り、集中した璃子の耳には周囲の音が聞こえなくなってきた。視野は極端に狭くなり、一問一問、いや文を構成する文字そのものが目に飛び込んでくる。外気で冷えたはずの体が徐々に熱を帯び、頭にどんどん血が上っていくのを感じた。

次第に璃子の表情には余裕が無くなり、代わりに焦りと苛立ちの色が浮かび始める。

「りーこ、熱くなり過ぎ！」

ぽこんっと軽い良い音と共に、璃子は相田に頭を小突かれてはつと我に返った。問題集の一部に集中していた視野が急激に開け、目の前がふっと明るくなった。相田は手に持ったコピー用紙を筒状に丸め、我に返った璃子の頭をまだぼすぼすと小突き続けていたが、その軽い音と程よい刺激ですっと肩の力が抜けていく。柄にも無く熱くなってしまったところを見られ、璃子は照れ笑いを浮かべつつ

コピー用紙を受け取った。

「学校概要と受験要綱。去年のだけと殆ど変わんないと思うから、持ってけ」

「うん、ありがと」

受け取ったコピーを開いて璃子は学校概要に目を通した。規模はA高に比べて小さいが、大学進学率や部活動の成績も掲載されていて興味深い。進学先も有名な大学ばかり載っている。

上等だ、と熱を帯びた目が力強く煌く。

「問題集とかは無理に新しいの買ったりしないでいいから。今あるのと、ここにあるやつで良いのあったらコピーしてやるよ」

「うん。分かった」

「一応さ、変更するんだったら家の人とも相談しろよ?」

「いいよ、レベル上げるんだったら文句無いと思うし」

心配そうな相田に対し、璃子は関係ないと手を横に振った。いつ話したのかも忘れてしまったが、A高を受けるのだって「偏差値が高いから」という理由で全く反対もされなかった。更に今回は、A高校より偏差値が高い学校なのだ。反対される訳が無い。

受かったら、と淡い期待が頭に浮かぶ。しかし璃子はその僅かな思いを振り払った。鞆を放置していたデスクに戻り、おもむろに学校のワークの問題を解き始める。その様子に相田はやれやれといった表情で肩をすくめると、ようやく静かになった璃子の隣で自分の

仕事に戻っていった。

それからどのくらい時間が経ったのか。集中していた璃子の耳に教務室のざわめきが戻ってきた。甲高い声に気がつき壁の時計を見上げると、時刻は既に五時を指している。ワークの問題に集中しすぎて、小学生達がやってきたらしいということを理解するのに少し時間を要した。息を吐きながら首を回すと、頸椎のあたりからぼきぼきと音がする。璃子が椅子に腰掛けたまま大きく伸びをするとほぼ同時に、教務室のドアが開く音がした。背筋が伸びる感覚に目を細めた璃子の視界に、黒いスーツを着込んだ明るい髪色の男の姿が飛び込んできた。

「おつかれさまです！」

その男が発する聞き覚えのある声に、伸びをしたまま璃子の体はびくりと反応する。まさか、という思いで璃子はぱつと体を起こした。

目が合った瞬間、璃子はあまりのことに息を飲んだ。絶句、とはまさにこのことだろう。入室してきた男も璃子を見たまま、口をぱくぱくさせている。

「ああ、中山先生お疲れ様です。璃子、こないだ言ってた非常勤の中山先生だよ。中山先生、彼女は中三の橘璃子。」中のトップなの

戸口近くにいる伊東の声が、小学生達の歓声の中で必要以上に大きく響いて聞こえた。啞然としたまま、それでも男は平静を装い璃子に軽く会釈する。しかし璃子はそれに応える余裕さえ無くしたまま、ただ男を凝視するしかなかった。

教務室に入室してきた非常勤の男は、まさに昨夜の右京その人であったのだ。

恋慕

自分がハイクラスの教室にいることを、今日程ありがたいと思う日は無いだろう。

腋の下に嫌な湿り気を感じつつ、璃子は一心不乱に黒板の板書をノートに書き写し続けた。いつもより二色も余計にカラーペンを使い、解説と自分なりの解釈、疑問点を余さずノートに取る。相田の流暢な英語に耳を傾ける余裕は無い。「授業」に集中するだけで精一杯だ。

気を抜くと右京の驚いた顔が浮かび、思考が止まりそうになる。あれ程望んでいた右京との再会だったが、結局璃子は動転しすぎて笑顔を見せることもできないままハイクラスの教室へと逃げ込んでしまった。隠しておきたかった年齢のこと、本名のこと、学校のこと。まさかこんな形でいきなりバレてしまうなんて考えてもいなかった。

右京は今隣の教室で授業をしているのだろうか。

耳を澄ませると微かに彼の声が聞こえてきた。ひたすら授業に集中して平静を保とうとしているのに、右京の声はそれをも容易く邪魔をする。昨夜の出来事が一気に蘇り、ついに璃子はその集中力を手放した。

会いたい。でも今は会いたくない。相反する気持ちがり闘ぎ合い、璃子の思考を支配する。でもウソをついていた自分、本当は子どもな自分、全てが恥ずかしく、嫌われてしまったらどうしようと思うと体が震えそうだった。そう考えるだけで指先に力が入らなくなる。授業中だというのにノートを取る手も止まり、璃子は視線を落としてしまった。

「璃子、大丈夫？」

長机を共有している沙織が心配そうに璃子を覗き込んだ。授業の妨げにならないように、小声でそつと声をかけてくる。璃子は首を振りながら、大丈夫、と答えた。しかしほんの6畳程の広さしかない教室だ。二人の囁き声もすぐ相田の耳に届いてしまったようで、ちらりとこちらに視線を送ってきた。睨まれたわけでは無かったが相田の無言の圧力に、二人はそれ以上会話を続けることができずに姿勢を正す。

このままずっと授業時間で、教室から出ないで居られたら良いのに。

教務室で会ったことをリセットできたら良いのに。

しかしそれがいかに非現実的なことか、璃子は十分に承知している。暗澹たる気分のまま、璃子は再びペンを握りなおしてノートを取り始めた。

そしてその数分後、璃子の意に反して合計120分の授業時間は瞬く間に終了し、講師達が教室のドアを開けてしまった。ばらばらと教室の外へ飛び出す生徒達を横目に、璃子はのろのろとテキストを鞆にしまっていた。外へ行くには教務室の前を通らねばならない。できることなら教室の窓から下に降りてしまいたい。

荷物をまとめ終わると、璃子は教室の戸口からそつと廊下を伺った。まだ廊下やロビーは講師に質問をしたり雑談したりする生徒達で溢れている。教務室の前には人だかりができ、中から黄色い歓声が聞こえてくるようだった。今なら見咎められずに外へ行くことができる。璃子は意を決して教室の外へ出た。

できるだけ目立たないように、何食わぬ顔で、足早に教務室前を通り過ぎて階段を降りかけたその時。

「璃子っ！」

教務室の中から大声で呼び止められ、璃子はぎくりと立ち止まった。恐る恐る振り返ると、「中の女子達がきゃっきゃと騒ぎながら窓の向こうで手を振っている。その中心には明る過ぎる髪色の男性講師が困った顔をしながら座っていた。若い右京に女子生徒が色めき立ったのだらう。教務室は」中以外の女子も集まり、大騒ぎである。

動揺を悟られまいときこちない笑顔を作りながら、璃子は辛うじて彼女達に手を振った。しかし、彼の両腕にそれぞれ一人ずつ女子生徒が腕を絡ませているのが見えた。ふと右京の目に焦りの色が浮かぶ。その表情を見た瞬間、璃子の笑顔は凍りついてしまった。

胸を締め付けられるような苦しみと同時に、どす黒い感情がこみ上げてくる。手足や頭から血の気が引いていき、反対に目頭や頬が熱くなってくるのが分かった。感情がコントロールできなくなる恐怖に襲われ、ヤバイ、と直感的に璃子は顔を背ける。そのままの勢いで頭を下げると、全速力で階段を駆け下り建物を飛び出した。

背後で自分と呼ぶ女子生徒の声がしたが、今の璃子に振り返る余裕はない。普段であれば人通りがなくなるまで塾の近くでケータイ弄りをしているが、今日はもうとにかく一刻も早くこの場から逃げ出したかった。そうでなければ、人目を憚らず泣き出してしまいそうだったのだ。泣いてしまえば訝しがられる。きつと右京にも迷惑がかかるだらう。黒い感情に支配されるより、右京に迷惑がられるかもしれない恐怖が璃子を追い立てた。

息が切れる程の速さで大通りを駆け抜け、住宅街に着く頃によ

やく璃子は足を緩めた。

「走ってばっかじゃん、うち」

昨日からの自分を振り返り、自嘲気味に呟くと大きく息を吸い込んで立ち止まる。全力で走ったおかげで体中が酸素を欲しているようだった。額にはじんわりと汗が浮かんでいる。行き場の無い感情を体力と共に発散したせいで、なんとなく気持ちは落ち着いていた。しかし傍から見たら今の自分はさぞ馬鹿みたいに映るだろう。自分の行動に呆れながら、璃子とはたとと自宅へ向かって歩き始めた。

するとそのとき、璃子のポケットのケータイが震えた。メールの着信を示すバイブレーションに、璃子の体は頭が命令するより早く反応する。ぱっとポケットからケータイを取り出しディスプレイを開いた。

今どこ？

どきんつと心臓が跳ねた。

差出人は右京。

嬉しいのか、怖いのかまったく分からない、しかし何故か胸につかえたモノがふつと溶けたようで、璃子はケータイを抱きしめながら大粒の涙をこぼした。

人通りの少ない、住宅街近くの公園。街灯から逃れるように、暗がり一台の車が停車した。黒いコンパクトカーの中には一組の男女が乗っている。右京と璃子だった。

右京に促されるまま座った助手席シートで、璃子は何も言えずに俯いたままだった。何を、どう言葉にしていかが分からない。会いたかったのかそうではなかったのかすら、今の璃子には説明できなかった。メールやチャットでならそのときの気分で何でも書けるのに、実際に口から発しなればいけない言葉を選ぶのは何と難しいことか。自分の顔色も隠せない。気の向いたときだけの会話ではない。都合の悪いこともかわせない。何を言われるか分からない。ヒトと会うということは、これ程怖いものなのかと璃子は唇を噛み締めた。

右京もどう話を始めてよいものか考えあぐねているようだった。エンジンを切った運転席で、腕組みをしたりハンドルに手をかけたり落ち着きが無い。

「あのさ……」

寒かったら暖房入るよ、ようやく右京が口を開いた。びっくり、と反応した璃子は自分の体が震えていることに気がつく。ふるふると首を横に振り、膝の上で握り締めた拳に視線を落とす。何か言わなくては、と思う程に唇は堅く閉じて一言も発せない。自分のヘタレ具合を怒鳴りつけてやりたくなった。

「うーんと、さ。まあ、すごい偶然だよね」

努めて明るく、右京は言葉を続けた。

「まさかさ、バイトに行った先にアキナちゃんが、いや、璃子ちゃん？がいると思わなかったよね。腰が抜けるかと思ったよ」

おどける右京に、璃子は軽く頷くことしか出来ない。徐々に深く

俯いてしまう璃子に対し、右京は更に明るく笑いながら話を進めた。

「璃子ちゃん大人っぽいから全然中学生だなんて思わなかったしさ、いやー、びっくりびっくり。璃子ちゃんも驚いたよね？俺がバイトに来るなんて思いもよらなかったつしょ？伊東先生にもさ、なんかどうかしたの？なんて聞かれちゃってさ。焦った焦った」

「……ん…さい」

「さつきも慌てて出てきたんだけどさー、つて、ん？何？」

「ごめん、なさい……ごめんなさい、ごめんなさい」

緊張で貼り付いた唇を無理やり剥がし、やつとのことで発した言葉は消え入りそうな程小さな声にしかならなかった。まずは謝らなければ、と思ったものの他に言葉が見当たらない。璃子は更に小さくなりながら「ごめんなさい」を繰り返した。

「そんな、謝るようなことじゃないって。璃子ちゃん悪いことしたわけじゃないしさ」

「でも、うちウソついて……」

「ネットの掲示板にホントのこと書く方が危ないんだから、璃子ちゃんは間違っただけって」

だから気にしないで、と右京は軽く璃子の肩を叩いた。小刻みに震えていた体から、ほんの少しだけ力が抜ける。まだまともに顔を上げられないが、上目遣いに右京の様子をこっそり伺った。暗がりではよくは見えないが怒ったりしている様子も無く、璃子を落ち着か

せようとゆつくりとしたリズムで肩を叩いてくれた。

そのリズムに呼吸を合わせるように、璃子はゆつくりと深呼吸をした。少なくとも怒ったり呆れたりしているわけではないらしい、ということが分かっただけでも十分だった。

ほつつと息を吐いた璃子からそつと手を離すと、右京は前屈みになつて璃子の顔を覗き込んだ。僅かに差し込む街灯と月明かりの光が眼鏡に反射して、目の表情は見えないが口元はどうやら笑っているらしい。口角が上がっている。

「怒ってない？」

「怒るわけ無いじゃん。びつくりしただけだつて」

ようやく顔を上げた璃子に、右京は体を起こしながら明るい声で返す。

「とにかくびつくりしてさ、マジ、叫びそうだったもんね。璃子ちゃんはやんは？」

「うち、声出てなかった？」

「あ、そこも分かんないくらいびつくりしたんだろ？分かる、それ」

俺もそうだった、と右京は口を開けて笑い出した。

教務室で目が合った時をそんな余裕も無かったが、思い出してみると確かに笑えてくるシチュエーションだ。お互いにあんぐりと口を開けて絶句しているのだから、周りから見たらさぞかし面白い風景だっただろう。ぷ、と璃子も思わず吹き出してしまった。

お互いの笑い声が緊張を解し、初めはくすくす笑いだった璃子の声もどんどん大きくなっていった。溜め込んでいた分、一度堰を切

ると止まらない。笑い声が呼び水となつて、そのときの情景が更に面白おかしく思い出されてくる。重苦しかった車の中の空気は一変し、二人はしばらくの間お互いに笑い転げていた。

「あー、やっと笑つてくれた。よかった」

ひとしきり笑い転げた後、右京は満足そうに璃子の頭を撫でた。セミロングの髪に滑らされる右京の手の感触に、璃子の胸は昨夜以来の高鳴りを覚える。会えないというメールが届いてから今の今まで堅く絡まっていた感情が、ゆっくりと解されていくのが分かる。心地よさに目を閉じたくなった。

「コドモ扱いしちゃだ」

そうは言いながら、璃子は右京にもっと撫でていてもらいたいと思う。髪だけじゃない、首筋にも、頬にも触れてもらいたい。もっと近くで話したい。もっと自分を見て欲しい。しかし「要求」はたくさんあるのに、それらを口にすることに璃子は慣れていなかった。

仕方無しに璃子はただ黙ったまま、右京の手の動きに任せて髪を撫でられ続けた。

「璃子ちゃん、なんか悩みあつたら聞くからな？」

ポツリと呟いた右京の言葉に璃子の心臓は跳ね上がった。

「ありがとう……」

動揺を悟られまいと、璃子は必死に平静を装う。暗い車中で助かったと思った。鼓動の速さに比例するように、きつと耳まで真っ赤

になっていることだろう。右京が暗がりにも車を止めてくれたことで、それを見られずに済んでいることに感謝した。

「ナンパメールにひっかった理由」はまだ言っていない。しかし大人な右京にはバレているのだろう。しかしそれを敢えて口に出さないで、でもそばに居て聞こうとしてくれる。そんな優しさが璃子には正直目眩がするほど嬉しかった。

しかし、まだ自分の思いを口にするには決心が足りない。璃子はもう一度「ありがとう」と呟くと、髪に触れ続けた右京の手をそっと握って返した。

「今日はもう遅いから、またゆっくり時間作ろうか？」

「また会ってくれるの？」

もちろん、と右京は微笑んだ。璃子は表情を輝かせ、何度もこくこくと頷いて見せる。また会ってもらえる、それだけでも十分だった。

「でもさ」

右京はすこし顔を曇らせて璃子の目を見て言った。神妙な表情にぎくりとするが、璃子はそのまま右京の次の言葉を待った。

「俺達が会うこととか会ったことあるってこと、これはナイショにしておいてもらっていいかな？」

「え？ いいけど……誰に？」

「友達とか、塾とかで。一応俺達センサーと生徒だしさ。いい？」

はつきりと言いつつ真面目な顔の右京の言葉に、璃子は思わず頷いてしまった。アルバイト講師と生徒なら塾を出ちやえば関係ないんじゃない？とも思ったが、右京の目は有無を言わせぬ強さがあった。わざわざ否定することでもない。璃子はもう一度微笑んでしっかり頷いて見せた。それを見て、安心したように右京はまた表情を崩した。そつと左手を璃子の肩に廻し、運転席側に引き寄せる。

ふわりとした香水の香りに包まれて、璃子はそつと瞳を閉じた。

スーツは黒を基調とした三種類。

眼鏡はオフィシャルなものとカジュアルなもの、合わせて四種類。バッグはHEADPORTERのタンカー。

財布はモノグラムが有名なブランドで、アクセサリーは必ずシルバー。

愛用の香水はポールスミス・エクストレームフォーメン。

車は国産で大量に普及しているコンパクトカー、色は黒。

身長は百七十センチ、血液型はO型、視力は左右とも健常で眼鏡は伊達。

年齢は二十四歳。

教える教科は理科と数学で、授業前に塾へ来る。

住んでいるところはここから車で十分くらいのアパート、一人暮らし。

ケータイの待ち受けは実家の猫。

彼女、無し。

右京が非常勤講師として塾へ来てから、僅か数日でこれだけの情報が入り、それも女子生徒の間に広まっていた。学校でも塾でも絶えず耳に届く右京の情報を、璃子は複雑な気分で聞いていた。

今日も黄色い歓声を浴びる右京を横目に、相田の隣のデスクで頬杖を付きながらテキストを眺める璃子の表情は晴れない。

多くの女子生徒はその殆どが、若い講師に対する単純な興味で情報を得ているだけだ。それが好意に基づくものだけではない、と璃子は実体験から知っている。しかし気分が良いものではない。物珍しいと思われる時期が過ぎれば落ち着くはずだと思っではいても、やはり他の女子生徒が右京に近づくだけでハラハラする。学校が終わってすぐに塾へ行っても、最近が一番乗りができない。今まで教務室に寄り付かなかったような生徒までが右京のそばに張り付いていた。

右京と約束した手前あからさまに不機嫌な顔もできないが、教務室でテキストを広げて勉強する振りをしながらも全く勉強が手に付かない日々が続いた。

そんな璃子の様子を知ってか知らずか、右京は毎日夕方五時きっかりに塾へ来て担当の理科の授業を終わらせると、十時を過ぎる頃まで教務室で質問対応をしていた。今まで比較的若い相田に群がっていた女子生徒達は、手の平を返したように今度は右京にまわりついて離れようとしなない。

おかげで教務室に居る間中、右京は担当の理科以外の科目の質問対応に追われることになってしまっていた。しかし迷惑そうな顔もせずに親身に対応する姿は、璃子の目から見ても爽やかな好青年に映る。素敵だと思ふ反面、悔しいという負の感情が湧きあがってくるのを止められない自分が居た。

あのヒトとメールのやり取りやキスをしているのよ。

近寄る女全てに、襟首をねじ上げてそう告げてやりたかった。

しかしそれはできない。右京が「秘密にしたい」と言ったのならそれは守らなければ。でも少しはガス抜きしなければ腹の虫が収まらないのも事実だ。持って行き場のないイライラを膨らませた頬の中にしまいこんではみたものの、やはりこんなことでは自分を誤魔化せない。

右手に持ったペンでテキストの隅に落書きをしながら、璃子は口を尖らせて盛大に息を吐いてみた。それでも右京の目はこちらを見ることは無い。分かっていることなのに、璃子の胸はチクリと痛んだ。

「相田っち、完了形教えて」

仕方なく璃子は椅子に座りなおして隣の相田を振り返る。一応受験生。それもK高狙いを視野に入れていたら、勉強しないわけにもいかないだろう。

「んー？」

璃子の声にパソコンの作業の手を休め、相田は生気の無い顔で璃子の指した問題を振り返った。ここ数日、相田も何故か表情が優れない様子に気がついていていた璃子は、思わず相田の額に手を当てた。

「相田っち、超顔色悪く見えるんだけど……」

触った額は熱くも無い。くすくす笑う声が聞こえ、璃子はふと向かいの席の小川に目を向けた。ぱっつん前髪の下で小川が目を細め、大笑いしたいのを堪えるかのように口元を手で押さえている。

「璃子、ソレ、多分ショックよ」

「え？」

「モテる講師の座を奪われたーって、ね？相田先生」

悪戯っぽく笑う小川の顔はひどく楽しそうだ。

「小川センサー、俺こんなに自分の仕事がかどるの久しぶりなんすけどね……」

相田は力無くうなだれた。要するに小川の言葉を肯定したということだろう。右京が教務室に居るおかげで、煩わしい質問攻撃や雑談攻撃に合わなくて済むようになった反面、自分が右京と比べて「魅力が無い」と思っているのか。ケタケタと笑う小川に対しすっかりしよげてしまった相田がなんだか可哀相に見え、璃子は大袈裟に笑って相田の背中を張り倒した。

「つつ……いつてえな！」

「うちはいつでも相田っちの傍に居てあげるから！元気だして、ね？」

右京に背を向ける形で、璃子は相田に飛び切りの笑顔でウィンクする。殊更に大きな声を出してアピールしてしまったのは、相田に對してなのか右京に對してなのか、または周りの女子生徒に對してなのか自分でも分からなかった。

「お前に心配されてもなあ……璃子は中山センサーのどこ行かないのか？」

「うち相田っちダイスキよ？」

「棒読みだな」

「そ？それより質問！」

相田の鬱陶しがる素振りには構わず、璃子は彼の肩をデスクに広げたテキストに向けて引つ張った。このやり取りを右京が聞いていてくれたら良い。これくらいの仕返しをしたってお釣りが来るくらいだ。

そんなちよつとした悪戯心で、璃子は相田の体に自分の肩を預けた。お互いの肩が触れ合う程に近くなり、相田の吸うタバコの匂いが鼻の奥を刺激する。華やかな香りではないが、考えてみるとこれもずいぶんと慣れ親しんだ香りだ。すうつと一息吸い込むと、もうそれは「匂い」として知覚されなくなった。

姦計

十一月も半ばを過ぎ期末テストに向けて生徒の気持ちが始める頃、塾の内部には異様な緊張感が漂っていた。受験を控えた三年生が居る時間帯だけではない。一・二年生の授業日も小学生の授業時間帯も、どこかぴんと張り詰めた雰囲気が校舎全体から醸し出されていた。学校が終わり教務室に集まった面々でいつものように笑い合っている生徒達も、目は落ち着きなく動き周囲を探っているようだ。どの生徒の表情にも緊張の色が見え隠れしている。

何も塾で事件が起こったわけではなかった。一時頃に講師達が出勤し、四時頃からぼろぼろと三年生達が集まり勉強を始め、各学年の授業が終わって九時過ぎには生徒達が帰っていく。数人の居残り勉強をする生徒もいるが、大まかに言えばこのサイクルに乱れはない。模擬試験も通常通り行われ、つい先日成績発表があつたばかりだ。もちろん今回も璃子が一位を獲つたというのは言うまでもない。

唯一変わったことと言えば、右京の周りの取り巻きが減つたというくらいである。

右京が非常勤講師として勤務を始めた頃は、毎日両手と両足を使つて数えても足りない程の取り巻きが彼を取り囲んでいたものだった。しかし日を追う毎に一人、また一人と彼の傍から離れていった。傍目に見ればそれは「若い講師」の品定め期間が終わつたのだ、という程度にしか映らなかつたかもしれない。しかし右京の傍を離れた女子生徒達は、一様に周囲に対して警戒心を顕わにし、数日間塾を休む生徒も少なくなかつた。

そして今日も一人、右京が来て以来ずっと彼の腕に纏わり付いていた女子生徒が体調不良を理由に欠席している。

寒風の中で冷水を被つても風邪をひきそうにない程、いつも元気

な彼女が欠席をした。講師たちは皆不審がつてはいたが、母親からの電話連絡だったことでそれ以上の詮索はないまま欠席は承諾された。

そんな様子を、璃子は「教務室の指定席」で聞いていた。隣の相田は明日の公民の授業準備で何か紙芝居のようなものを作っている。可動式の紙芝居で何かを説明するらしく、ジョイント部分の仕掛けに梃子摺っているようだった。もう殆ど公民の勉強を済ませてしまった璃子にとっては、そんな工作をするより自分の質問に答えて欲しいところだがそうもいかないらしい。

授業も終わったのだから帰ればいいのに、璃子は相変わらずギリギリの時間まで教務室で粘っていた。

「ねー、相田っちー」

「ちょっと待って……これをだな、こうし……てつと」

「数学教えてよー」

「お前なー、数学だったら伊東先生か中山先生に聞いてこいよ」

「伊東ちゃん忙しそうなんだもん」

「じゃあ中山先生」

相田は璃子に目を向けることもなく、右京が使っているデスクを指差した。

「やだし……」

璃子はあからさまに顔をしかめてみせる。二人の関係は内緒と約束したあの日から、璃子は塾内では「右京嫌い」で通っているのだ。どんなに他の女子生徒が騒いでいるときも決して右京に近づかなかった璃子だが、それを变だと指摘する者もいなかった。相田への懐きぶりが有名だったせいもある。

ちらりと右京を一瞥し、璃子はふるふると首を振った。

「うち中山先生苦手だし」

「苦手とか言わなくなたっていいだろ？俺より数学詳しいぜ？」

「やだもん、相田っちがいいの」

そう言いつつ、璃子は制服のポケットに左手を突っ込んだ。右側に座る相田から見えないように体を少しずらして座りなおし、既に右京直通となっているボタンを手探りで操作する。そして器用にも登録してある定型文を入力し、こっそりメールを送信した。

大好き。

質問に来ていた男子生徒の対応が終わったのだろう。璃子がメールを送ってから五分程すると、右京は自分のデスクを片付け始めた。少し大きな音を立てながらテキストを揃え自分の鞆に詰める。最後に内ポケットからケータイを取り出し何か操作をした。マナーモードを解除するメロディーがワンフレーズだけ流れる。

「じゃ、お先に失礼します！」

ケータイを内ポケットにしまうと、右京はさっと会釈をして教務室を出て行ってしまった。璃子の表情は僅かに緩む。思惑が外れた

相田は、仕方ないと呟きながら璃子のテキストを覗き込もうと身を乗り出してきた。

「やつばいいや。うち帰る！」

「あんだよ、せっかく見てやろうと思ったのに」

「テレビ、ドラマ録画忘れてたの思い出したの」

また明日お願い、とにつこり笑って璃子はテキストを閉じた。ちつと舌打ちする相田の鼻先で手をひらひらと振ってみせる。

「もうお前の質問答えてやんね……」

「相田っち大好きっ、またねー！」

スキップでもしそうな足取りでデスクの間を駆け抜けると、璃子は残っている講師達に一礼して教務室を後にした。気をつけなさいよ、という伊東の声を背後に聞きながら階段を駆け下りる。そして弾むゴムボールのように勢い良く建物を飛び出すと、璃子は自宅とはビルを挟んで反対側の人気のない通りへと走っていった。マナーモードを解除する、これが合図だ。

行き先は二区画先の百円パーキング。

そこが二人で決めた右京との待ち合わせ場所だった。

璃子がパーキングに着くと、そこには既に黒いコンパクトカーが一台アイドリングをして停車している。念のためにくるつと周囲を見回して、璃子は車内に体を滑り込ませた。

「お疲れさまっ」

車に乗り込んだ璃子は、すぐさま右京の首に両手を絡みつかせて頬にキスをした。右京の付けているスパイシーな香水の香りに包まれる。ふわりと体が軽くなるような、それ以上に心が弾むような幸せな感覚が璃子を酔わせた。右京がアルバイトに来て以来、授業後にこうやって待ち合わせをして送ってもらうのが日課になっていた。

「ごめんね？ 苦手とかウソだから」

璃子は右京から両腕を離すと、くりくりの大きな目を上目遣いにして右京を見上げた。その目は悪戯っぽく笑い、右京の反応を楽しみにしている様子がよく分かる。「内緒の関係」のためでもあるが、必要以上に相田にと仲良くして見せることは右京に対するアピールでもあるのだ。

それが分かっているのか、右京はわざと少し拗ねたような表情を作って璃子の頬を軽くつねる。顔を見合わせながら二人はくすくす笑い合った。

「少しは妬く？」

「妬いて欲しいんですよ？」

何事に対しても右京は大人だった。璃子の望むタイミングで、璃子の望む言葉と行動をくれる。彼と居ることでの目の前の景色が今までのような味気ないモノクロではなく、すばらしく鮮やかに彩られて見えるから不思議だった。壊れてしまいそうなほど張り詰めていた璃子は、たった数週間右京と共に過ごしたことですっかり満たされた気分になっていた。

「何か食べ行く？」

おなか減っちゃった、と璃子はいつものファミレスを頭に思い浮かべた。しかし右京はちよつと渋い顔をする。

「ごめん、今日ちよつとすぐ送って良いか？」

「どしたの？」

右京は璃子の答えを待たずにサイドブレーキを解除して車を発進させた。すつと走り出した車は、人通りの無い裏路地を抜けて住宅街へと向かう。ここから璃子の自宅までは車であれば三分程で着いてしまう。思ったより短い逢瀬に、璃子の顔を不満の色を隠さない。

「どうしたのってば？」

こんなことは今まで無かった。璃子の表情がどんどん不機嫌なものに変わる。

「ちよつとさ、修士論文用の実験がまだ残ってた。途中で止めてきたからもう少しやってこないと」

右手でハンドルを操作しながら、右京は左手で璃子を抱き寄せた。

「明日でいいじゃん」

「そつも言ってられないんだって。実験用に作った材料が無駄になる」

埋め合わせするからさ、と右京は抱き寄せた璃子の額にキスをした。誤魔化されていることは分かっていたが、右京にとって修士論文はアルバイト以上に重要な仕事だということは璃子も理解してい

る。くずぶつっている気持ちを尖らせた口で表現はしたものの、それ以上駄々をこねることもせずに璃子は右京に体を預けた。

ほんの数分車に揺られて目を閉じていると、右京はゆっくりとブレーキを踏んで車を止めた。相変わらず門扉の外灯しか灯っていない真っ暗な屋敷の前で、璃子はそつと車から降りる。幸せな気分は急速に萎み、不安と苛立ちといった負の感情が湧きあがってくる。璃子は意識的に口角を上げて笑顔を作った。

「テスト前だろ？勉強しつかりな」

計を気にしながらも、右京は助手席側に身を乗り出して璃子を見送る。そんな気遣いをするくらいなら実験なんて行かなきゃいいのに、と口が滑るような気がした。

「うん、右京も実験がんばって」

「ありがと。じゃ」

軽いキスをして璃子がドアを開めると、来たときと同じように右京はすつと静かに車を走らせて行った。残された暗い夜道に、排気ガスの嫌な臭いが漂っている。鼻に残っていた右京の残り香が消えてしまう。璃子は息を止めながら、踵を返して家の玄関へと向かった。

家の中へ入りいつもの習慣で家中全ての電気を点け、鍵がかかっていることを確認して自室へ籠る。あれ以来、璃子はリビングもダイニングも入り口にあるスイッチに触れるだけで、室内に足を踏み入れようとしなかった。踏み入れたら自分まで汚くなる。スイッチに触った手は二階のトイレでしつこく洗い流した。

鞆を机へと放り投げてベッドに横になると、璃子はポケットからケータイを取り出してウェブサイトへと接続した。かちかちと掲示

板のレスを遡り、夕方以降の書き込みをチェックする。液晶を見つめる目は鋭く、驚くほど無感情で冷たい。とある書き込みを見つけると、璃子の目は苛立ちを含んで険しくなった。

「……邪魔だっつーの」

書き込みの内容は何かを弁解しているようなものだった。見る人が見れば、それは明らかに今日塾を欠席した女子生徒に関する書き込みであることが分かる。欠席したことに關して、既にいくつか見たことの無いウワサ話が掲示板を賑わせていた。それに対して、数分置きに同じ人物らしき者が書き込みをしている。

そんなウワサなんてデマだよ

Aが塾で人の男盗ったとかありえないし

万引きしてるなんてのもウソだって！

休んだのも風邪ひいたって言ってたよ

だから誰がそんなウワサ流してるの！？

いい加減にしてよ！！

徐々にヒートアップしていく書き込みの様子からすると、ウワサされている本人に間違いないだろう。璃子はレスを最後まで読むと鼻で笑ってコメント入力画面を開いた。

邪魔なものは排除する。ここ数週間で右京の取り巻きの殆どを、璃子は様々な噂を使って掲示板で晒しあげたのだ。どんな些細なことでもいい、無ければでっち上げだって構わない。エサさえ投げ入れれば、掲示板を徘徊している馬鹿な連中がこぞって食いついてくれる。表立って自分が手を汚す必要なんてまるで無かった。

昨夜の書き込み程度では食いつきも悪く炎上も思った程ではない。だったらまた「塾内部からのリーク」を見せかけて陥れば良いだろう。これで大抵の女は疑心暗鬼に駆られて塾で人の輪に入らなくなる。

ねえ、あんた性病持ってるんだって？ウキヨーセンサーヤリまくってる女嫌いだってさ

送信ボタンを親指でしっかり押す。画面が更新され、璃子のコメントが掲示板に載った。それを満足気に眺めると、璃子は鞆からもう一つのケータイを取り出した。かちかちと操作して、同じ掲示板を開く。そして先程のコメントに対して煽りのレスを一つだけ入れた。

「もう来んな。ブスが……」

くくつと璃子は押し殺した笑みを漏らした。しかし画面を更新すること増えるレスに、徐々に興奮が抑えられなくなっていく。

誰も居ない大きな一軒の家で、少女は一人勝ち誇ったように一人

笑っていた。

右京を手放したくない。

璃子は彼と共に居る安らかな気持ちとは相反する、激しい焦燥感に駆られていた。自分はコドモで彼はオトナ。彼から発せられる大人の余裕とも言える空気は、乾ききっていた璃子の心を虜にして離さない。しかし与えられる安心感と比例するように、右京と自分との隔たりも強く感じるようになっていた。

子供じみた自分との超えられない壁を見せつけられ、じりじりとした焦りの気持ちを押さえられなくなるのだ。共に居たい。甘えたい。しかし子供だと思われたくない。無理な背伸びは自分の首を絞めることになるということも、経験的に理解はしていたが止められない。

ただ、右京が自分を見てくれていることは救いだった。こちらを向いてくれなくなったら、今度こそ自分が立つて居られなくなるのではないだろうかと怖くなる。

そしてそんな心配もないまま無邪気に戯れつく取り巻き達がたまらなく羨ましく疎ましい。満たされているくせに、自分が自分でいられる居場所があるくせに。彼女達が右京に触れる度に自分の心を土足で踏み荒らされる錯覚を覚え、相田の隣で拳を握り締めて堪えた。自分の目の前で触れさせている右京にも腹が立っていたが、璃子の黒い感情とエネルギーは何の迷いもなく彼女達に向けられた。

ネットには悪意が満ちている。日々の生活で鬱積が溜まった者、ゴシップにしか興味が無い者、様々な者が欲望を満たす為に徘徊しているのだらう。自分もそんな一人だ。皆がやってる。罪悪感などは微塵も感じなかった。

邪魔者は排除する。

そんな璃子が掲示板で右京に関する見たことがない噂を目にしたのは、取り巻き達を殆ど排除した期末テスト直前のことだった。

璃子が自分で流した噂は大抵が取り巻き達に関すること、右京本人に付いては触れて居ない。にも関わらず、ある日いつものように学校が放課してすぐ塾でレスのチェックをしていた璃子の目に、「右京は出会い系で遊んでる」という書き込みが飛び込んで来たのだ。ぎくりとして慌てて過去レスを遡るが、他にそれらしき書き込みは見当たらない。突発的な便乗犯だろうか、それとも璃子とのことを知っている者がいたのだろうか。それとも他に右京がそういった遊びをしているのか。教務室に入る直前で気がついた璃子は、ひとまず自分の教室へ行き呼吸を落ち着けた。しかし心のざわつきは収まらず、唇がやけに乾いてきた。

そのコメントは書き込みされたばかりなのだろう。まだレスポンスは無い。気分は悪く焦りもあるが、璃子はまず様子を見てみようとした。迂闊に書き込みをしては自分達のことには話が及ぶかもしれない。知られている筈はないと思っではいるものの、何処で誰が見ているとも限らないだろう。

取り敢えず右京にこんな噂があることだけは知らせておこう、と璃子はメールをすることにした。ポケットからケータイを取り出しかちかちと手早くメールを作成すると、すぐさま送信ボタンを押す。しかし電波状態が悪いのか、なかなか送信しきらない。送信中という表示が消えると、ディスプレイには送信失敗を表すエラーの表示が映し出された。

「あれ……」

誰も居ない教室で、璃子は一人ケータイをあちこちに振り回した。数回チャレンジしたがその度にエラーとなり送信できない。苛立ちを押さえられず、璃子は舌打ちをしながら窓際まで行き送信ボタンを強く押した。

「璃子お、相田が教務室来いって呼んでるよ？」

「はいっ」

突然背後から声を掛けられ、璃子は咄嗟に手に持ったケータイを後ろ手に隠して振り返った。反射で返事をしたが驚きすぎて声が裏返ってしまった。ちよつと恥ずかしい気もするが、それよりケータイを見られていないかという方が心配だ。素っ頓狂な璃子の返事に相手も驚いたのか、一瞬きよとした表情をしたが、声の主は教室の戸口から中を覗き込みくすくす笑いながら璃子に向かって手招きをした。この分であれば「プライベートケータイ」は見られていないようだ。璃子は幾分ほつとして、今行くただけ返事をして彼女に背を向けて鞆を持つ振りをしながらケータイのディスプレイを盗み見た。

「璃子ー、早くいこ？」

「うん、今行くから、先行ってて」

それでもディスプレイは「送信中」から「送信しました」という表示に切り替わらない。ポケットに入れてしまっではますます電波が届かないのでは、と璃子は鞆を入り口近くの窓際の席へ移動させその中へそつとケータイを置いた。蓋を閉めようが閉めまいが、ポケットに入れようが入れまいがあまり変化もないとは思ったものの、

早めに右京に知らせなければという思いが働いたのだ。

「どしたの？」

自席ではない場所に荷物を置いた璃子に、璃子を呼びに来た友人は訝しげな顔で問いただした。ハイクラスの生徒ではないため教室には足を踏み入れないが、興味深そうに黒板近くに掲示されている座席表と机を見比べている。璃子が荷物を置いたのが丁度空席だったため気になったのだろう。璃子はわざと肩に手を当て困った表情を作った。

「持っっていこうと思ったんだけど、結構重かったし。それより相田っち何だって？」

「冬季講座の申込書の黄色い紙見てたよ。璃子出した？」

「あー！」

「まだなの?!期限先週じゃなかったっけ？」

「忘れてたしっ！」

そういえば今月の初めに希望コースを書けと言って配られた、黄色い紙があつた気がする。理科の直前集中コースを右京の授業にしかたくて、早めに提出しようと思っから出して記入していた覚えはあつた。しかし提出した覚えは無い。自宅の机のコルクボードに貼り付けておいたままだ。

「なんかもう人数多くて締め切りのコースがあるって言ってたようにな……でも璃子はハイクラスだから人数少ないし良いよ、ね……っ

て璃子？」

げ、と璃子は眉根と鼻の頭にしわを寄せた。璃子の普段とは違うリアクションを見て、友人も何事かと言葉を無くす。さあつという血の気が引く音が聞こえ、璃子の胸は鼓動を速めた。整った顔立ちが奇妙に歪み、今にも泣きそうな表情に変わる。

せっかくの選択授業なのに、右京の授業を受けられないなんて嫌だ。自分も右京も講座中は忙しくなるから会える時間も限られる。せめて授業中だけでも一緒に居たいのに。右京の声を聞いて居たいのに。

「間に合わなかったらどうしようおお！」

廊下に璃子の悲鳴にも似た声が響く。その切羽詰った様子を見る友人はあっけに取られているが、当の璃子にそれをフォローする余裕は無い。璃子は開け放った教室の戸口に友人を残し、血相を変えて教務室へ向かって走っていった。

すっかり座りなれた助手席のシートに身を沈め、璃子は深い深い溜息を吐いた。

「どした？」

事情を知らない右京が駐車場から車を出すためハンドルをきりながら、明るい声で尋ねてきた。その声のトーンに些か苛立ち、璃子は再度深い溜息を吐いた。

「だからさ、どうしたって聞いてるでしょ」

「もーさー、サイアク……」

結局のところ、璃子は冬季講座の希望のコースを選択することができなかったのだ。元々理科の選択コース数は少なく、入試直前ということもあってどのコースも満員御礼。もちろん右京のコースは人気が高く、申し込み開始直後に定員締め切りになってしまっていたらしい。

「夕方相田先生に怒られてたアレか？」

「もう、うち右京の授業一番に取ろうと思ってたのに……」

「早く出さないのが悪いんだろ」

「受付初日に出そうと思って机の前に貼つといたの！」

璃子が教務室で相田に駄々を捏ねていたところを思い出したのだろう。くすくすと笑う右京に、璃子は口を尖らせて反論する。元はといえば右京が冬のアルバイト時間を増やすからいけないんだ、と筋違いな文句も言いたくなるというものだ。

「仕方ないだろ？俺来年になったら就職活動で忙しいから、今稼がなきゃ」

「だからってさ、三年生の理科だけじゃなくて夜の一年生とか二年生の数学とかまでバイトしなくなっただっていいじゃん」

全ての授業を終わらせると、夜は毎日十時近くに仕事が終わる計

算だ。例えその時間まで璃子が自習室で勉強していたとしても、会える時間など今のように自宅へ送ってもらうまでの僅かな間しかないだろう。

「その時間まで仕事しなきゃ、案外塾の講師なんて稼げないんだよ」

頬を膨らませる璃子の頭をぼんぼんと軽く叩きながら、右京は静かにアクセルを踏みゆっくりと車を走らせた。惘然としたまま璃子は胸の前で鞆を抱きしめ、この事態をどう打開するかに考えを巡らせる。さすがに今回は取り巻きを排除したときのようにには行かないだろう。右京の授業を選択しているのは、右京目当ての女子だけではないからだ。

仕方ない。教務室で眺めるだけで満足するしかないのかな、と少しだけ璃子が納得しかけたその時だった。

ブブブ、と璃子が抱えた鞆からメールの着信を示すリズムの振動が伝わってきた。こんな時間になんだろうと訝しく思いながらも、璃子は鞆を開けてサブウィンドウのライトが点滅している方のケータイを取り出した。光っているのが「オフィシャルケータイ」の方だと分かれると、面倒くさいという思いが湧いてくる。

しかし友人付き合いを疎かにしては、卒業までの学校生活に少なからず影響があるだろう。差出人を見るとクラスメイトの沙希だった。また何か情報を仕入れたのだろうか。面倒くさ、と呟いて璃子はメールを開く。メールには本文と添付ファイルが二点。早く確認して相槌の返信をしてしまおうと、璃子の指はためらいもなくOKボタンを連打した。

メールを開封し本文を呼んだ璃子は眉根を寄せた。本文が何を指しているのか何のことか分からず、とりあえず添付ファイルを開く。添付ファイルの写真がディスプレイに表示された途端、璃子の動き

が止まった。

こんな写真出回ってるんだけど、大学生？

沙希のメールの意味をやっと理解できた。

添付されていた写真は璃子と右京のケータイにしか入っていないはずの、出会った日のプリクラ写真とツーショット写真だったのだ。

凋落

ケータイを握り締めたまま璃子は絶句していた。

この写真は右京と自分だけしか持って居ない、知らないはずの写真だ。これが出回るとは一体どういうことか。体の芯にまるで何かに握りつぶされるような痛みが走った。

「うきよ……」

口を開きかけて止めた。相談をするべきかどうか、璃子の脳裏に「ナイショだよ」と言った右京の言葉がよぎる。璃子は記憶を総動員して写真の出所を考えた。自分がこれを人に見せたことは無い。だが、右京がこれを他人に見せたり送ったりするといったことも考えられない。璃子自身はバレたところで「彼女」の地位を明確にできるだけのことで、それほど大きな問題だとは思わない。しかし右京が嫌がるはずだと思うと、背筋に冷たい何かが這い上がってくるような感覚に襲われた。

そして今更これが出回って右京の元取り巻きにバレてしまえば、彼女たちに関する書き込みについても勘ぐられてしまうに違いない。ここでこれを報告すれば、「ナイショ」を希望した右京が離れていってしまうかもしれない。いずれにせよこの関係にヒビをいれる事件であることは確かである。そうなる前に自分で何とかしよう。璃子はきゅっと唇を結ぶと、沙希のメールに手早く返信をした。

誰が回してるの？

送信済みの表示を確認すると、ぱちんとケータイを閉じて璃子は姿勢を正した。右京は何事か話し続けていたらしいが、その内容は

また明日聞けばいい。早く写真の出所を突き止めて、噂の火消しをする方が先だ。鞆の蓋を閉め、シートベルトのロックに手を掛ける。

「そつえばさ、璃子のお父さんって……」

「右京停めて。うち今日降りる。ごめん」

「え？」

珍しく璃子に話の腰を折られ、戸惑いの表情を浮かべて右京が振り返った。しかし璃子はシートベルトのロックを既に外し、鞆を胸に抱え早く停めてと右京を急かす。車は丁度璃子の自宅がある住宅街へ入ろうとするところで、前方にある信号は黄色から赤へとその色を変えていた。釈然としない顔の右京だったが、すうつとゆつくりブレーキを踏むとハンドルを左へと傾けた。後続車は居なかったがハザードランプを点滅させ、車を路肩へ停車させる。

車が停まるとほぼ同時に、璃子は助手席側のドアを開けて体半分以上を外に出した。

「どうしたんだよ。俺ちよつと璃子に聞きたい話があったんだけど」

「ごめん、メールが明日にして。ちよつとトモダチが急用だつて」

「あ、おいちよつと璃子……」

璃子は右京の返答も待たずに車から完全に体を降ろした。ドアを閉めて窓に向かってはいばいつと手を降ると、一目散に自宅へ向かって駆け出した。車のエンジン音を背中に聞きながら、住宅街に入って初めの角を曲がる。右京の車から姿を隠せるようになると、璃

子は足を止めて鞆からケータイを取り出して着信を確認した。

思ったとおり沙希からの返信があったようで、サブディスプレイのランプがちかちかと点滅している。しかし璃子はケータイを開けると、そのメール着信数に目を丸くした。

「何これ……」

ディスプレイには十件の未開封メールの表示があった。そのどれもが異なる友人から送られてきたもので、タイトルはいずれも事の実偽を確かめるような問いかけ調である。いくつかはご丁寧にも添付ファイル付きのメールだった。

塾生にバレることは阻止したかったが、この分ではそれは無理に等しいだろう。現に着信メールの中に、同じ塾に通う友人と親しい間柄の子からのものもあった。短時間でこれだけの人数が本人に問い合わせてきたのだから、少なくとも学校内には広まっているだろうということは容易に想像できる。とすれば既に塾生にもこれを見た人間がいるだろう。

ヤバイ。

心臓の鼓動が速さを増していく。何とかしようと気は焦るものの、これといった対応策は無い。着信メールを片っ端から開けてみるが、内容はどれもこれも「これ誰？つきあってんの？」といったものばかりだ。添付されている写真は二枚とも沙希から送られたものと同じで、それ以外の写真が出回っているわけではないらしい。

しかし半分ほど開封した頃から、璃子のケータイには次々と別の友人からのメールが届き始めた。

「……ちっ」

璃子は舌打ちをすると、新着メールには手を付けずに電話帳を起動した。メールを待っていたのでは遅い。沙希に直接話を聞こうと電話をかける。数回の呼び出し音の後、「もしもしー」と能天気な声が聞こえた。

「沙希！ あの写真、どこから回ってきたの？」

「ああ、璃子？ あれ誰ー？ カッコイイじゃ……」

「それは良いからっ！ 誰から写メ回ってきたの？」

えー、と沙希は電話の向こうで言葉を濁す。璃子はイラつきを隠しもせずに、声を荒げて沙希を急かした。

「沙希！」

「んーとき、言い難いんだけど、掲示板に貼ってあったんだよね……」

「え？」

「だからさ、前島のブログが貼られてた」中掲示板って知ってる？ あそこに写メ貼られてたんだよね」

「マジで？」

「うん、璃子が話題になることなんてなかったから、まさかと思ってた……」

自分の頭から血の気が引く音が聞こえそうだった。急速に収縮のスピードを上げていく心臓に肺と気管支が圧迫されたかのように、呼吸が上手く吸えない。甲高い沙希の声はこめかみ近くで脈を打つ音と重なり、耳鳴りに似た刺激となって璃子の正常な判断力を削いでいく。璃子の顔からはいつのまにか表情が消えていた。

「ところでホントにあれ璃子？ 相手誰なの？」

「ありがと……また今度話すから」

「あ、ちよつと璃子！」

スピーカーから沙希の怒鳴り声が続いていたが、璃子はケータイを耳から離し電源ボタンを押した。途端にあたりは静寂に包まれる。どうしよう、と思いながらもはや手の施しようが無いことを、璃子は経験から知っていた。それはこれまでやってきた書き込みの経過を考えれば明らかだ。璃子はふらふらと路肩に寄り、他所の家の低い壁に腰を下ろした。

遠くの方から風に乗って、パトカーのサイレンが聞こえてくる。まるで今の状況に警告を発するかのような音だ。タイミングが良過ぎるだろう、と璃子は自嘲気味に顔を歪ませた。

冷たい夜風に吹かれればんやりと考えながら、手に持ったケータイをインターネットに接続した。「中掲示板を開くと、そこには確かに二人のキス写真と車内のツーショット写真が掲載されており、それについていくつもレスが付いている。殆どの書き込みが真偽を知りたがる旨のものであったが、いくつかには璃子に対しての中傷が書かれていた。もちろん、放置している璃子のホームページのアドレスもご丁寧に掲載されている。

ブス、キモイ、ウザ女、調子乗ってる、二股してる、死ね、等等。

どれもオリジナリティに欠ける書き込みだが、誰が書いているか分からないというところだけが異常に怖い。右京の元取り巻きかも知れないし、璃子の元彼の線も考えられる。もしかしたら親しい友人かもしれない。それを考えると、確かに前島のように人間不信に陥ってしまうのも分からない訳ではなかった。

明日学校へ行くのが怖い。人に会うのが怖い。奇異の目で見られ、孤立し、裏であることないことを囁かれるのだけは避けたかった。

家にも、学校にも、そして塾にも、どこにも自分の居場所が無くなるかもしれない。誰も居ない、真っ暗に冷え切った自宅。自分の居る全ての場所がそのように感じる場所になるかもしれない。冷えた夜気のせいだけではない悪寒に、璃子は身を震わせた。自分の存在を確かめるかのように、ぎゅっと両腕で自分の肩を抱きしめる。

独りは嫌だ。独りになるのは嫌だ。独りにされるのは怖い。

先刻ちらつと見た、戸惑った表情の右京の顔が浮かぶ。果たしてこれを知った右京がどう思うだろうか。肩を抱いた手に力が籠る。寒さと恐怖でカチカチと鳴っていた歯を、ぎりつと噛み締めて鎮めた。今では家より学校より、そして塾より暖かく居心地の良い右京の隣。その場所は絶対に手放したくない。あの声と眼差しを失いたくない。そのためにできることは何だってしよう。

しかし「そのために」とは言え、今の璃子に何をしたらいいか等のアイデアはなかった。掲示板やウェブサイト上のウワサに対しては最早為す術が無い。火消しができないのであれば、他の対策を採らなければいけない。両腕の間に顔を埋め、ぎゅっと目を閉じてこの先をシミュレーションしてはみるものの良策は浮かばなかった。

ただ、冷たい風に吹かれているうちに少しずつ璃子は落ち着きを取り戻し、そして不意に一つの考えが浮かんだ。固く閉じていた目を開けると、膝の間からふた粒の小石に焦点が合った。

その瞬間、はっと璃子は息を飲んだ。

冷静に考えてみると、別に「右京と付き合っていることがバレること」はそれほど悪いことであるとは思えない。どちらかといえば璃子にとって立場を明らかにできる分、ある意味有利なのかもしれないと思う。掲示板にはひよつとしたらもつと悪意のある書き込みが出るかもしれないが、右京さえ居てくれたらそれでいい。写真が流出してしまったことを正直に謝れば、きっと右京はいつものように微笑んでキスをしてくれるに違いない。

すうつと深く息を吸い込み、ケータイを閉じて璃子は顔を上げた。

これ以上考えていても仕方ない。じたばたせずに認めよう。

生徒同士にあの写真がばら撒かれたところで痛くもかゆくも無い、と璃子は開き直った。キスくらい他の子だってやっている。恥じるような関係でもないし、璃子自身は真面目に右京とのことを考えているのだ。しかし流出した経路だけはなんとか調べてみようと思心に決める。

冷え切った体をぐいっと伸ばし、寒さで固まった膝の曲げ伸ばしをした。制服のスカートから伸びた足は、夜目には分らないがきつと寒さで赤くなっていることだろう。いつの間にか鼻の頭も頬も冷たくなり、ケータイを握っていた手指も悴んでしまっている。こんなことで風邪をひいてはいられない。やることは山盛りなのだ。

よし、と気合を入れるためにぱちんと頬を叩き璃子は自宅へと歩き始めた。

しかし璃子が去った路地から遠く離れたところで、サイレンはまだ鳴り続けていた。

翌日の学校は拍子抜けするほど平和だった。問い合わせのメールやサイトの書き込み等からどれほどの反響があるかと覚悟して登校した璃子だったが、クラスメイトの殆どが何事も無かったかのように「写真」の真偽にも触れて来なかったのだ。いつもと同じように登校途中で挨拶を交わし、教室内ではいつもと同じようにグループごとに分かれて昨夜のテレビドラマや好きなアイドルの話で盛り上がる。いつも通りだった。じきにクリスマスになるということもあって、クラスでクリスマス会をやるのかという企画まで飛び出す程だった。

ただ沙希とその友人達だけはその性格上どうしても本人に情報の真偽を確かめずにはおれないようで、休み時間の度に璃子の席まで駆け寄って来てはしつこく質問を繰り返していた。璃子は質問に対して、一言「付き合ってる」とだけ答えた後は黙秘を決め込んだ。それでも納得はしたのだろうか、それ以上彼女達は追及することなく、別の会話へと流れていった。

しかしそれはあくまで表面的なことであるということも、璃子はよく知っていた。昨夜帰宅した後から朝まで、絶えず掲示板と自分のホームページの書き込みをチェックしていたからだ。そこでは既に写真に写っているのが璃子だと「特定」され、更にその相手が璃子達の通う塾の講師であることも書き込みされている。そしてその後には根も葉もないウワサや罵詈雑言を並べ、徹底的に璃子を貶める書き込みをしていたヤツらが居たのだ。右京の取り巻き達を排除した書き込みについても、璃子がやったのでは？という限りなく真実に近い憶測も飛んでいた。

クラスメイトとの談笑に笑顔で混ざりながら、璃子は自分の周り

にいる全ての人間に対して警戒の目を向けていた。誰が書き込みをして、誰がそれを見ているか分からない。自分からボ口を出すような真似だけはすまい、と休み時間も気を張り詰める。「付き合っている」ということは悪いことではないだろうが、それ以外のことに ついて嗅ぎ回られるのは避けたかった。

迂闊なことをすればネットの書き込みのことだけではなく、璃子自身の私生活まで暴露されかねない。特に家族のことなどはここ数年友人にも話しておらず、クラスメイト達は璃子の家庭が円満なものだと思っていることだろう。

おかげで6時間目が終わって下校する頃には、肩や目にずしりと重いモノを感じる程に璃子は疲れきってしまった。

ホームルームが終了すると、生徒達はバタバタと教室を出て行った。もうすぐ冬休みということもあり、休みへの期待と目前に迫る高校受験への焦りで3年生の教室にはある種の緊張感が漂っている。まるでその空気から逃げ出すように教室から出て行くクラスメイトの後姿を見送りながら、璃子は半日分の疲れを一気に放出するように盛大な溜息を吐く。頬の筋肉の緊張が緩み、その途端に璃子の顔から表情が消えた。

一人残った教室で鞆に教科書を入れながら、今日の異常な程の「通常感」に胸がざわついた。授業には全く身が入らず、今日もらったプリントなどは殆ど手付かずである。既に塾生にも噂は広まっているだろう。塾へ行くのも少々億劫に感じたが、自宅へ帰るより自習室に籠っているほうがマシだ。

とりあえず何を聞かれても「彼氏だ」とだけ認めた後は、自習室と自分の教室に籠って勉強していればいい。悪いことをしている関係じゃない、胸を張っていれば良い。そう割り切ると、璃子は鞆を

抱えて下駄箱へ向かった。

三年生の教室が並ぶ廊下にはもう殆ど人通りが無く、璃子のつつかけて履いている内履きがパタンパタンと乾いた音だけが響く。校舎北側にある生徒用通用口には、部活動に向かう下級生で賑わっていた。その賑わいを背の高い下駄箱一つ向こうに聞きながら、璃子は自分の下足入れを開けた。

「……っ」

思わず息を呑む程の臭いに、璃子は即座に顔を背ける。いきなりの出来事で混乱した頭は、何か入れられていると気がつくまで数秒の時間を要した。顔を背けたまま深呼吸をして恐る恐る下足入れの中を見ると、そこは璃子が朝自分の靴を入れた状態とは大きく異なる様相を呈していた。

ねずみ色に所々緑色がかったような雑巾。

女子トイレの小箱にあるはずの汚物。

給食の残り物らしき残飯。

そして下足入れの扉の内側に書かれた真っ赤な文字。

ついに来たか。

下足入れの惨状を睨みつけ、璃子はぐつと歯を食いしばった。悪いことをしているわけじゃない。右京を好きだというだけだ。頭の中で何度も何度も繰り返す。この程度の嫌がらせ、皆面白半分にやっているだけだ。すぐに収まる。

しかしどうしようもなく膝が震えるのを抑えることができず、璃子は何度か胸と自分の足を拳で叩いた。泣きそうになる自分への叱咤でもある。

負けるな。

悪いことはしていない。

大きく息を吸い込み顔にかかったサイドの髪を耳に掛けると、足元に鞆を置いた璃子は踵を返して教室棟に向かった。一番近くの教室からゴミ箱を運び、無言で下足入れに入れられている「ゴミ」を棄てる。割と最近買ったばかりのスニーカーはぐつしより濡れており、履いて帰れる状態ではない。ゴミを処分した璃子はスニーカーの踵に指を引つ掛けて持ち上げると、通用口脇の水道でざっと汚れを流した。

手にかかる水飛沫の冷たさは、やがて指先を切り裂くような痛みに変わっていく。

「あれ？璃子どうしたのぉ？」

スニーカーを水道水で流している最中、背後から間延びした女子生徒の声があった。誰も居ないと思っていたため、ぎくりとして一瞬璃子の動きが止まった。わざとらしく伸ばした語尾に何か引つかかるものを感じつつ振り返る。そこには眉をひそめて璃子の手元を伺う一人のクラスメイトが立っていた。

「ひつどおい。璃子の靴ぐつちゃぐちゃじゃなあい？」

「由宇……」

カワイソー、と由宇と呼ばれた少女は片手を口に当てて呟いた。ちらちらと璃子の顔とスニーカーを見比べるように目を動かし、さも同情するかのような表情で近寄ってくる。しかしその目が嘲りの色を含んでいるのを、璃子は見逃さなかった。

「別に、ちよつと転んで汚れちゃっただけだし」

「えー、大丈夫う？」

平気平気、と璃子は再び彼女に背を向けてスニーカーに目を向けた。背中に刺さるような視線を感じ、早くこの場から逃げ出したい衝動に駆られる。クラスメイトが教室から出て行ってからずいぶんと時間が経っているはずなのに、わざわざここで璃子に声をかけてきたところを見ると、おそらく「犯人」はコイツだろう。幼稚な嫌がらせをする理由も思い当たる。

大柄なその少女はバスケット部の主将でもあり、璃子と同じ塾に通う仲間でもあった。成績は振るわないもののクラスでの発言力は璃子より上だ。特に仲が良い訳でもなかったが、昨夜璃子の教室にやって来た子と一緒に馬鹿話をしている仲間でもあった。右京の元取り巻きの一員でもあった彼女は、部活動を引退してから伸ばし始めた髪がようやく肩に付く程になり、最近色気づいてきたのではないかと陰口を叩かれているのを気にしているらしい。

もちろん、そんな噂を元に璃子が「排除」をしたのだが、かなりしつこく右京に取り入ろうとしていたのがふと思い出された。

面倒臭い奴に目を付けられた。璃子は心の中で舌打ちをしながらも、この場をやり過ごすために愛想笑いを浮かべてスニーカーを洗い流すことを中断する。

「内履きで今日は帰るしかないね」

仕方がない、という風に肩を竦めて、璃子は下足入れの所に置いた鞆を取りに行くために振り返った。その途端大柄な由宇の体が視界一杯に広がり、危うくその体に顔をぶつけそうになる。はっとして見上げると、そこには由宇の嫌らしい程に下卑た、口の端を歪めただけの笑顔があった。

「な、何……」

「調子乗ってんなよ？ブスが」

先程までとは打って変わり、由宇は低い声で吐き捨てるように言い放った。ぞくりとする程剥き出しの敵意を感じ、璃子は思わず後ずさる。直感的に身の危険を感じたのだ。逃げた方が良い。璃子の心が警告を発した。

しかしその判断は若干遅かった。璃子の体重が後に移動した瞬間、由宇は片手で激しく璃子の肩を突き飛ばしたのだ。

「……つつ」

突き飛ばされた勢いで璃子は排水溝に倒れこんだ。強く背中と腰を打ちつけ、一瞬呼吸が止まるかと思うほどの痛みに顔を歪める。倒れる際に水道の蛇口に体の一部が当たったのだろ。止めたはずの水道から水がちよろちよと流れ出て、璃子の制服を濡らしていた。

痛みと共に体に伝わる水の冷たさに、璃子の中で何かがキレた音がした。

「……いつてえな、このドブス！」

日頃見せたことの無い、激しい怒りの表情を浮かべて璃子は由宇を睨みつける。滅多に悪態を吐かない璃子の暴言に、由宇は若干驚きの表情を浮かべながらもそれをふんつと鼻でせせら笑ってかわした。二人のやりとりに気がついたのだろう。由宇の背中越しには下級生達は何事かといった表情でこちらを伺っているのが見える。璃子はぎりつと歯軋りをして立ち上がった。

「そういうの逆恨みって言うの知らない？ 右京は迷惑してたって言うてたし！」

「カンケーねえだろ！ アンタ調子乗りすぎだし、いい加減ムカついてたしっ」

それに、と由宇は続けた。

「こんなのバレたら、右京クビじゃん？ 捨てられるよ、アンタ」

まるで勝ち誇ったかのような由宇の表情に、璃子は言葉に詰まる。「捨てられる」という言葉に、思わず振り上げそうになっていた右腕は力が入らなくなった。

バレたらクビ？

バレたら捨てられる？

耳の奥でそれらの言葉がリフレインする。目の前が真っ暗になったような錯覚に陥り、怒りで落ち着いていた膝の震えが蘇ってきた。体を支えられずよろめきながらも、必死に璃子は由宇の次の言葉を遮る何かを探した。しかし、急速に狭くなった視界では、由宇の口元だけが妙に生々しく蠢くのをただ見ていることしかできなかった。

「アンタさ、ケータイ二つも持ってんだね。金持ちー」

ふふっ、と可笑しそうに由宇は口を開いて続けた。

「昨日鞆から見えちゃったから誰のかなーって見てみたらさー、待ち受け見て超びっくりしたし」

「由宇、アンタがばら撒いたの……？」

ようやく口を開いた璃子の言葉に、由宇はニヤニヤしながら頷いた。その表情を見て、璃子は自分の迂闊さを呪った。昨夜右京にメルを出そうとして、ついucciかりプライベートのケータイを鞆に載せて席を離れてしまったことを思い出したのだ。そして他人のケータイを断りも無く覗き見するという行為を行った由宇に対して、許し難いという感情が湧いてくる。コイツのせいで順調だったはずの中学生生活最後の冬が台無しになるかもしれない。そう思うと璃子は再び右手に力を込めて握り直した。

そんな璃子の様子に気づかないのか、得意気な由宇は更に続けた。

「アンタさ、今日、保護者面談あるって忘れてたでしょ？」

「ソレが何？どうせ親来ないし」

嘘ではない。プリントは店の大関経由で渡したはずだが、その日は忙しいかもしれないと断られていたのだ。そもそも母親は学校の行事に一度たりとも参加したことが無い。今回もダメ元だと思って形式上知らせただけで自分もすっぱかすつもりだった。

「来てたよ？そんでさっきさー、アンタのママが通りかかった時にこの写メ見せちゃった」

「え……」

ひらひらと自分のケータイを璃子の顔の前でちらつかせ、由宇は璃子の様子を伺っているようだ。しかしそんな由宇を前にして、璃子は次の言葉を発することができなかった。

不意に璃子の脳裏に母の顔が浮かぶ。いつも、いつも仕事で自分を省みることの無い母親。いつも家に帰ってこない母親。家族らしい会話をしたのはいつが最後か分からない位、遠い記憶になっている。いくら皆に褒められる優等生でいても、いくら夜遊びをしていても、自分のことなど気にかけてくれるかどうか分からない母親のくせに、何故今日に限って面談などに来たのか。

ひょっとして自分の進路に興味を持ってくれたのか。ほんのりと胸に暖かい感情が芽生えるのを覚えるが、同時にそんな場合ではないことを思い出して璃子は慌てて首を振る。由宇が言うことが本当であるならば、母はどこに行ったというのだ。そう璃子が詰め寄ろうとした時だった。由宇が高笑いをして大通りの方角を指差した。

「只でさえケバくて目立つのにさー、車も派手だからすぐ分かったやつだけど、あんなママ恥ずかしくない？」

「なっ……」

自信満々な口調で母を貶められ、璃子の頬は一瞬にして紅潮する。握り締めた拳に、知らず知らず力が籠った。

「そんなんアンタに関係ねえだろ」

「うちだったらあんなママに来て欲しくないしい」

由宇の言葉の一つ一つが璃子の心に突き刺さる。まるでナイフで胸を抉る様な苦痛を感じ、暴発寸前の璃子はますます拳に力を籠めた。自分を貶められる以上に許せなかった。あの無駄に良く動く口を封じてやりたくて堪らない。

「いい加減に……」

「面談すつぽかして、すつごい顔して車乗って行っちゃったし。あの顔、超ウケるし、あれじゃウワキされても仕方な……」

「うるさいっ！」

璃子の右腕がしなった。パチンという乾いた音と共に由宇の顔は右側に弾かれ、同時に璃子の体は弾丸のように校門から飛び出していった。何が起こったか分からない様子の由宇は左手で頬を押さえたまま動かない。後に残された下級生達は、ただオロオロと辺りを見回しているばかりだった。

喪失

璃子が塾へ着くと階段を登りきらないうちに、固い金属が打ち付けられているような、甲高く耳障りな叫び声が聞こえてきた。建物の壁に阻まれて、単語の一つ一つを聞き分けることは困難だったが、その聞き覚えのある声の主は見なくとも分かる。璃子の母親だった。

やっぱりここか。

身を屈めた璃子は足音を忍ばせて教務室へと近づいた。カウンターの下まで来ると、そのガラス窓越しに中の様子を伺う。意外にも教務室の中は整然としており、璃子の母の姿は無い。相変わらずキンキンした声が建物中に響いてはいるが、幾人かの講師はその騒音を意に介した様子も無く仕事に勤しんでいた。

声が反響して特定しづらいが、教務室ではないとなると面談に使われるのは教務室の隣の小さな教室しかない。璃子はそのままの姿勢のままで隣の教室へと急いだ。そして閉まっている扉の窓から明かりがついていることを確認すると、そつと扉の引き手に手を掛けた。

「だからその淫行教師をここへ呼びなさいと言ってるんです！」

細く開けた扉から飛び出して来たのが余りに大きな声だったので、璃子の体は雷に撃たれたかのようにびくりと反応した。久方ぶりに聞く母の大声が幼い頃からの思い出を蘇らせ、徐々に心臓の鼓動が速くなる。フラッシュバックする記憶に、璃子の体は硬直した。

昔から何か気に入らないことをしでかすと、決まって母は大声で璃子を恫喝した。何がいけないのか、如何すれば良かったのかを言

い聞かせることは無い。ただひたすら大声で威嚇する姿は、さながら歴史の教科書に出てくる鬼神の像のようだった。幼い子どもが萎縮するのも当たり前である。父親が家に帰ってこない日や、漢字テストや計算ドリルの点数が悪かった日は特に酷く、鍵を掛けた部屋で何時間も怒られたものだった。

それがいつしか何も言わなくなった。五年前、彼女は事業を起こし外に居場所を求めた。家に居ない時間の長さとは比例するように彼女の璃子への関心は薄くなり、親子の会話も無くなった。元々家に寄り付かない父親と、その不満を外へ発散させた母。一人娘の受験にすら、二人とも無関心だった。

幼い頃の記憶に体が支配され、扉の引き手に掛けたまま硬直している指先が微かに震えた。これは寒さのせいだ、だから震えているだけだ。必死に自分自身へ言い聞かせながら、璃子は小刻みに震え続ける肩を両手で抱きしめる。

写真が出回ってしまったのは自分のミスだ。由宇の顔が脳裏をよぎる。自分のミスのせいで右京がクビになることは阻止しなければ自分に向けられたあの笑顔と耳を手放すのは、今の自分には耐えられない。そうだ、右京のためだ、と呟いた璃子は母の呪縛をありつたけの勇気で振り払い、再び顔を上げて教室の中を伺った。

「ですから、橘さんのおっしゃることを本人に確認してですね。その上で事実が判明次第、弊社の管理不行き届きとしてお詫びをさせていただきます」と……」

母の金切り声の合間に、トーンを抑えてゆっくりしゃべる男の声が聞こえる。相田の声だった。日頃生徒達と接しているときとは比べ物にならない程、落ち着いた理性的な語り口だ。

「だからまずここでその教師に謝罪させなさいと言ってるの、お分
かり？」

「誠に申し訳ございません。当社でも情報の真偽について確認を取
らないことには。もちろん真実が分かり次第嚴重に処分をさせてい
たきます」

「おたくの塾では女生徒を預かってるっていう意識が無いのよ。う
ちの娘はまだ15歳なのよ」

「重々承知しております。こちらとしても寝耳に水の話です。事実
確認のためお時間をいただきたいと申し上げております」

「条例違反でしょう！娘に何かあったらどうしてくれるの？。噂に
でもなったら恥ずかしくて表に出られないじゃない！」

「申し訳ございません。自分は璃子さんに限ってそのようなことが
ないと信じておりますが、何分にも情報が少ないもので」

「あんたじゃ話にならないのよ！責任者を呼びなさい！」

自分の剣幕に全く動じない相田の受け答えに業を煮やしたのか、
母は机に両手を叩きつけて立ち上がった。その瞬間、無意識に璃子
の体が再び硬直する。昼間の塾には不似合いな、細身できらびやか
なラメ入りの黒スーツ。派手に化粧を施した顔は憤怒の表情を浮か
べている。言い合いで乱れた前髪の間から眉を吊り上げ相田を睨み
つけ、今にも机を蹴り倒しそうな勢いだ。

「お母様のご心配はごもっともです。今回の件はこちらでも十分に

調査を行い、当事者は嚴重に処分させていただきます」

やんわりとした女性の声が、火花が散りそうな二人の間に割って入った。伊東の声だと気がつくのに少し時間が要ったのは、その声が相田同様いつもと違いすぎるほど落ち着いていたからか。璃子の困惑をよそに、伊東は母に向かって続けた。

「しかしながら、今は璃子さんを含め中学三年生にとっては受験前の大切な時期です。皆さん大変ナーバスになっています。感情に任せて事を荒立ててしまつては、璃子さんもショックも大きいでしょうし、今後の勉強に影響がないとも言いかれません」

そつと教諭するように、ゆっくり言葉を切りながら話す伊東に、母の表情が少しだけ和らぐ。耳に心地よい声は璃子の体からも徐々に緊張を取り除いた。

「こちらで働いていらつしやる方は、県の条例もご存知ないほど常識知らずなの？勉強に影響がつて言うなら、初めから娘にちよつかいを出さなければいいことでしょう」

「私どもではデリケートな時期のお子様をお預かりするということをしつかり教育してから現場に出すようにしております。しかし非常勤講師のプライベートまで管理できる立場ではございません」

「娘は被害者よ？少女趣味の講師は即刻クビにしていただきたいわ」

「それについては嚴重な処分を検討いたします。ですがお母様、璃子さんからもよく事情を聞いてあげてください。私達から見た璃子さんはとても思慮深く、軽はずみな行動をされるお嬢さんではありません。きつときちんと考えてのことと……」

そこまで伊東が続けたところで、再び母の顔色が変わった。来ると璃子は身構える。しかしここでこうしていても事態は変わらない。何より右京をこれ以上悪く言われたくなかった。璃子は引き手に掛けた指に力を籠めた。

「そうやって誤魔化すおつもり？」

「誤魔化すなんて滅相もございません。ただ……」

「中学生と分かって手を出しているのは犯罪でしょっ！会社ぐるみで犯罪者を庇うなんてどういことなの！訴えてやるわ！」

「やめてよ！」

力いっぱい扉を開けると同時に、璃子は叫んで立ち上がった。教室内にいた3人の大人達の視線が一斉に集まる。顔を真っ赤にして怒鳴っていた母の顔は、教室内に入ってきたのが璃子だと分かると更に赤味を増しこめかみには血管が浮かび上がった。その表情に気がついたのか、伊東が立ち上がって手を伸ばし母の動きを制している。憤怒の表情を浮かべる母に怯みそうになりながらも、璃子は3人の向かい合う机へ走りより相田と伊東に頭を下げた。

「黙っててごめんなさい。でも悪いことはしてないから、右京をクビにしないで」

「璃子……」

「本当に、塾で会うまで右京はうちが中学生だって知らなかったの。だから右京は悪くないの」

背後に突き刺さるような母の怒気を感じながらも、璃子は必死に頭を下げた。悪いことはしていない、ただ出会ってしまっただけ。唇を噛み締めながら、ともすれば母の剣幕に気圧されて真っ白になりそうな頭の中で、何度も何度も繰り返す。右京を悪く言われたくない、そして右京の不利を何とかしたいというその思いだけが璃子を動かした。溢れそうになる涙を堪えるように、ぎゅっと目を瞑り右京の笑顔を思い浮かべる努力をするが、想像上の右京の顔はどうしても笑ってくれない。哀しそうに、いやむしろ無表情にこちらを見ているだけだった。

「お願い！右京をクビにしないで！」

嫌な想像を振り払うかのように叫んだ声は、心の悲鳴の表れであろうか。大声を出したその瞬間、堰を切ったかのように璃子の両目から涙が溢れる。その透明な雫はぱたと床に落ちると、璃子の足元で四方に弾け小さな水玉模様を作っていた。

泣いてはだめだ、と涙を飲み込もうとしたとき、璃子の体は襟首からぐいつと強い力で後ろ側に引き上げられた。不意のことに、璃子はとっさに身を固くしてその力に抵抗する。すると今度は襟首と肩を掴まれて前後に激しく揺す振られ、ようやく自分は母に捕まっているのだということを理解した璃子は更に身を固くして抵抗した。講師との対話で既にエキサイトしていた母は、璃子の登場で更に血圧が上がったのだろう。あまりに激しく揺さ振られるため、璃子の髪と制服の襟は酷く乱れる。既に璃子の顔は涙と髪とでぐちゃぐちゃだった。

「いい加減にしないで！璃子、あんた被害者なのよ？クビにしないでなんて、何言ってるの！本人呼んで謝らせなさい！」

「う……右京はっ！悪くないのっ……！」

「こんな噂になって、親に恥かかせる気なの！」

一際母の語気が上がった。

視界の端に振り上げられた母の右手が掠める。ぶたれる、と璃子は顔を伏せたまま両手で頭部を庇うように身を小さくした。しかし数秒後の、またはその後数秒間続くであろう苦痛を予想した体は、幼い頃の恐怖がフラッシュバックして硬直する。既に母と体格も変らない位に成長し、母の張り手を避けようと思えば避けられる、反撃とて難しくないはずであるにも関わらず、璃子の体は記憶に縛られて動くことができなかった。

来る。

来たるべき衝撃を覚悟した、いやその記憶に身を竦ませた璃子は奥歯を噛み締めて目を伏せた。

しかし、固く目を瞑って数秒。璃子の体は苦痛を感じる事なく襟首の拘束を解かれ、床へと崩れ落ちた。ひんやり固い床の感触にはっとして、璃子は目を開け未だ頭を庇う手を降ろす。意識に靄がかかって、すぐには視覚や聴覚が上手く機能しない。頭上で男女の激しく言い争う声が出ている、と気付くまで僅かな時間を要した。しかし次第に靄が晴れ意識がはっきりとしてくると共に、その声が母と相田のものだと分かった。

自分の身に何が起きているのか分からないまま、璃子は声の主達を確かめるように顔を上げる。するとそこには真っ赤な顔で夜会巻きした髪を振り乱しながら何かを叫ぶ母と、今まで見た事も無い程険しい表情で母の振り上げられた右手を抑えている相田が居た。

殴られなかった。

璃子は両手で顔を覆って泣き出した。

「璃子っ」

叫び声にも似た伊藤の呼び掛けにも応じることができない。声にならない叫びが喉から溢れ出そうになるのを、両手で口を押さえて必死に堪えた。取り乱したくない、そんな僅かな自制心に反するうちに、璃子の肩や齒は制御ができない程小刻みに震えていた。

しかし走り寄って来た伊東の胸に自分の頭を抱え込まれ、それはいとも簡単に我慢の限界に達してしまった。体の奥底から濁流のように押し寄せる様々な感情の塊が、僅かに残っていた自制心をなぎ倒し嗚咽と共に外へ溢れ出る。

話を聞いて。

自分を見つめて。

こっちを向いて。

苦しい。苦しい。苦しい。

求めても拒絶される。しかし諦めきれずに焦がれ、長く押し殺し気付かない振りをしていた想い。

かつて無い程の激しい感情の高ぶりに、璃子は呼吸をすることさえ忘れて泣き続けた。

時折走る腰の鈍い痛みに、璃子は顔を歪ませた。母が勢いに任せて自分を蹴っているせいだろう。自分の嗚咽の合間に、頭上でまだ言い合いを続けている三人の声が聞こえていたが、内容は全く聞き

取れなかった。酷い金切り声で怒鳴りつける母の声はただの騒音にしか聞こえない。

理解したくもなかったのかも知れない。そんな騒音装置と同じ空間に居ることに、酷い吐き気と悪寒がする。自分の鳴咽と母の罵声で心も体も感覚が麻痺していくかのようなだった。伊東の手が触れているはずの背ですら暖かみをまるで感じないどころか、璃子はその手を払い除けたい衝動に駆られた。

母が何事か叫んだ、と気付きながらもしゃくり上げる璃子の腰に、がつんという音と同時に痺れるような激痛が走った。

「橘さんっ、暴力は止めてください！」

耳元で伊東が叫ぶ。その痛みと声に弾かれるように、璃子は両手で伊東を突き飛ばす勢いで立ち上がった。きつと顔を上げて母を睨み付けると、涙でぐしゃぐしゃになった顔を制服の袖で拭う。璃子の突然の行動に、三人はぱたりと動きを止めた。興奮状態の母の濃い化粧は汗と皮脂で崩れ、この上なく醜悪だった。騒音は止んだもののその口はぱくぱくとまだ何か言いたげに動き続け、こめかみに浮き上がった青筋はち切れんばかりに怒張っている。璃子はそんな母を歯を食いしばって睨み続けた。

恥をかかせたかった訳ではない。逆らいたい訳でもない。ただ、話を聞いて理解してもらいたかったただけなのに、それすら不要と聞く耳すら持ってくれない。

自分は人形ではない。

璃子は拳を握り締め、震える両足を踏ん張った。

「……お母さんなんて、大っ嫌い」

目を血走らせてこちらを見る母に、吐き捨てるように璃子は呟く。そして踵を返すと、呆気に取りられる三人を後にして教室を飛び出した。

数分前からの騒ぎを聞きつけて来たのだろう。開け放たれた教室の引き戸の影には、教務室で作業をしていたはずの講師たちの姿があった。皆神妙な顔をして、ことの成り行きを見守っていたらしい。しかし璃子は顔を伏せ、心配そうな表情の講師達の輪を両腕でかき分けるように塾を飛び出した。背後で伊東と小池らしい女性の声があったが、それをも振り切るようにビルの階段を駆け下りる。

自分を見てください。自分を否定する口。そんなものにいつまでも焦がれていた自分。都合の良い空想をしていた自分。

それらを全て振り切りたい。

息も切れ爆発する鼓動で胸が破裂しそうな程、璃子は無我夢中で走り続けた。まるで弾丸のように璃子の体は真つ直ぐ目的地へと向かう。心臓が口から飛び出してしまうのでは、というところであろう。璃子はその足を止めた。両手を膝に付き、咳き込みながら肩で荒い息を整える。喉の奥から鉄の味がするようだった。

依然として落ち着かない鼓動と呼吸だが、十二月の冷えた風に吹かれた頭は徐々に冷静さを取り戻していった。冷たい手で顔に触れると、涙は既に乾いていた。しかし腰から下が濡れている制服は、冷たい外気に晒され更に璃子の体を冷やしていく。感覚が無くなりそうな程冷えた下半身に、母に蹴られた痛みだけが残っていた。

「……右京お」

恋しい人の名を呟く。壊れそうな自分の心を受け止めてくれる人

は、もう右京しか居ない。両手を膝に付いたまま顔を上げたその先には、その男の住むはずのアパートが建っていた。

近くにある大学に通う学生達が多く住んでいるこの街には、ワンルームのアパートが数多く建っていた。右京の住むこの物件も単身者用なのだろう。璃子の立つ道路から数えられる玄関の数と、同じ数の駐車スペースがある。ちらりと視線を走らせ、右京の黒いコンパクトカーが在ることを確認する。途端に璃子は軽い緊張を覚えた。

勢いでここまで走ってきてしまったものの、いざとなるとどうして良いか分からない。そもそも、右京がどの部屋にいるのかも分からなかった。

実は塾で再会を果たしてから、璃子がここを訪れたことは無かったのだ。璃子が通う中学校の学区内に位置するため、目撃されることを懸念した右京の言うことに従ったからだ。逢瀬はいつも車の中。または学区から離れた繁華街。璃子自身も、アパートに招きいれられたとしても食事の支度ができるわけでもないため、外で会うことの方が気楽だと思っていた。もちろん慎重な右京に明確な住所を教えてもらったことも無い。

しかし右京の情報は塾内に溢れていたため、住んでいるところを割り出すなど地元の住民にとっては造作もないことである。取り巻きたちの噂話を元に予想した物件は当たり前だった。

見上げた物件は二階建て八戸。少し年季の入った青いガルバリウム鋼板の外観に、昔ながらのコンクリートのブロック塀が周囲をぐるっと囲んでいる。しかし塀は低く、訪れる人間を周囲から隠す役目は果たしてくれそうもない。二階に続く階段も手摺に申し訳程度に風避けが付いているだけで、いざとなっても隠れる場所は無い。これでは右京が璃子の来訪を避けたがるわけだ、と璃子は妙に納得した。

メールをしよう、とケータイを探そうとした璃子は自分が鞆すら持っていないことに気が付き舌打ちした。先刻の騒動で鞆も内履きも塾に放り出してきたらしい。いや、正確にはどこに落としてきたかなんて覚えてもいない。プライベート用のケータイでさえ今日は不運なことに鞆の中だ。右京と連絡しているのがバレたら、と普段ならポケットに忍ばせているケータイを敢えて鞆に入れてしまったいた自分の不手際を嘆く。万一に備えてキーロックはしてあるものの、待ち受けは「あの画像」である。見つかったらどうしようという気持ちを、もうバレているのだからと無理矢理押さえ込むが、ケータイが無いという状況は璃子の緊張を更に強くした。

早く会いたい。会って抱きしめてもらいたい。いつそのこと片っ端から玄関をノックして回りたい。しかしいきなり来てしまった自分に対して右京がどんな態度に出るだろうか考えると、なかなか一歩目を踏み出す勇気が出なかった。両手を膝に付いたままの姿勢で荒い息がなかなか整わない璃子を、私立高校の制服を着た女子高生が不審そうに眺めながら通り過ぎていく。

短すぎるスカートの裾がひらひらと揺れ、それに合わせるように甘いローズ系の香水の香りが璃子の鼻をくすぐる。一連の騒動でぐしゃぐしゃになった制服姿の自分とはえらい違いだった。低いブロック塀の向こう側で彼女がスカートを翻しながらアパートの階段を登っていくのを目で追いかけて、あの子が行く部屋はノックしなくて大丈夫だとぼんやりと考えた。

ただここでもうしても始まらないのは理解していた。誰かが追いかけてくるかもしれない。緊張を飲み込んで、璃子は体を起こす。あの女子高生が訪れる部屋を確認してその隣からノックしよう。そう思って璃子は体を伸ばして彼女の訪問先に目を向ける。彼女はまさに今、二階の一番奥の部屋のインターホンを押していると

ころだった。

あそこじゃない、と目を落とそうとしたその時、玄関の扉が開き住人が彼女を部屋へ招き入れるのが見えた。細身で長身の彼女は扉が開くとすぐに招き入れた男に抱きついたため、璃子からは制服の肩越しに男の明るい髪色しか見えない。

しかし璃子はその髪を見て息を呑んだ。まさか、という思いでその光景を凝視する。抱きついた女子高生はその男の耳に軽くキスをし、その長いふんわり縦巻きにした茶髪を靡かせて部屋の中へ滑り込んだ。そして玄関先に残された男は彼女の後を追うように、部屋へ入るため体をこちら側へ向けた。

どくん、と心臓が鳴ったのが聞こえた。

瞬きをすることも、息をすることも、忘れたように璃子はその場で立ち尽くす。自分が一体何を見ているのかも理解できない。視細胞からの視覚情報をシナプスが伝達することを拒む中、璃子の目はその光景を映し続けた。周囲から音は消え失せ、こめかみの辺りで血管が脈打つ音だけが脳に直接響く。極端に狭くなった視野はゆっくuriとした男の動きのみを捉え続けた。

寝かせてはいるが明るく金髪に近い髪色、黒縁の眼鏡。それほど高くない身長、細身の体型。ドアを押さえる右手の人差し指には、見覚えのある銀色の煌き。

信じ難いが見紛えようもない。璃子の脳はその人物を「認識」した。

今日、何より他に守りたかったものであり、何より自分を包んで欲しかったもの。絶対の信頼を寄せていた、その人。

「右京……？」

乾いた唇は張り付くようで、たった一言さえ上手く発語できない。喉はカラカラに渴き、生唾を飲み込もうとも咽頭がそれを拒絶する。足元が音を立てて崩れ落ちていく錯覚に飲まれそうになるが、震える膝に必死に力を込め璃子は右京の姿を凝視しながらふらつく足取りでアパートに近づいた。その姿に気がついたのだらう。部屋に戻ろうとする右京の動きがぴたりと止まった。その瞬間男はぎよつとしたように目を見開き、慌てたように玄関の中と外とに視線を動かした。

「り、璃子？」

距離のせいかな声は聞こえないが、確かにそう言ったように唇が動いたように見えた。やはり右京だったのだ、と璃子はよろけながらもアパートの階段へと近寄った。驚いたような、しかしばつの悪そうな表情で自分を見つめる右京が階段の手摺越しに見える。その口元が、ちつと舌打ちをしたように動いた。音は聞こえないものの、舌打ちをされるという「拒絶」にはつとした璃子の体はその場で凍りつく。

何？どうして？何が起きている？あのヒトは誰？

頭の中は疑問符で埋め尽くされ、何も答えを弾き出すことができない。目をそらすことも考え付かなかった。まるで眼球が固定され、焦点を合わせる筋肉が硬直してしまったかのように、璃子の視線は右京から離れない。右京と会うときであればいつも軽やかに動くはずの両足は、根が生えたかのように地面から離れてくれなかった。

そんな璃子の様子を見ていた右京は、何の躊躇いもなく一瞬玄関

の中に姿を消した。中の女子高生に何事か言い訳でもしてきたのだろうか。璃子が呆然と玄関ドアを見つめていると、すぐさま右京は姿を現し、肩を竦めながら階段を降りてきた。カーゴパンツのポケットに手をつ込みながらリズムミカルな足音で階段を降りきると、ひらりと低いブロック塀を飛び越える。そして璃子の前に立った右京は、驚くほど冷たい表情で璃子を見下ろしたのだ。

「何？」

低い声だった。それも苛立った感情を隠すわけでもない、不機嫌極まりない声。混乱したままの璃子を更に萎縮させるには、十分過ぎる程にそれには威圧感があった。

「来るなって言っただろ？バレたらどうすんだ、帰れよ」

璃子の応答を待とうという気配はまるで無い。服装や髪型の乱れに触れることも無い。璃子が凝視している右京の表情は変わらず冷たかった。

こんなことは無かった。いつもいつも、右京だけは自分の話を受け止めてくれていた。右京は自分の味方だと言ったはずだったのに。右京の突き放すような話し振りに、璃子は堪らず声を上げた。

「右京……あのねっ……」

「今さ、ちょっと忙しいんだけど」

あくまで余所余所しい態度を崩さない右京は、ポケットから両手を出すこともしない。その無言の拒絶に璃子は言葉を失った。

苛立ちを抑えない様子の右京は、ちらちらと自分の部屋の玄関へ

と視線を走らせる。右京の部屋に入ってしまった女子高生の制服は、この地域でも有名な「受け皿校」のもだった。部屋にはその制服を着た彼女がいる。先程自分を訝しんでいたあの女子高生が、すりとした肢体を惜しげもなく見せ付けて行ったあの女子高生が、彼の部屋に居るのだ。

眩暈がしそうな程様々な感情が璃子の中で渦を巻き、頭部から急速に血液が降りていく感覚に襲われる。このまま倒れてしまうのではないかという程に混乱した璃子の頭に、不意に以前掲示板に書き込みされていた内容が浮かんだ。

右京は出会い系で遊んでる。

はっとして璃子は顔を上げた。自分を見下ろす右京の冷たい表情に変化は無い。思い返せば璃子との出会いとて、出会い系サイトではないにしろインターネットというツールを介したものだ。プロフ、タイミングの良過ぎるメッセージ、高校生。璃子の中で何かが繋がった。

遠くの方で車の急ブレーキの音がした。その音で璃子是我に返り、その表情を一変させる。まだ感情は追いついていないが、自分が置かれている状況を理解した璃子の目は鋭く右京を見据えた。璃子の様子が変わったことに右京は一瞬戸惑いの表情を見せ視線を逸らしたが、すぐにまた厳しい顔つきに戻り璃子を睨み付けた。

「ねえ、まだ質問終わんないの？」

階段の上から、ハスキーな女の声が降ってくる。制服の上着を脱ぎ、長いセーターの袖をひらひらと揺らした女子高生が、階段の手摺から身を乗り出すようにこちらを見ていた。長く伸ばした明るい髪に、ずいぶんと濃いアイメイク。すれ違ったときには気がつかない

かったが、セーターの袖口から覗く長い爪は夕日を浴びてキラキラと煌くアートを施されている。右京は表情を崩してそれに片手を振って応じ、璃子へは「カエレ」と口だけ動かして見せた。

「ああ、もういいみたいだから、お前部屋戻つとけよ」

はあい、と甘えた声で彼女は答えると、笑顔で璃子に向かって手を振った。まるで華やかな蝶。それに対する自分はどうか。たった数年の年齢差ではあるが、今の自分達の位置関係のように大きく差をつけられているように感じた。それも、自分には考えも付かないほど低い偏差値の高校へ通う女だ。璃子は悔しさに唇を噛む。北風が剥き出しの脚を撫でていくが、既に寒さなど微塵も感じる余裕はなかった。

「ジューケンセーは早く帰ってベンキョーしてねえ？」

その声に璃子の体内の血液が沸騰した。恐らく彼女は璃子と右京のことには気がついてるのだろう。その上での余裕を見せ付けられ、今更ながらに自分がいかに惨めであるか気付かされる。

悔しい。

自分の思い込みに、右京のしたたかさに、彼女の蔑みに、今日までの自分の愚かさに。自分の求めるモノはいつも手に入らない。分かっていたのにそれを求め、手に入れた気になっていたということが悔しい。

行き場の無くなった感情は拳へと流れ、璃子は両手を強く握り締めた。

限界が近かった。璃子はきつと右京に視線を戻し、口を開きかけ

たその時である。

「へえ、お前、ジョシコーサーと付き合ってたの？」

予期せぬ声が出た。その声と同時に、璃子の開きかけた口と振り上げた拳は大きな手で押さえられ、体ごと後ろへ引き倒される。力強さは感じるものの強引さは無い力加減。いきなりの事ではあったが璃子の体は抵抗することなく、いつの間にか背後に居た人物に抱き止められた。ふわりと動く空気の中に、嗅ぎ覚えのあるタバコの匂いがした。はっとして瞬きをすると右京の目が驚きで見開かれているのが見え、璃子は自分を抱き止めた人物を振り返る。

「いいなあ、ジョシコーサーかあ。若いなあ。なあ、中山センセ？」

「相田うち……！」

璃子の背後で頭一つ高いところにある相田の顔は、口調とは裏腹にいつもの飄々とした表情ではなかった。塾で璃子の母親とやりあった時と変わらない、否、それ以上に険しく威圧感がある。厳しい相田の顔に只ならぬ気配を感じたのだろう、右京は言葉を失くして立ち竦んでいる。しかし相田はそんな右京の様子には構うことなく、璃子を抱き止めたまま話を続けた。

「中山センセは若いし大学でもモテそうだもんなあ？ 付き合う女なんて苦労しなさそうなのに、敢えてそこでジョシコーサーか。ねえ君、どこで知り合ったの？ 俺、カノジョいねえから出会いの場でも提供してよ？」

右京を睨みつけながら、相田は階段の上で様子を伺っていた女子高生にも声をかけた。自分に話を振られるとは思っていなかったの

か、彼女は困ったような表情で階下の右京に視線を走らせる。右京は彼女と相田に交互に視線を向けながら、必死に返す言葉を探しているようだった。

「相田先生、これはっ、実はっ、か、家庭教師の……」

「でもさあ中山センセ、これってちょっと問題アリだと思わねえ？」

ようやく言い訳を思いついたのか右京は口を開いたが、さらりと、しかし鋭く相田が右京の言葉を制した。

ぎくりと口をつぐむ右京の顔には、つい先程までは見られなかった光るものが浮かんでいる。冷や汗だろうか、脂汗なのだろうか、それは分からないが彼が激しく動揺しているのが璃子にも見て取れた。自分と対峙しているときの余裕は全く感じられない。それほどまでに、相田の全身から発せられる威圧感が右京を追い詰めているということなのだろうか。

「アンタ、確か二十四だったよなあ？　俺と二コ違いだっけ？　なあ」

右京はついに相田から目を逸らせた。手の平を額に押し付けたりカーゴパンツに擦り付けたり、落ち着きが無いことこの上ない。既に右京は璃子のことはおろか、階段上の彼女のことすら眼中に無いのだろう。必死に視線を彷徨わせ、何か言い訳を探しているようだった。

「あ、あのお、アタシ帰った方がよさげですよねえ……？」

所在なく地上を見下ろしていた女子高生がおずおずと口を開いた。ああ、と相田は右京から目を離さずに返事をする、璃子の口を押

さえていた手を離してひらひらと振る。

「帰った方がいいね。多分、かなりメンドーなことになると思うよ?」

「は、はいっ」

「巻き込まれなくなかったらさ、部屋にある私物、全部残らず引き上げとくといいよ」

痕跡残すなよ、と相田は呟く。その言葉に右京の体がびくつと反応したようだった。忙しく動いていた両手は固く握り締められ、心なしか小刻みに震えているように見える。

それを意に介した様子も無いまま、女子高生はそそくさと玄関の中に戻ると直ぐに鞆とジャケットを抱えて部屋から飛び出してきた。ローファーを突っ掛けて転がるように階段を降り、さっと会釈して右京に向き直る。その表情は明らかに蔑みが含まれており、小声で何事が告げると振り返りもせず立ち去ってしまった。

それを見届けると相田は、さて、と呟いて両手を璃子の肩に乗せた。

「カノジョ帰っちゃったし、仕切りなおしてちょっと事情聞かせてもらえるかな」

「じ、事情って……」

「この子がココにいることの、詳細な理由」

「それは、その」

「偶然とか、知らねえとか、宿題提出とか、そんな惚けた言い訳はいらねえぞ」

一人で熱くなっていた頭は二人のやり取りを見ているうちに随分と冷静になつてきた。塾内に居たときは相田の様子に思いが及ばなかったが、今は右京の様子以上に良く観察できている。軽口のような口調ながら、相田の声には璃子の母と口論していたときより強い何かが籠められているようだ。それが何であるのかは分からない。はつきりしているのは、それが全て右京に対してぶつけられているということだけだ。

怒っているのかな、とぼんやり璃子は思った。

頭上でのやり取りを見ているだけの璃子にも感じられるそれを、真正面から浴びせられる右京が怯むのも分からなくもない。ましてバイトとはいえ職場の上司である。右京の脳裏にも「クビ」の二文字がちらつているのだろう。以前聞いた右京の台所事情が本当であるなら、この時期にクビになるのはかなりの痛手のはずである。

しかし相田がここに来た理由も、その怒りが自分ではなく右京に向けられている理由も、璃子には全く理解できなかった。ただ自分の背中に感じられる相田の体温と自分を包むタバコの匂いが、冷えた身体と心に何故か心地良い。目の前でうろたえている右京を見る自分の目も穏やかになっているに違いない、と思った。ついさっきまで庇うつもりでジタバタしていたのが、まるで嘘のように感じる程だ。

「でさ、どうしてこの子がココに来てるのかな？中山センセ？」

たじろぐ右京に対して、相田は口調を緩めずに問う。璃子は自分

が口を挟むべきかどうか迷いつつも、首だけ動かして二人を交互に見つめていた。

「た、たまたま、通学路とかじゃないんですか、ねえ……」

「璃子んち、街挟んで向こう側だったと思うけど？」

「が、学区ですし、友達のうちが近い、とか……」

しどろもどろになりながらも捻り出した右京の言い訳は、相田の言う惚けた言い訳ではなからうか。歯切れ悪く、なおも保身のための言葉を発する右京を見つめる璃子の目がすつと細くなった。これがつい先刻まで、自分の守りたかった「居場所」だろうか。鮮やかに見えたはずのモノは、彼の吐く白々しい言葉の欠片を纏いどんどん色褪せていく。

「じゃあ、この子がここにいる理由は、中山センセには関係ないってこと？」

「は、はあ……まあ、多分……」

へえ、と低く呟いた相田は璃子の肩に置いた手に力を籠めた。喉の奥から出したようなその声は、微かな振動となり璃子の背中に伝わる。手の平の感触と背中越しに伝わる声で、頭上の相田が今どんな顔をしているのか想像するのは簡単だった。

「璃子、だそうだけど、それで間違つてねえか？」

唐突に意見を求められ、璃子は息を飲んで相田を見上げた。頷くべきか、否定するべきか。相田の眼光は鋭く右京を捉えたままで、

表情からは彼の真意が見えない。束の間の逡巡の後に右京に視線を送ると、そこには眉根を寄せて何かを訴えるような表情を浮かべる男が居た。相田から目を逸らしつつ、ちらちらと璃子の顔を見ては頬の筋肉を引き攣らせて微笑を作ろうとしている。この期に及んでまだ自分が無邪気にそれを求めているとでも思っているのか、と璃子は毒づきたい気持ちで一杯になった。

カッコ悪い……

しかし一度は恋焦がれた相手である。ここでその言い訳を否定したら右京はバイトをクビになって、困ったことになるかもしれない。璃子の中に僅かに残ったのは未練なのか、それともただの憐憫なのか分からない。否定もできず、ただどうしても肯定する気にもなれず、璃子はぶいっと顔を背けた。

「うち、知らないし」

それだけ呟くと、璃子はだんまりを決め込むことにした。あとは、右京が勝手にすれば良い。今は一刻も早くこの場から立ち去りたかった。

璃子がそれ以上何も言わないことが分かったのだろう。相田は手の平に籠めた力を緩めると、ぽんぽんといったものように璃子の頭を軽く叩いた。いつもと同じ力加減に、璃子の肩からずとんとかが落ちるように力が抜ける。思わず口からほっと息が漏れた。

あ、そ、と相田は肩を竦めた。声のトーンもいつもの飄々としたものに戻り、口調も軽い。片手をスーツのポケットに突っ込むと、璃子を顎で促した。行こう、ということだろうか。璃子がきょとんとしながら促された方を見やると、1区画程離れたところに黒いス

ポーッワゴンが停まっている。急いで停めたのか斜めに車道へはみ出していたが、どうやらあれに乗るらしい。璃子は了承の意を込めて歩き出した。

右京へは目もくれない。彼がこの先どうするのか、もう自分には関係ないことだ。クラスメイト達には「フってやった」とでも言うっておこう。そう思いつつ車へと歩いていくと、後ろで相田の声があった。声に若干の嘲笑が含まれているのを感じ、璃子はそっと振り返った。

「じゃあ俺からは何も言うことないけど、どっちにしる身辺整理しといった方が良いと思うよ?」

「どういことっすか?」

「お前もさ、ハタチ過ぎて四年も経ってんだから条例位知っとけよ? っていう訳で、そういうこと」

「条例……?」

「そ、条例」

訝しむ右京にクギを刺すようにきっぱりと相田は告げる。

「璃子がここに居る件もそうだけど、結構お前、他に余罪もありそうじゃん。遅かれ早かれ、お巡りさんが事情聴取に来るんじゃないかね?」

「え?」

璃子が声を上げると同時に、右京の顔色がさっと変わった。挙動

不審そのものだった全身の動きが止まり、顔からは血の気が引いていくのが見える。璃子も耳を疑うような相田の台詞に、ひどく動揺しているのは確かだ。真つ青な唇と握った拳が小刻みに震えているのは、寒さのせいだけではなさそう。そんな右京に、相田は覚悟しとけよと低い声でとどめを刺す。

「お前シューカツ前だったっけ？ まあ、ご苦労さん」

蒼白となった右京程ではないが、璃子も相田の台詞に驚きを隠せなかった。大きな目を更に大きく見開き、相田の次の言葉を待ちながら今日の経緯に考えを巡らせる。そもそもお巡りさんが事情聴取とはどういうことか。自分と右京の関係がバレることで、彼に対して警察が出てくるような話に発展するなど考えてもいなかったのだ。むしろ取り巻きであったクラスメイトについて、掲示板サイトに中傷コメントを載せた璃子に矛先が向くものと思っていた位である。

ふと、脳裏に母の罵声が蘇った。同時に腰から膝にかけて鈍く痺れるような痛みが走る。それが呼び水となって塾での騒動が次々と記憶から溢れてきた。母の声、暴力、鬼のような形相、そして恫喝。フラッシュバックした記憶に身体が硬直しかけ、口の中に溜まっていく生唾を璃子はごくりと喉を鳴らして飲み込んだ。

まさか、母が？

はっとした璃子は相田に駆け寄った。

「相田っち、お母さんが警察に？」

「伊東先生が止めてたけどな。途中でお前追っかけて出てきたからその後どうなってるかは知らね。あの剣幕じゃなあ……」

冬になり僅かに暖色系のカラーを入れた相田の髪は、暮れかかった夕日に透けて茜色に輝いていた。相田は無造作に散らした髪の間隙に指を入れ、ぼりぼりと頭を搔くと璃子に首を傾げて見せる。焦る璃子を尻目に悠長な仕草で質問をかわすと、相田は行くぞと車へ向かって歩き出した。ダークグレーのスーツの裾が揺れ、その広い背中が璃子を呼ぶ。

しかし警察という単語に璃子は焦った。急いで母を止めなければ、本当に右京が警察に捕まってしまうかもしれない。落ち着いていたはずの心臓は、再びその動きを速くして璃子を急かした。ともかく一回帰らねば、と璃子が相田の背中を追うために足を踏み出そうとした、その時だった。

「……お前っ、バラしたのかよ！」

耳元で右京の声がしたかと思うと、左後頭部に激痛が走った。それと同時に有無を言わせない強い力で、頭が後方へ引き摺られる。幼い頃、近所の男の子達と喧嘩になったときに味わったのと同じ痛み。肩まで伸ばした髪をひねり上げられたのだ。ぐっと堪えて逃れようとするが、更に加えられた局所的な激しい痛みに短い悲鳴を上げる。痛みには耐えかね、璃子は両手で頭を庇うように覆った。眼前に血の気が引ききって青くなった右京の顔が迫る。耳のすぐ近くでは鋭い痛みと共に何かが引き千切られるような音が聞こえた。

「何で親にバラしてんだよ！ お前、俺の人生めちゃくちやにする気かよっ」

「右京っ、やめてよ！ 痛い！」

鬼気迫る表情に恐怖を覚え、璃子はそこから逃れようと必死に両

手を振り回した。しかし髪を掴まれているとは思うように動けず、両手は空を切る。背後で相田が右京を制止する声がするがそれはまだ遠い。

拘束と痛み。そして罵倒。右京の顔に母の面影が重なった。

怖い。

怖い。

怖い。

璃子の喉の奥で、声にならない叫びが渦巻いた。

「元はと言えばお前が高校生だつて嘘つくから悪いんだろ！ 分か
つてりやガキの下らねえ話になんか乗らなかつたんだ。それをつ！
お前の親父にコネが作れるかと思って付き合つてやつてりや勘違
いしやつて！」

容赦ない力で髪を掴まれ、左右に揺す振られる。頭皮が剥がされる
ような痛みに、璃子は苦痛の声を上げた。

「お前なんて、親父の件が無ければシカトか口止めで終わつたんだ
！ お前の価値なんて……痛っ！」

無我夢中で振り上げた左手の指先に何か手応えを感じると、髪か
ら右京の手が離れた。拘束を解かれ、璃子の身体はゴムボールのよ
うにその場から飛び退く。数歩の間合いを取ったことを確認して振
り返ると、右京は相田に羽交い絞めにされていた。振り返ると同時
にグレーの制服の肩や袖にばらばらと髪が落ち、数百本単位ではな
いかと思われるようなその量にぎょっとして璃子は目を見開く。

母をはじめとして、直接身体に危害を加えられることがこれまでの人生で無かった訳ではない。しかし大人の男の、抵抗しても抗いきれない程の暴力に晒されたことはない。羽交い絞めされたまま血走った目でこちらを睨む右京の右頬には、二本の赤い筋が走っていた。豹変した右京の目には、自分へ対する黒い感情が露わになっている。母に感じるものとはまた別の恐怖が足元から這い上がり、璃子は身を震わせた。

「見苦しいんだよお前！ 逆ギレしてんじゃねえ！」

三人以外の人影も見当たらない、夕暮れ時のアパート街に相田の一喝が響く。その声で我に返ったのか、璃子を睨み付けていた右京の目から暴力的な光が消えた。全身の強張りが解けたのか、相田が拘束を解くと右京はその場に崩れ落ちる。ただでさえ大柄とは言い難い右京の身体は、空気が抜けた風船のように小さくなった。

あれ程焦がれて手に入れたかったモノなのに、なんと惨めに、そして小さく見えるのだろうか。視線を落として小刻みに震える肩を見て、近寄って抱きしめなくなるわけも無い。最早それは璃子にとって情をかける存在ではなくなっていた。

「行くぞ、璃子」

既に相田も同じ考えなのだろう。足元にへたり込んだ右京には一瞥もくれず、璃子を促して車へと歩き出した。璃子も異存はない。とにかく今は一刻も早くこの場から逃れたい。制服の肩や袖に付いた髪を払い落とすと、震えそうな足で相田の後を追った。

もう二度と会いたくない。情も期待も未練も何もかもを捨て去るように、璃子は一度も振り返らずに相田の車に乗り込む。日が暮れかかったアパート街に、じわりじわりと夜の寒さが忍び寄っていた。

「ああ、今日からもう仕事来なくて良いわ。部長に掛け合って代講の補充してもらったから。じゃあな」

璃子を車に乗せると、相田はそれだけ告げてドアを閉めた。

暗転

「はい、じゃあこっちも一旦自宅へ向かいます」

相田は通話を終えると、ぱちんとケータイを閉じてハンドルを握りなおした。璃子に対して何を聞くでもなく、車内にBGMをかけるわけでもない。短い信号待ちの間に塾へ経過報告の電話を入れた以外、相田から何か行動を起こすことは無かった。璃子自身、何か聞かれてもどう答えて良いか分からない。それでも何か切り出されるのではないかと、璃子は何度もちらちらと視線を動かし相田の様子を伺った。

黙ったまま前を見つめる相田の目には先程の険しさは無い。それどころか今にも鼻歌を歌いだしそうな、いつもより愉快そうな表情をしているように見える。変なの、と璃子は鼻を鳴らしてシートに背を預けた。動いた空気に違和感を覚え、そういえばと璃子は改めて相田に視線を送る。塾内に居ないにも拘らず、タバコを啜えている相田を見るのも何か新鮮な気がした。小奇麗に整頓された車内は意外にもタバコの匂いが殆ど付いておらず、ルームミラー越しに後部座席にはスプレー型の除菌消臭剤が転がっているのが見える。

「相田っち、吸わなくていいの？」

ぼそりと呟くように、璃子は口を開いた。

「あ？」

「だって、好きじゃん？いつも吸ってるし」

璃子が指を立ててタバコを吸う真似をすると、相田はああ、と納

得したように頷いた。口角がぐいっと上がり、いつもの人をからかう様な笑顔になる。ハンドルから片手を離し、車内の灰皿を開けて璃子に示した。さぞかし大量の灰がと思っていた璃子の意に反し、そこにはビーズ型の消臭剤が敷き詰められていた。

「車って密室じゃん。匂い籠んの嫌なんだよ」

「だからアレも載ってるの？」

璃子は後部座席を指差す。相田は前を向いたまま、大きく頷いた。

「そ。俺空気は綺麗なのが好きなの」

「意外……」

「嘘だもん」

目を丸くして璃子が振り返ると、相田はしれっとした表情で舌を出した。

「これ、社用車だもん。禁煙カー」

言葉を失って璃子はぽかんと口を開ける。車中に相田の馬鹿笑いが響くと、ようやく自分がかつがれたことに気がつき、真っ赤になつて頬を膨らませた。それを見た相田は更に面白そうに笑うと、璃子の頭をぽんぽんと叩いた。ひどく子ども扱いされていることに、璃子は心底憤慨した表情を作つて相田から顔を背けた。しかし尚も笑い続ける相田に対して腹が立ち、ついに腕を振り上げて相田の腹を殴る真似事をした。数回繰り返しているうちに、璃子の口元も緩んで笑顔に変わる。ついには車内で二人、腹を抱えて大笑いを始め

てしまった。

「ウソツキ」

「ばーか」

「それでも教師かよっ！」

「俺、塾講師だもーん」

「そういう問題じゃないじゃん。大人のクセに子ども騙して、ヒドイっ！」

相田はニヤニヤしながらも、笑いながら殴る真似を続ける璃子の手を止めた。手首に伝わる暖かさに璃子の身体の力も抜けていく。笑ったことで昨日から続く極度の緊張が解れ、自分の手足が少しだけ温まっているのが分かった。相田が迎えに来てくれたことが、ありがたく思えてくすぐったい。璃子が手を下ろしたのが分かったのか、だからさ、と相田ハンドルを握り直して続けた。

「お前、案外単純なんだから。次からは気をつけるよな」

ほっとするようなトーンでしみじみ呟かれ、その言葉に璃子は素直にこくりと頷くしかなかった。

冬の夕方は短い。車に乗ったときはまだ空に茜が差していたが、数分もしないうちにそれは深い群青へと変わっていった。西の山際だけが、つい今しがたまでそこが茜色に輝いていた名残を惜しむかのように、細く、黄色く色づいている。群青を広げた夜空には既にいくつかの明るい星が瞬いているが、その殆どは街灯の明かりでか

き消されてしまっていた。

車の窓から見える小さな夜空では天体の復習にはならないかと、璃子は知っている星座を探すことを諦めて窓から顔を離す。こんな時まで何となく勉強のことを考えてしまう自分に、やや呆れながら深く息を吐いて背もたれに身体を預けた。いや、考えてしまうのではなく敢えて別のことに意識を向けたいのだ。

数式や化学式、年号を思い浮かべてみるものの、数字の後ろにちらちらと見え隠れする人影。見えるたびにその表情は変わり、少しずつ近づいてはまた離れていくその面影。やがてその影は二つとなり、はつきりとした輪郭と声で璃子の心を圧迫していく。

「お母さん、もう帰ってるかな」

ぼつりと呟くように、璃子は口を開いた。

「多分な。璃子が飛び出してすぐに出てったらしいから」

璃子の思惑を知ってか知らずか、相田は軽く首をかしげながらハンドルを切った。あと二回左折すれば璃子の自宅である。車窓から見える慣れ親しんだ町並みが、穏やかな時間の終わりを告げているようだった。自宅への距離と反比例するかのように息苦しさが増していく。両手を膝の上で握り締めた璃子の身体は、徐々に強張り小さくなっていった。

「まあ、俺も一緒に行くし。話も一緒にするから、そんなに心配すんな」

乾いて張り付いた唇をなめし、璃子は小さく頷いた。

ぎゅっと固く握った掌はじんわりと嫌な湿り気を帯びている。速くなっていく鼓動を誤魔化すように、璃子は掌をスカートに擦り付けた。ざらつく布の感触は掌の汗をこそぎ落とすが、それで緊張が収まるわけも無い。

思い出すだけでも身が竦むような母の形相と恫喝。右京とのことをうやむやにはできないだろう。しかし、自分の中でさえまだ整理が付きかねている問題である。母を前に上手く言葉にする自信など皆無だった。既に右京への情は無いが、母が言うように訴えてしまふのは忍びないし、今更この事を公にするのは本意ではない。どう事態を纏めたら良いのか、璃子には見当もつかなかった。

ただ、このまま帰ったら確実にまた理不尽な暴力に晒される。途端に胸が押しつぶされるような息苦しさで頭痛に襲われ、璃子の喉は短く悲鳴を上げた。トラウマに近い恐怖感に支配された身体は思うように動かない。極端に狭くなった視界では、自分の握り拳がとてつもなく遠く、小さく見える。璃子の思考は停止寸前に陥った。

「璃子！」

突然の相田の呼びかけに璃子の身体がびくりと反応した。顔を上げた瞬間、ぽすんと肩に軽い衝撃が加えられ、薄く靄がかかっていた視界が晴れる。浅い呼吸が口から漏れ、背筋を伝う汗の感覚に身震いする。目を瞬かせ自分が未だ車内にいることを確認すると、璃子は呼吸を整えた。

肩に受けた衝撃の元は、いつものごとく相田の大きな掌だった。しかしいつものようなふざけた調子で頭を叩いているのではない。パニックに陥りかけた璃子をなだめるように、優しくゆっくりとしたリズムで肩を叩き続ける。こんな叩かれ方をしたのは初めてだった。

「大丈夫だから、落ち着け」

困惑したまま動きを止める璃子に、相田は穏やかに話を続けた。

「今回の件、璃子は悪くない。俺も一緒に話してやるから思ったこと
と言っていい」

「……うん」

「それから一回はきちんと謝れよ？理由はどうあれ、お前はお母さん
心配させたんだから」

「……うん」

「あとは俺や伊東先生が会社として話すからさ。心配しないで聞
いてろって」

「……うん」

ゆっくりとした語り口は璃子の胸に染み入るように届き、徐々に
落ち着きを取り戻させていった。お前は悪くない。詳しい事情は話
していないはずなのに相田は断言した。そんなことを大人から言わ
れたことも初めてで、それは自信を失いかけていた璃子の心に僅か
だが光を灯す。

やがて静かに車は速度を落とし、一軒の大きな家のガレージ前に
停車した。開け放たれたそこには真っ赤なスポーツカーが一台。急
いで停めたのだらう、三台は停められるスペースに斜めにまたがつ
ている。ベンツの方は何処にも見当たらないということは、父は帰
宅していないらしい。璃子は少なからずほっとしている自分に気が

ついた。

「お母さん、居るみたい」

おう、と相田はハンドルを操作して車を路肩に近づけた。シフトレバーの操作で相田の手が璃子の肩から離れると、途端に心細さが忍び寄る。速くなりかける鼓動を押さえるため、そっと手を伸ばし相田のジャケットの裾を摘んだ。

「伊東センセまだっばいな。どうする、行くか？」

腕時計をちらりと一瞥し、窓から相田は玄関を伺った。いつも深夜になるまで真っ暗なはずの自宅玄関には煌々と明かりが灯り、リビングにあたる部屋は薄いレースのカーテンしか閉められていない。遠目だが中で誰かが動いているのが見える。珍しく電気のついている我が家に迎えられ、璃子は懐かしさに似た戸惑いを覚えて即答することができなかった。

「どっしょ」

誰に言うでもなく璃子の口から漏れた言葉は、小さいが相田の耳にも届いたらしい。

「もう少し待つ？お前の準備ができたらでいいぞ」

心配そうに振り返る相田の声は璃子を氣遣つてのもののか、いつもより優しく聞こえる。一年以上、ほぼ毎日顔を突き合わせていたというのに、こんな相田を見たのは初めてだった。いつもふざけ合つて、勉強の話かお菓子の話、時たまテレビドラマや歌番組の話をするだけの塾の担任。何かにつけ大人の余裕を見せつけて自分を子供

扱いする、周りにいる大勢の大人と扱いは同じだ。

確かに学校の先生に比べたら親近感もあり馬鹿話もできたものだが、それでも璃子は自分なりに距離を置いてきたはずだった。進学問題はともかく、家庭環境や恋の話などの本音を見せたことなど無かった。見せる必要などない。弱味など、いつどこでクラスメイト達の耳に入るか分からないのだ。

今ですら本音を語り合っているわけではない。しかしどういうわけだか心強い。思い返せば二年生に進級してからこっち、両親よりも学校の担任よりも、ひよっとしたら学校の友人達よりも長い時間をこの講師と過ごしてきたのかもしれない。ほとんど毎日部活が終われば塾へ向かい、しゃべったり勉強したり相談したり。その積み重ねが今の心強さの基だろうか。

相田の長い睫毛の奥に、力強い光が見えた気がした。璃子はごくりと喉を鳴らし、摘んだジャケットの裾をつんつんと引っ張って璃子は相田を促す。

「行こうか。遅くなったらお母さん余計に怒るかもしれないし」

よし、と相田は口の端を持ち上げた。いつもどおりの悪戯っぽい笑顔を作ってドアを開ける。璃子はそれを追うように助手席から飛び出し、堅く冷たい金属製の門扉を開けた。

門扉から玄関ドアまで数メートル。常に人の気配のしない自宅に、今日は明かりが点いている。何事も無い日であれば、それはこの上ない期待で胸が一杯になる事態だろう。しかし今日は違う。あの明かりの中に居る母と、恐らく腹の虫が収まっていないであろう彼女と、これから対話をしなければならぬのだ。

今朝描いた眉やアイラインは既に剥げ落ち、メイクという心強い武装にも頼れない。品行方正で優秀な娘、という建前にも頼れないともすれば竦んで動かなくなってしまうような足。知らず知らずに俯いて背を丸めていた璃子は横に立つ相田に背中を叩かれ、はっとして視線を上げた。

気遣うような視線が璃子を包む。一人で対峙する訳ではない。お前は悪くない、という相田の言葉を思い出しながら、鼓動を落ち着かせるために自分の胸を拳で軽く叩いた。

「大丈夫、行こ」

唇を真一文字に結び、璃子がドアノブに手をかけた時だった。明かりの点いたリビングから、何かが割れるような大きな物音が響いた。続いて絹を裂くような悲鳴がし、聞き覚えのある怒声が室内から漏れ聞こえた。

突然のことに、璃子はドアノブから手を離して後退りする。反射的に相田を振り返ると、頼みの綱である相田の表情も硬いものに変わっていた。大きな音に対して身体が竦みかけている璃子に対して、相田はちよつと待ってると言い残すとリビングが面している庭へと走っていった。

その間も絶えず何かが割れる音が響き、どたどたという足音が中から聞こえてくる。合間に聞こえてくる声は二つ。何事か言い争いをしているような、罵声が璃子の耳に届いた。一つの金切り声は母のものだ。もう一つは。

あの女だ。声の持ち主の顔が脳裏に浮かぶと、璃子は弾かれた様にドアに駆け寄りドアノブに手をかけた。

しかし璃子がそれを掴んだと同時にドアは内側から大きな力で開け放たれ、転がるように一人の女性が飛び出してきた。勢いよく開いたドアに引きずられ、璃子の身体は玄関の前に仁王立ちになる。

「あ……！」

飛び出してきた相手は璃子の顔を見ると、絶句して一瞬立ち止まった。まさかここに居ると思っていなかったのだろう。ぎよつとしたような表情の彼女の少しふくよかな頬が赤く上気し、つぶらな目の周りに施された黒いアイラインが涙で滲んでいる。一つに束ねた長い黒髪が無様に乱れ、幾本かが束になって顔にかかっていた。

「璃子ちゃん……」

媚びた様な甘い声音が璃子を呼んだ。この世で一番自分の名前を呼ばれたくない声。彼女が口を開いた瞬間、璃子の背筋に悪寒が走った。全身が総毛立つ感覚に襲われ、璃子は思わず彼女の前から身を避けた。玄関の明かりを受けた彼女の身体にできる陰影が、年を重ねた女性特有の、決して滑らかとは言い難い身体つきを浮き彫りにする。

母とは全く違う、厚みのある肩、厚みのある背中、そして厚みのある腹部。薄手のセーターの上に着たエプロンが似合うといえは聞こえは良いかもしれないが、こんな醜い女の作った物など口に入れたくも無い。味噌と醤油の匂いをさせリビングを我が物顔で歩いているこの女。彼女の束ねた髪から、煮物の匂いがする気がした。

こんな女が、お父さんと。

眼前に生々しい情景が浮かび上がり、璃子は彼女を凝視すること

に耐えられなくなつて目を逸らした。彼女にも、父にも、何か言つてやりたいがこみ上げる吐き気がそれを拒む。

自分とは月に一度も会つかどうか分らないというのに、この女とは会つてゐる父。そしてその家族が住む家で仕事をし、恥ずかしげも無く逢瀬に応じるこの女。せめてこの女さえ消えてくれたら、どれ程家の中が快適に思えるようになることが。

激しい嫌悪感に璃子は身震いした。父にも、この女にも、そしてそれを知りながらどうにも動かなかつた自分にも。いくらイイコでいたところで父がこちらを見ないのであれば、力づくで壊してしまえば良かったのかも知れない。そうすれば、少なくとも父はこちらを見てくれたかも知れない。或いは。

ぼんやりと幼い頃の父との思い出が璃子の瞼に浮かぶ。しかし動かしした視線は明かりの灯る玄関の中に立つ、黒い服装の女性を捉えていた。だらしなく身体の脇にぶら下がっている手の先が、ぎらりと鋭い光を放っている。ぼんやりとした父の面影と、目の奥に突き刺さるようなその光が、璃子の視界で交差する。ひつ、と傍らに居る彼女の喉が鳴った。

「璃子！！」

突然目の前の景色が激しく揺れた。同時に身体全体に衝撃が加わり、璃子の身体はその場から突き飛ばされた。急なことに受身も取れず、璃子は玄関ポーチのコンクリートに両手両膝を打ち付ける。今自分と呼んだのは相田の声ではなかつたか。打ちつけた痛み顔に顔をしかめていると、彼女の耳を劈くような悲鳴が辺りに響き渡った。

ずしり、と背に暖かいものが押し掛かった。

彼女の悲鳴に掻き消されそうな微かなうめき声に、璃子はゆつくりと振り返る。

ダークグレーの背広。少しでも明るく染めた髪。長い睫毛。眉間の深い皺。額に浮かぶ脂汗。うずくまる背中。腕を押さえた指の間から見える鮮やかな、とても鮮やかな赤い色。そしてそれを見下ろして立ち尽くす母の、右手に光る果物ナイフ。

「……アンタ達が居なければ、私はあの人から開放されるのよ」

焦点の定まらない、虚ろな目をした母が呟く。信じがたい光景に璃子は呼吸をすることさえ忘れて、自分の母親の言葉を頭の中で反芻した。その言葉は脳内を駆け巡り、意味を解析しようにも一所に留まってくれない。璃子の脳が酸欠に喘いだ。そして徐々に璃子の意識は、その意思とは無関係に遠のいていく。

由宇の声、右京の顔、女子高生のネイル、伊東の手、相田の背中、母の剣幕、彼女の悲鳴。今日の出来事が走馬灯のように駆け抜け、視界一杯に星が散らばったように感じた瞬間、ぐにやりと璃子の視界が歪んだ。

閑静な住宅街に遠くで鳴り響くサイレンの音がこだまする頃、璃子は完全にその意識を手放していた。

吐露

「アナタまだ高校生でしょ？」

午前1時。繁華街の片隅で小さく蹲る少女は、虚ろな目をして顔を上げた。

既に路面店の多くがシャッターを下ろした年の瀬の繁華街は、時間を持て余す若者達が多く行き交うが皆どこか忙しない。寒さに身を縮めながら、夜の街を彩るネオンが煌くアーケードを足早に通り過ぎていく。空気の中の水分が、幾分雪の匂いをさせていることに気がついていいる人はどれ程居るだろう。吐き出す息は空中で白く拡散し、風に揺られながら夜空へと溶けていく。

そんな中ネオンや自動販売機の明かりから避けるように蹲る、露出の多い服装の少女は補導員の注意を引いた。黒いライダーズジャケットは羽織っているが防寒具としての機能は殆ど果たしていないだろう。スタンドカラーの襟元からはキャミソールと肌が覗き、ショートパンツはかなり短い。足元は黒っぽいニーハイソックスで膝まで隠れてはいるものの、露出した太腿は血色を失ったかのように青白い。ところどころに紅斑ができているのがまた一層彼女の肌が冷えていることを示していた。

しかし露出の多さと反するように、少女の顔はまだローティーンのおどけなさが残っていた。ずっと膝に顔を埋めていたせいか、付け過ぎたマスカラとアイシャドウが禿げて目の回りを黒く染めていた。整った顔立ちがメイクで台無しになっていることにも気が回らないのか、それとも頓着がないのだろうか。顔を上げた少女は補導員を一瞥すると再び膝に顔を埋めようとした。

「まって、アナタひよつとして中学生？　こんな格好してたら風邪ひくどころじゃ済まないわよ」

再び顔を伏せようとした少女に、補導員は慌てたように近づいて肩に手をかけた。少女の身体がびくりと震え、弾かれたように顔を上げる。柔らかくウエーブのかかったようなクセ毛が肩に当たって跳ねた。大きな目がこれ以上ない程見開かれ、その瞳は小刻みに震えている。拒絶なのか恐怖なのか、それとはまた違う感情の表れなのか、補導員には判別できなかった。ただ、このままにしておいてはいけない。補導員はバッグから携帯電話を取り出すと、どこかに連絡を取った。

十二月二十一日、午前一時二十分。

璃子は所轄の警察署に保護された。

初めての家出は合計六時間程度の短いものであった。家出とは言え行く宛ても無い璃子にとって、閉店まで暖かいゲームセンターなどで粘った後は繁華街の隅に座り込んでいるのが関の山だったのだが。それでもとにかく家を出ていたかった。とりあえず手元にあった現金数千円とケータイをポケットに捻じ込み、シーズン初めに買ったジャケットを羽織っただけで自宅を抜け出したのだ。

学校を終えて自宅へ帰り、家政婦の作った食事を摂り、自室に籠って勉強をする。一日中、一切の会話をしないまま、淡々と時間だけが過ぎていく。この数週間、毎日変わらず過ごしていた。相変わらず家に戻らない父。昼に夜に仕事三昧の母。何食わぬ顔で家に入りし家事全般を執り行う家政婦。何もかも、いつも通り。父の思う、いつも通りの日常が繰り返される。

あの夜彼らは、特に父は璃子にも変化をしないことを要求した。

毎日きちんと学校へ行き、きちんと優等生として振舞えという。ただ塾には退学届が提出され、夜の外出は禁止された。明るい時間に家に入りし、中学生らしい生活をしろということだ。馬鹿馬鹿しい、と反論する余裕も無かった。気がついたときには既に相田の姿もなく、考える時間すら与えられないまま大人三人に詰め寄せられたのだ。

少年課の小さな相談室に連れて来られた璃子は、パイプ椅子に腰を下ろしてから自分の膝に目を落としたまま顔を上げようとはしなかった。虚ろな瞳は膝小僧を通り越した床を映してはいるが、それが視覚として認識されていないのは表情を見れば明らかである。感情を宿さないその目は時折小さく揺れ、視線は宙を彷徨っている。

家に居ると思い出してしまふあの状況。玄関の扉を開けようとするとたびに蘇る母の言葉。それを抱えたまま、たった一人で過ごさなければいけない夜がどれ程苦しいものなのか。父は、母は、たった一人で自宅に居る自分が何を想っているか、全く分かうとはしていないのだろう。誰も自分を気にかけてはいないのだ。

「アナタ、名前と学校は？」

母より少し若い位の、女性の係員が璃子の顔を覗き込んで尋ねてきた。しかし顔のすぐ傍で聞こえる、気遣うようなその声にも璃子は反応しない。ここで素性を言ったとしても、父も母も来る訳がない。怒り狂って来てくれるなら応じもしよう。殴り飛ばしてくれたらどれほど気が晴れることか。しかし、もう璃子はそんな期待をすることにすら疲れ果てていた。怒ったとしても世間体のため。自分のためでないことを目の当たりにしなければいけないのは、今の璃子には耐えられなかった。

「おうちの方は？」

これにも応えない。係員も慣れているのだろう、ちょっと待ってねと声をかけると、他の係員と相談のために外へ出てしまった。持ち物は財布とケータイだけ。取り上げられたそれらにも、身元が分かるものは何一つ入っていないはずだ。ふっと短い溜息を吐いた璃子は、パイプ椅子の背もたれに身体を預けた。以前の璃子ならば空き時間があればケータイいじりをしていたものだが、今はただ持っているだけだった。ただ、持っていないと手持ち無沙汰な感じがする。ただ、それだけ。

あれ以来友人からのメールや着信はぱたりと無くなったし、稀に誰かからかかってきても璃子はそれを無視し続けた。相変わらず掲示板サイトには、璃子に対する罵詈雑言や誹謗中傷が書き散らかされている。結局、両親が不仲だとか、父が不倫しているとか、璃子が隠しておきたかった家庭の問題も暴露されてしまっていた。人の口に戸は立てられないとはよく言ったもので、いくら父が「いつも通り」を指示したところであの夜の話も面白半分にはずれている。もう璃子の力だけでは噂を食い止めることは不可能で、その無力感に掲示板を開くことも止めてしまっていた。

電話帳のデータも抹消し、お気に入りサイトも全て消去した。他人との繋がりを拒否するのは怖かったが、自分のテリトリーを土足で踏み荒らされるのはもっと怖い。前島や、高野の気持ちは今更ながら分かったような気がしたが、もう遅かった。

相田はどうしているだろう。あの時背中越しに見た相田の腕にあった、赤いものは血液ではなかったか。モザイク化した記憶の中で玄関に立ち尽くす母の手に握られていた果物ナイフの光と、相田の腕に見えた赤だけはやけに鮮明だった。相田は自分を庇って怪我を負ったのではないか。塾へ行かなくなっただけからそれが気がかりで、璃子は何度か電話をかけようとした。しかし後ろめたさと今更と思

う気持ちも手伝って、誰かが電話を取る前に通話終了ボタンを押してしまっていた。

「失礼。タチバナ、リコさんね？」

不意に名前を呼ばれ、璃子はぎょつとして顔を上げた。いつの間にか室内に入って来ていた先程の女性係員が、膝に手を付きながら璃子の顔を覗き込んでいる。詰問するように口調は強く、有無を言わせない雰囲気が漂っているが、否定をするべきか、それとも肯定するべきか璃子は迷った。素性が分かるものは持つていなかったと思ったのに、何故自分の名前が分かったのか。生気の無かった璃子の目には不信の色が浮かび、頬の筋肉が僅かだが緊張するように痙攣した。

「良かった、やっとこっち見たわね。リコさんで間違いないですね」

璃子の僅かな表情の変化に気がついたのか、係員はにやりと口の端を持ち上げて笑顔になると膝を叩いて立ち上がった。飾り気のないショートカットの前髪をかき上げると、色が白く形の良い額が覗く。屈んでずれたグレーのジャケットの裾を引っ張って直すと、ほとんど小さい握り拳でその細い腰を叩いた。しかし疲れた仕草の割に彼女の表情は明るい。応えない璃子の様子などは意に介していないように、目の前のテーブルへ取り上げたはずのケータイと財布を並べた。

「携帯電話から名前を見せてもらいました。おうちに連絡をしたいんだけど、連絡先を覚えてくれる？」

係員の言葉に、璃子は内心舌打ちをした。履歴や電話帳の削除はしたはずだったが、自分の個人情報削除するのを忘れていたらし

い。さすがに名前とケータイの番号だけしか登録していないが、それでも名前がバレてしまえば身元が分かるのも時間の問題だろう。それでも璃子は、最後の抵抗とばかりにふるふると首を横に振った。どうせ父は家にいない。母もまだ店か客の接待か、いずれにせよ自宅には戻らない。仕事場に連絡を取ったとしても、そこに居るかどうかすら怪しいのだ。二人にとって自分は何なのだろう、と璃子はまた虚ろな目に戻り視線を落としてしまった。

「おうちの方が、学校の先生に迎えに来てもらわないと帰せないのよ」

そんな反応には慣れてはいるのだろうが、女性係員は困ったように眉を寄せて小首を傾げた。反応を見せ始めた璃子から更に情報を引き出そうとしているのだろう。それでも璃子は首を横に振った。ふう、と係員の口から溜息が漏れる。重い沈黙が流れた。

部屋の外では深夜だというのに様々な物音がする。少年の声、少女の声、甲高い声、叫び声、怒鳴り声、囁り泣く声。自分と同じように、行き場の無い想いを抱えた人間達がここに集まって声を上げる。自分の声を聞いてもらいたいのに、でも聞いて欲しい人には聞いてもらえない。聞こえていてもすれ違う。聞いて欲しい相手に届かない声は、一体何処へ行くのだろう。

しかし部屋の外から聞こえる声は、一つの大きな雑音となって璃子の耳から侵入し鼓膜や脳を激しく揺らした。他者に向ける感情そのままのそれは、学校や街中で聞く雑音より耳障りで璃子の心を激しく波立たせる。胸の奥がちりちりと苛立ち、璃子は一刻も早くここから出て行きたい衝動に駆られた。

「……うち、どうせ誰も居ないから」

璃子は唐突に口を開いた。

「こんな時間なの？」

驚いた様子の係員の言葉に、璃子はこくりと頷いた。顔は伏せたまま、できるだけしおらしく。

「どうして？」

「……仕事」

「〴〵両親が両方お仕事なの？」

再び璃子は大きく頷いた。二人とも不在である、となれば次は学校の先生はと聞かれるに違いない。最悪の場合担任に連絡を取られても仕方がないが、両親に知られる可能性が強くなる。また父に世間体を盾にした説教をされるのもうんざりだし、ますます自分が惨めになるだろう。そうなる前に、と璃子は一つの賭けに出た。

「だから、電話して欲しいところがあるんですけど……」

分かったわ、と係員は璃子の言う電話番号をメモして、颯爽と部屋を後にした。残された璃子は深く息を吐き天井を仰ぐ。

この部屋の蛍光灯は一体いつ取り替えたのだろうか。璃子は頻繁に細かな点滅を続ける蛍光灯の明かりに、疲れた目を瞬かせた。オフホワイトの壁紙に灰色の床タイル。目の前に置かれた視聴覚室を思わせる長机はところどころ化粧板が剥げかけ、ずっと座り続けているパイプ椅子は体重移動の度に金属がきしむ嫌な音を立てる。外の喧騒は未だ止まず、殺風景な室内に一人取り残された璃子は、この上ない程の居心地の悪さを感じていた。

勝ち目は五分五分。係員は璃子の言うところへ電話をかけに行っただろうが、相手がどう出るかは分からない。もう関係ないと突っぱねられたらどうしよう、それとも学校名をバラされて担任に電話を回されることも考えられる。願わくば、あの人に電話を取ってもらいたいし、本人にここへ迎えに来てもらいたい。果たして望む通りに事が運ぶかどうか。璃子は落ち着かない気持ちを押し殺して椅子に座りなおした。暖房は効いているものの、露出が多い身体は一向に温まらない。璃子は冷たくなった手を胸の前で擦り合わせた。どれ程の時間が経った頃だろう。耳障りな雑音の間を縫うように閉められた扉の外に近づいてくる足音があつた。堅いヒールが床を打つ音以外にもう一つ違う足音が混じっている。気が付いた璃子が顔を上げると同時にノックされ、係員が扉から顔を覗かせた。

「リコさん、ちょっと一緒にお話させてね」

どうぞ、と係員が扉を開け放ち、背後の人物を誘導するように左手を室内へ差し出す。小柄な女性係員の背後から軽く会釈をしながら室内に入ってきたその人の姿を見て、璃子の表情はぱっと明るくなった。

勝った！

しかし華やいだ璃子の表情に反して、険しい表情のその男は璃子と目が合うなりその右腕を振り上げたのだった。

午前四時。

「……痛い」

「知るかボケ」

「……暴力反対」

「こういうのは舐って言うんだ、馬鹿」

「……頑固オヤジ」

「うっせえぞ、このクソガキ」

璃子はひりひりと痛む頭頂部をさすりながら、そつぽを向いて唇を尖らせた。まさか出会い頭に拳骨を喰らう羽目になるとは、さすがに璃子も予想していなかった。相談室で数十分間に渡り二人に説教をされた今でさえ、鈍くその痛みが残っている。ようやく少年課から解放され、署の正面玄関前の駐車場に停められた車の中に乗り込むと、璃子は仏頂面を隠さずに不満を口にした。すると運転席に乗り込んだ男はまた拳骨を振り下ろしたのだ。

お互いに不機嫌な顔をして顔を背け合うと、それきり二人の間には沈黙が流れた。しかし狭い車内のこと。お互い頭に血が上っているせいか、背後の荒い鼻息まで聞こえてくるようだった。璃子もちろんだったが、相手も余程苛立っていたのだろう。微かだが頻繁に着信音を鳴らすケータの電源を、乱暴な手つきで切って後部座席に放り投げてしまった。

初めこそ拳骨の痛みに腹を立てていた璃子であったが、痛みが薄れていくにつれて落ち着きを取り戻していった。そもそもこんな時間に呼び出して迷惑をかけているのは自分である。相手が腹を立て

るのも当たり前だ。迎えに来てもらっただけでもありがたいはずなのに、と少し申し訳ない気分になる。ちらりと運転席に視線を走らせると、街灯の仄暗い明かりに照らされた少し明るめの髪が見えた。ハンドルに上半身を預けて頬杖を付いているその右手首の内側には、生々しい縫い傷が覗いている。

その瞬間、璃子の脳裏に数週間前の記憶がフラッシュバックした。自分の背後で脂汗を浮かべてうずくまっていたのは、やはりこの人だった。腕を押さえた指の間から見えた赤いものは、やはり血液だったのだ。

璃子は震える手で運転席に座る男の黒いスーツの裾を摘んだ。男はそれに気が付いたのだろう。黙って左手を伸ばし、璃子の頭をぽんぽんと叩く。

「……相田っち、ごめんね」

搾り出すように呟いた璃子の両目にはじわりと涙が浮かんだ。痛々しい傷は残っているものの、相田は無事だった。迷惑をかけたはずなのに、相田の手は暖かった。もう塾生ではないけれど、相田は迎えに来てくれた。右手ではスーツの裾を摘んだまま、左手は剥き出しの太腿の上で握り拳を作り璃子は小さくうなだれる。胸の奥に感じる微かな痛みは、我慢するなとばかりに璃子の涙を後押しした。それでも僅かに残ったプライドが邪魔をして、泣くに泣けない。璃子は溢れる涙をこぼすまいと、相田から顔を背けるように顎を上げた。

「うちのことで迷惑かけてっ、ごめんねっ」

努めて明るく言い放つつもりの台詞も涙声になった。自分の出したそんな声に、ますます涙腺が緩む。きつく結んだ唇が震えた。ゆったりしたリズムで動いていた相田の大きな掌が止まり、代わりに

髪をくしゃくしゃと撫で回される。相田の手の動きに合わせて、前髪もサイドの髪もくしゃくしゃに乱れ顔に降りかかった。

「別に、迷惑だって怒ってんじゃない」

相変わらずハンドルに頬杖を付きながら、相田がぼそりと独り言のように呟いた。初めて聞く、とても低い声。もしかしたら本当に独り言なのかも知れない。璃子は鼻をすすりながら、相田へと視線を動かした。既に視界は涙で滲みゆらゆらと揺れている。その景色の中の相田は、窓の外へ顔を向けたままこちらを見ようともしていない。

今視線を合わせたら、きっと我慢できなくなってしまうだろう。

髪の毛一本分残っている、僅かなプライドというタガが外れ声を上げて泣いてしまうかもしれない。それは分かっていたが、目を合わせないのはとてもなく不安だった。拒否されているのか、受け入れられているのか、その判別すらできない。璃子は摘んだスーツの裾をそつと引っ張る。するとそれに応じるように、相田はようやく璃子に顔を向けた。

うつすらと髭が伸びたその顔は少年課で顔を合わせたときより陰しく、眉間には深い皺が寄っている。視線は窓の外へ投げ出されたままだ。苛立ちを隠さない表情に、璃子はたまらず顔を伏せて口を開いた。

「あ、あの……、ごめんなさい」

別に、とぶつきらばうに相田は呟く。塾内で悪戯をした生徒を叱るときも、こんな声や態度になったところを見たことが無い。それはそうだろう、と璃子は思う。担任生徒に塾で問題を起こされ、家庭の問題に巻き込まれ、怪我までさせられ、おまけに深夜に補導さ

れた元・生徒を引き取る手間をかけさせられた。これで怒らない訳は無い。ますます璃子は萎縮して、スーツを摘んだ右手を離して縮こまる。申し訳ない気持ちで一杯になった。

「どうしたんだよ」

「……怒ってんでしょ？ごめん」

震える唇で、ようやく紡いだ言葉はたどたどしい。しかし他に言葉が浮かばなかった。そのまま口の中で何回もごめんねと繰り返すが、そのどれもが音とならず相田の耳には届いていない。数度目の「ごめんね」だけが微かに声となり口の外に漏れると、相田は首を横に振って璃子に向き直った。

「迷惑だなんて言ってねえ」

「……でも怒ってるでしょ、ごめんね」

「怒ってんのは！」

相田が語気を強めた。声の大きさに、璃子の身体がびくりと硬直する。怒鳴られる、そう覚悟した。ひょっとしたらまた拳骨を喰らうかも知れない。来るべき衝撃に備えて璃子はぎゅっと目を瞑る。瞳に溜められた涙は溢れ、頬を伝って落ちた。

「お前が馬鹿なことしてっからだろうが！」

どすんという鈍い音と共に車体が揺れた。身体全体を揺らした予想外の衝撃に、璃子は慌てて両目を開ける。睫毛に残った涙が勢い良く跳ね膝の上に散らばったが、未だ涙で滲んだままの視界にはハ

ンドルに拳を叩き付けている相田がいた。

「余計な心配させんじゃねえ」

この馬鹿が、と低く吐き捨てるような相田の呟きが、璃子の心に鋭く刺さる。胃の奥から、胸の奥から、溢れ出しそうな何か大きな塊が顔を覗かせたようだった。璃子は必死にそれを飲み込もうと、両手を口に当てた。伸ばした細い爪が頬に食い込むが、その痛みよりはるかに胸が苦しい

「大体な、そんな薄着でこの寒い中出歩くなんて何考えてんだ。それでも受験生か？ 夜遊びも大概にしろよ。そんなことやってる時期じゃねえだろ？ そもそも、一回も連絡よこさなくせにこんな時ばかり、ムシが良すぎるだろ？ 親父さんにケータイ取り上げられてんのかと思えばしつかり持ってやがるし。変な奴に引かかる前に補導されてたから良かったものの、そんなだったらその前に電話しろってんだこの馬鹿。」

相田はそんな璃子の様子に気が付かないのか、まるでマシンガンのように捲くし立てる。乱暴に放り投げられる言葉の一つ一つが、璃子の耳と心を刺激した。相田の言葉に刺激され、身体の奥からこみ上げる何かを吐き出したい衝動に襲われる。しかし何か言わなくてはと思うものの、それは言葉となってくれない。塊のまま熱を持つていくそれは、喉の奥を焦がすような痛みを伴って大きくなっていった。

「とにかくな、お前に付き合わされる方の身になってみる！」

一際大きな声で放られた言葉に、璃子の中の何かがぷつんと音を立てて切れた。

「じゃあほつといてよ！」

甲高い、悲鳴のような声が車内に響いた。日頃癪癢を起こすことも無い、大声を出すことも無かった璃子の叫びに、相田がはつとした表情で動きを止める。しかし張り詰めていた糸が切れてしまったかのように、抑えの効かなくなった璃子は胸の奥に渦巻く塊を吐き出そうともがいた。

「相田つちには関係ないじゃん！ 塾も辞めたうちのことなんて、ほつとけばいいでしょ。迷惑なんですよ。来ないでほつとけば良かったじゃない！ 余計なことさせて悪かったってばっ」

口を突いて出てくる言葉は最早抑制が効かない。あふれ出す言葉そのものが濁流のように理性を飲み込み、胸の奥につかえた異物を押し出そうと更に勢いを増した。

「大体っ、相田つちだつてうちみたいな問題児の面倒なんて見たくないくせに！ うちのせいで怪我までしてっ、塾辞めたのだって本当はせいせいしてるんですよ！ 伊東ちゃんだって、皆きつとうちのこと迷惑だつて思ってるんだ」

「だから迷惑だからとは言ってねえだろ！ お前のやってることが危なっかしいから……」

「面倒見てくれなんて言ってないし！ どうせうちの気持ちなんて分かんないし、どうでもいいくせに。元塾生だつてバレと困るから来たんでしょ？ 世間体とかでお節介やかないで！」

「どうでも良いなんて思ってたら来るか馬鹿！」

「世間体なんですよ？ 親にだって近所の目しか気にしてない。ご近所に恥ずかしいからきちんとしてなさいって、そればかり！ 自分達の方がよっぽど汚くて恥ずかしいことしてるじゃない。うちがいくら家に居たって、テストで一位獲ったって、部活で県大会行ったって、何にも言わないくせに。大人は子どもが悪いことしたときばかり、心配だとかウソついて頭ごなしに怒るのよ！」

ぎゅっと目を瞑ると、瞼に浮かぶのは難しい表情をした父と眉を吊り上げる母の横顔。幼い時からずっと見続けてきた彼らの横顔は、想像の中でさえ璃子を振り返って微笑もうとしない。どんなに手を伸ばして焦がれても、別の方向に目を向けている彼らの興味を引くことはできなかった。

これは八つ当たりだ。心のどこかでそれを理解していながら、こみ上げる塊を相田にぶつけることを止められなかった。今ここにいて自分を見てくれている彼でさえ、塾という繋がりがなくなった以上は自分を見続けてくれる保障はない。それどころか彼は大勢の生徒を抱える講師だから、きつとすぐ両親同様に璃子以外に意識を向けるようになるに違いない。それは堪えようもない恐怖となって璃子の目の前を真っ暗に覆った。

「俺はそんなこと言って怒ったこと無いだろ！ お前が馬鹿やってるから心配だって言ってるんだよ」

「馬鹿馬鹿言わないでよ！ そんなこと自分が一番良く分かっているし。心配して欲しいなんて思っていないもん！」

首を横に振り、璃子は両耳を押さえた。綺麗事も説教も何もかも聞きたくない。相田の吐く言葉の全ても偽善に聞こえる。どうせ離れていくくせに、分かった風の口をきかれることも許せなかった。

両目も堅く閉じ、耳を塞ぎ、顔を膝に埋める。しかし行き場の無い感情の昂ぶりは拒絶だけでは収まらない。エネルギーの放出場所を求め、璃子は泣きじゃくりながら子どものように激しく地団駄を踏んだ。

「なんで来んの？　うちのことなんて何も分かってないくせに。怒るならほつといてくれれば良いじゃない……」

「こつちだつて心配したくてしてるんじゃないねえ」

「ほら、結局世間体とか義務とかなんじゃん！　説教なんてされたくない。親も、相田うちも大っ嫌い！」

「いい加減にしろ！」

「もういいっ！　帰る！」

激昂した璃子は、その勢いのまま助手席のドアに手をかけた。しかし次の瞬間、ぐいつと後方へ引き寄せられる感覚と共に、璃子の頭部は暖かい何かに包まれた。突然目の前が暗くなり、璃子は驚いて身を硬くする。逃れようとともがくと緩い力で拘束され、鼻腔をほろ苦いタバコの匂いがくすぐった。頬にはざらつく堅い布が当たり、その布越しにかなりのスピードで動いている心臓の鼓動が聞こえる。予想外のことに璃子がそつと目を開けると、視界一杯に相田のジャケットとワイシャツが広がっていた。

「心配だったから心配だつて言つてんだ！　そんなん理屈じゃねえ！」

馬鹿が、と頭上で相田の声がした。馬鹿、と呼ばれるのは今日何

度目だろう。しかし最後のそれは罵声ではない。溜息と共に呟かれた言葉は塾で聞いてきたものと変わらないトーンで、聞きなれたその一言は璃子の我慢をあっけなく吹き飛ばす。相田の胸にしがみ付き、子どものように声を上げて璃子は泣いた。エンジンがかかり冷えた車内に温風が吹き出し始める頃になっても、二人を乗せた車は駐車場から動かなかった。

しゃくりを上げて泣き続けた璃子が落ち着きを取り戻すまで、相田はずっと璃子の頭を抱え込んで背中をそっと叩き続けてくれた。時折頭上から声が降ってきたが、何を言われていたのかは全く分からない。しかしその低い声は相田の胸に押し付けた顔を通して、璃子の頭蓋に直接響いた。その振動は心地よい揺らぎとなり、張り詰めていた緊張の糸をゆつくりと解いていく。それが逆に璃子の涙を止まらなくさせた。

ようやく璃子がしゃくりを上げたままではあったが顔を上げたときには、スピードメーター下のデジタル時計が明け方の五時を示していた。辺りはまだ暗く人通りも無いが、もうしばらくもすれば新聞配達員や牛乳配達員の作業が始まるだろう。璃子は両手の甲でこしこしと目の周りや鼻を拭くと、ぎこちない動作で相田から身体を離れた。かなり涙も出ていたらしく、暗がりでも相田のジャケットに大きな染みができているのが分かった。なんだか申し訳ない気持ちで、ライダーズジャケットの袖を伸ばして染みを擦ってみた。

「ごっ、めん、っね……」

「気にすんな。どうせクリーニング出し頃だったしな」

肩を竦めながらその大きな染みを茶化し、相田も璃子の肩から手を離す。

「クリッ、ニングッ、代、出すし……」

「馬鹿、別にいいってこんなの」

未だ治まらないしゃくりに言葉を詰まらせながら、璃子は財布を出そうとジャケットのポケットをまさぐった。しかし家を出る時にそこへ捻じ込んだはずの財布とケータイが無い。ポケットの妙な軽さにはっとして璃子はもう片方のポケットとショートパンツのヒップポケットに手をつ突っ込むが、いずれにも財布はおるかケータイも入っていない。号泣したことでもつれすぎた記憶を辿るうにも、慌てた璃子は順序立ててその記憶を遡れない。動転しすぎて言葉も出せずに、璃子はただ金魚のように口をパクパクさせたまま相田の顔を見上げた。

「慌てすぎ……」

今にも噴出しそうな表情で相田が差し出したものを見て、璃子の口はぱたりと動きを止めた。それらはもちろん璃子の財布とケータイで、その瞬間に璃子は相談室の机の上に並べられた場面を思い出す。カラフルなモノグラムが印刷された小ぶりな財布と中学生にしては飾り気の無いケータイを受け取ると、ほっと璃子は胸を撫で下ろした。

▼夏に手に入れたばかりのその端末。暇さえあればサイト巡りや中傷コメントの書き込み等で弄り回されていたおかげで、ボタンの印字が僅かに擦れていた。ここしばらくはサイト巡りもメールもしていないが、手元に無いと不安になるそれは、璃子の精神安定剤なのかもしれない。しかし充電を忘れていたのか既に電池は切れ、開いた真っ暗な液晶に自分の憔悴した自分の顔が映り込む。暗がりではつきりとは見えないが、随分酷い顔をしているに違いない。ぱちん

とケータイを閉じると、璃子はジャケットのポケットへそれを捻じ込んだ。

「そうそう。こないだのテストも一位だったんだってな」

馬鹿なんだか利口なんだか、と相田はハンドルに手をかけた。唐突に振られた話題に璃子はきょとんと相田を見上げる。言われている意味が分からなかった。テストはあの出来事の数日後。いつもと変わらないことを要求された璃子は、麻痺しそうな頭を抱えて学期末テストを乗り切るしかなかった。しかしそれは自分の意地と、碎かれそうになったプライドを守るためでもあった。

それが馬鹿か利口かとはどういうことだろうか。返す言葉が見つからず、璃子は唇を少し尖らせて頬を掻いた。それには構わず、相田はシフトレバーをドライブに入れて車をゆっくりと発進させる。

随分長いこと警察署の駐車場に停まっていたせいで、窓の外の景色が動き始めると璃子は一瞬眩暈のような感覚に襲われて目を閉じた。途端に唼に錘が付いたように目が開かなくなる。しかし相田の言葉の意味が気になって、璃子は睡魔と共に飛び立ってしまいそうな自分の意識をぎゅっと手繰り寄せた。

「一位獲らなかったら、うちじゃないじゃん」

目を閉じたまま、テスト返却日の様子を思い浮かべる。一科目ごとに一喜一憂するクラスメイトを横目に、璃子は答案を受け取ると点数を確認することもなく席に戻った。確認するまでもない。テストが終わってからというもの、放課後は自宅へ直帰するだけの生活だった璃子は、持ち帰った問題で既に何回も自己採点をしていたのだから。

クラス中、いや学年中の知り合いに距離を置かれ、裏で陰口を叩

かれる。家族からも距離を置かれ、皆自分以外のことに夢中になっている。居場所が無くなった璃子にとって、自分のプライドを守ることだけが僅かな救いだったのだ。それが更なる中傷に繋がろうとも、雑魚による負け犬の遠吠えだと思える。馬鹿な奴らが群れているだけだと、自分を納得させることができる。そのためには璃子は成績を落とすことができなかった。

「紗織がな」

おかげで内申はばつちり。目を開けてそう続けようと口を開きかけたとき、相田がおもむろに声を出した。

「ちょっと心配してたぞ。雰囲気が変わったって」

「え……」

「お前が塾来なくなっただけから、結構お前の様子教えてくれてな。話しかけにくいって悩んだ」

広い駐車場でハンドルを回しながら方向転換をし、車を車道に出すと相田は自分の顎に生えた無精髭を指でなぞった。話題に登った紗織のことでも考えているのだろうか。遠い目をしている相田の様子に、璃子は胸の奥にちりちりと焦がされるような痛みを覚えて目を伏せた。

「あんまり友達心配させるなよな」

友達、と璃子は口の中で小さくその言葉を反芻する。その言葉の違和感に、璃子は鼻を鳴らして笑った。馬鹿馬鹿しい。毎回学年五位以内に入る紗織にとって、恐らく璃子は邪魔な存在だろう。璃子

がトップから転げ落ちればひょっとしたら自分が、などと考えているに違いない。その紗織が自分を心配だという。大方、璃子を貶めるための新たな材料でも探していたのだろう。想像するとあまりに可笑しすぎて、璃子はくすくすと声を立てて笑いだしてしまった。

「どした？」

「だって、紗織とうち、別に友達でもなくない？」

は、と訝しげな表情で相田はハンドルを握ったまま璃子を振り返った。

「友達でもなくないって、意味分らないんだけど」

「うち、紗織のケー番もメルアドも知らないし、プロフとかホームペも教えてもらったこと無いし。聞かれたことも無いしね。大体、塾以外でそんなにしゃべったこともないもん」

さも当然、とばかりに璃子は唇を尖らす。それにケータイのメモリも消去した。友達なんて元々居ない。そもそも友達とは何なのだろう。他愛ない会話、恋の相談、勉強の悩み。お互いに表面上は親身に受け答えしているが、その実は決して深入りしない空虚な会話。顔の半分は会話の相手へ、そして片手に持ったケータイにもう半分の顔を見せる。穏やかな笑顔の裏で相手の弱味を狙い、情報を手に入れようと躍起になっている。狙われ、暴かれた後に残るのは孤独と屈辱。その立場にならないように、皆必死に自分を取り繕っているのだ。

暴かれた立場の璃子にとって、周りは全て敵同然だ。学校に居る間中、周りの景色は全て灰色。クラスメイトの声など聞こえない。教師が発する授業の声さえただの雑音。見たくも聞きたくもない。

自分を貶めようとするだけの存在である、そんな「トモダチ」なんて要らない。璃子がそう続けようとした時だった。

「お前、本当、馬鹿なんだなあ……」

盛大な溜息と共に相田がハンドルへ突っ伏した。幸いなことに目の前の信号は赤だったが、停車中の出来事とはいえ突然の行動に璃子は目を丸くする。おろおろしていると、腕とハンドルの隙間から相田の深い溜息が再び聞こえた。

「アドレス知ってる知らないが友達の基準かよ……」

「え？」

「幼稚園児やジジババがケータイで友達管理してるかつーの」

心底呆れた表情で顔を上げると、相田は信号を確認して璃子に向き直る。いつもはきっちり上がっている眉も下がり、どこことなく八の字の海苔のように顔に貼り付いていた。あまりに情けない顔だったが、璃子は相田の言葉の意図するところを掴みかねて、ついその顔を凝視してしまった。

「じゃあ、璃子にとって紗織って何？」

「何……って？」

「友達じゃなければ、知り合いか、顔見知りか、見ず知らずか？」

「ん……と、何だろう、知り合い？ てか、分かんない」

畳み掛けるような相田の問いに、璃子は小首を傾げる。そう言われてみれば、アドレスを教えあった訳でもないが塾でも一緒に話をしたり、お菓子を分け合ったりするような仲の関係をどう表したら良いのだろう。しかしそれを友達と呼んでしまうのは、何故か違和感が拭えない。紗織とて同じように考えるのではないだろうか。彼女が璃子を友達だと思っているのなら、もっと早く璃子のアドレスを尋ねてきてもおかしくないはずだと思える。首を傾げて応える璃子の様子に、相田は天を仰いで再び溜息を吐いた。

「紗織もうちのこと、友達とは思ってないんじゃないかな。じゃなきゃ、アドレス教えてくれるはずだし」

電池の切れたポケットのケータイを、ポケットの中に入れたまま片手でそつと弄ぶ。ダイニングのメモ経由で父から買ってもらったこのケータイは、オフィシャルなものとしてクラスメイト達とのやり取りにも使っていた。あれからすぐにメモリは消去してしまったが、二つあるケータイの内こちらは常に持ち歩いていた。誰からメールが届く訳でもない。着信がある訳でもない。ただ、持ち歩かすには居られない。その理由について、璃子は気が付かないフリを続けた。

信号が青に変わり、天を仰いでいた相田はその顔を戻してアクセスを踏んだ。すると動き出した車はいつのまにか繁華街を通り抜け、塾の近くに差し掛かる。窓越しに見えたビルはさすがにどの窓にも明かりは点いておらず、不夜城と思われた塾のビルも静かに眠りにについているようだった。

すっかり人通りが無くなった街は、息を潜めるように明け方を待っている。そこには璃子のように行き場を無くした若者が屯し空虚に闊歩する、嘘だらけの夜の街としての顔は既に無い。朝になり太陽が昇ると、街はまた夜とは違う別の顔で動き始めるのだ。冬至に

近いこの時期、完全な日の出にはまだ一時間はかかるだろう。しかし対向車線を走る新聞配達のスクーターが、朝が近いことを知らせていた。

「あのさあ……」

塾にはいつも明かりが点いていると思い込んでいた璃子が、車の窓から不思議な気持ちで暗いビルを眺めているとおもむるに相田が口を開いた。

「んー？」

窓の外を流れる風景に視線を送ったまま、璃子は話半分に相槌を打つ。結局今日はもう寝る時間は無いだろう。と、今から始まる一日の時間割を思い浮かべた。確か今日は体育が合ったはずだ。ニクス合同だから、大勢の中に紛れてしまえば少しはサボれるし気が楽かも知れない。頭をもたげる憂鬱な気分を振り払うべく、璃子は左右に首を振って相田を振り返った。

「なあに？」

「さっきの話の続き。アドレスとか、教えてくれたら友達ってやつさ」

塾を通り過ぎればしばらく信号はない。前を向いたまま相田の口は割とゆっくり言葉を発する。言葉が出るたびに上下する喉仏が、一度呼吸を溜めるように動きを止めると、お前、と相田は続けた。

「どれだけ受身なの？」

短い、鋭い言葉が璃子の胸にどすと響いた。

「な……何が？」

鳩尾に何かがぎゅるりと捻じ込まれるような感覚が璃子を襲う。
瞬間的に指先が凍りつくように冷え、璃子はぎこちなくその冷えた
両手を擦り合わせた。

「友達つてさ、向こうがなりたいて言っただからってなるもんでもないだろう？ お前は、どうしたかったんだよ」

「どうしたって、別になってもならなくても。紗織がなりたいて言ってくれてたら、友達になっても良かったし……」

「違うだろ？」

ぴしゃりと相田は璃子の言葉を遮った。

「お前なんでも人任せにしすぎだよ」

静かに言い切る相田の声はとてもゆつくりと、しかしはつきりと強く璃子の耳に突き刺さる。それは鼓膜を直接引搔かれるような強い刺激となり、反射的に璃子は生唾を飲み込んだ。嚙下の音は車内に思いの外大きく響く。どくと心臓が跳ねた。何故こんなに相田の言葉が痛いのか。しかし理由も分からないまま、璃子は動揺を悟られまいと顎を上げて窓の外へ視線を泳がせた。

「璃子はさ、本気でなんか欲しかったことあるか？」

璃子の動揺に気が付いているのかいないのか、相田は前を向いた

まま言葉を続けた。助手席の窓ガラスに映る相田の顔は、怒っているわけでも悲しんでいるわけでも、笑っているわけでもない。その目は遠くを見つめたままだ。

本気で欲しがったもの。

友達？

学年一位？

内申点？

恋人？

それとも、家族？

相田の言わんとしていることを、そ知らぬ顔をしながらも璃子は必死で探る。自分が欲しがったもの、それはすぐに思い当たる。しかし頭の中をひっくり返して出てきたそれらは、今まで璃子が努力して手に入れてきたものではなかったというのか。

今まで自分がどんな努力をしてきたか知らないはずはないのに、と璃子は相田に毒づきたくなった。クラスの中で弾かれないように、好きでもないドラマや歌番組もチェックした。放課後の付き合いだつてしたし、ホームページやプロフだつて書き込みこそ少なかったが巡回して会話に参加した。テスト勉強は誰よりも努力した。今では思い出したくもないが、右京のことだつてあの時は本気で手に入れたかったのだ。

そして家族。物心ついてから十年以上、振り向いて欲しくて注目して欲しくて、彼らが望む娘になろうとした。彼らが自慢できる娘で居られるように、少しでも彼らが気にしてくれるように、ひたすら優等生を目指してきたのだ。それは今でも変わらない。今までは全て失敗してきた。しかしいつか振り向いてくれるのではないかという、淡い期待を抱いたまま必死にもがいているつもりなのに。

相田はそんな努力を無視して、それらを璃子が本気で欲しがっているように見えないというのだろうか。喉の奥からまた何か大きな塊がこみ上げてくるようで、璃子は再び生唾を飲み込む。剥き出しの腿の上では、冷たくなった両手がきつく握り締められていた。そして、口の中で小さく相田の問いを反芻する。

本気で欲しがったもの。

テストの点数は努力に対して正当な見返りがある。だから努力もできるしもう手に入っている。しかし追っても追っても手に入らないものなんて、もう要らない。努力が裏切られる位なら、惨めな気分を味わわせられるなら、初めから欲しがっていないことにすれば良い。

固く結ばれた唇が僅かに震えた。

「うち、欲しいものなんてないもん」

しかし璃子の口から吐息と共に吐き出された声は、弱々しすぎてエンジン音に掻き消される。隣を伺うと、運転中の相田の耳には届かなかったようだった。相変わらず前を向いてハンドルを握る相田の目は、怒りも笑いもしない。長い睫毛が車の振動に合わせて揺れているだけだった。この前の車とは違う少し排気量の大きいツーリングワゴンは、住宅街に差し掛かると緩やかにスピードを落として路地を曲がった。

もうすぐ自宅に着いてしまう。言っておかなければ。自分が弱く見えたままなのは、プライドが許さない。璃子は顔を運転席側に向け、喉に貼り付いた声を今度は少し強めに吐き出した。

「親も友達も、もういいよ」

そこだよ、と間髪入れずに相田が指摘する。吐き出したは良いがまた聞こえていないかも、とぼんやり思っていた璃子は、その素早い反応にぎくりと身を強張らせた。夜明け前で人通りもない住宅街を、相田は注意深く見渡しながら続けた。

「もういいよじゃなくてさ、自分からもっと動かなきゃ駄目なんじゃないの?」

「動いてたもん。でももう要らないから」

「そんな簡単に放棄すんの?」

「だって、うちが欲しいと思っても皆が同じこと思ってるとは限らないし」

だから、もう欲しがることを止めてしまえば良い。反論しながら、璃子は自嘲気味に鼻を鳴らした。家族も、友達も、自分を煩わすものはもう要らない。しかし相田は璃子より大きく鼻を鳴らして笑いを漏らすと、表情を抑えた顔つきをくしゃりと一変させた。馴染みのあるその表情は、彼が何か面白いことを閃いたときのそれだ。

「そうなんだよな。それが分からないから人間関係って難しいよな」

左手で疎らに伸びた顎の髭を撫で、相田は一人納得したように頷く。その何もかも得心している様子が、何故か癪に障った。学校などという、大勢の人間と関わらなければならない中学生のストレスを、この大人は考えたことがあるのだろうか。それこそ相田も十一年程前は中学生なのだから、既に経験してきたことなのだろうが、今の璃子にはそこまで慮る余裕は無い。ただ余裕ぶつた、大人が子ども

もを上から見下している様な態度が腹立たしい。

「今時の中学生は大変なの。相田っちになんて、うちの苦労分かるはずないし」

自分本位な子どもつばい怒り方だった。それは分かっていたが何か言い返さずに居られずに、腹立ち任せに思い切り口を尖らせて相田から顔を背けた。しかし意識は相田から離れない。分かるよ、大変だよな、という答をどこかで期待している。それすら自分の子どもらしさを認めるようで、自分自身の行動を肯定しきれないまま璃子は相田の次の言葉を待った。

分かんねえよ、と笑いを含んだ声が背後に飛んで来たのは、それからまもなくのことだった。また馬鹿にされたようで、カツとなつて振り返ると相田はまだ声を上げて笑っていた。頭に血が上り、一瞬で璃子の頬が真っ赤に紅潮する。怒鳴りつけてやろうと璃子は助手席から腰を浮かした。

「何で笑うの！」

「だって、お前、分かるわけねえじゃん。俺はお前じゃないし、お前は言わないし。それ分かったら逆に気持ち悪くないか？」

さも当然と言わんばかりに相田は続けた。その淀み無く発せられる言葉達は璃子の額をこつこつと突き、見えない衝撃が璃子の脳を揺らす。

「それが分かんないから、俺達人間って面と向かって会話するんじゃないの？ 考えを伝える顔も手足も、言葉つてもんもあるんだから、有効利用しようとか思わなきゃ」

「……それは」

「相手がどう思ってるか、お前聞いてみたことあるか？」

「え……？」

「自分がどう思ってるかとか、こうして欲しいとか、面と向かって本音を伝えたことあるか？ 璃子が相手の考えが分からないのと同じでさ、相手も璃子が何考えてるのか分からないんだぜ？ 分かって欲しかったらもつともがけよ」

本音で伝える？もがく？

すとな、と肩から何かが落ちた。それは実際に重さのあるものではなくて、見た目には全く璃子の身体に変化は見られない。しかし、それまで硬い金属のように強張っていた璃子の身体の硬直が解け、眉間に押し付けられていた錘が空中に霧散していくような、そんな不思議な感覚だった。

目を瞬かせて、璃子は相田の言葉を頭の中で整理する。そういえば、人と本音で話したことが今までどれ程あったらう。遠い昔の記憶を探してみるが思い出せない。母の顔を伺うようになってからは特に、自分の我儘を表に出すことをしなくなった気がする。他人の顔を伺って、自分の感情を表に出さないように気をつけた。だからこそ、メールというツールの気楽さに嵌った。

今更、という気恥ずかしさに鼓動が速くなった。

「親御さんに対してだって同じだからな」

家が近くなってきたが、相田は話を切り上げる素振りは見せない。親の話題に切り替わり、璃子の鼓動はますます速さを増した。

「……どういうこと？」

「相手のアクションだけ待ってても、現状は絶対変わらないってこと。お前、さつき俺に食ってかかってこれたじゃん。癪癪起こすことも、怒鳴り散らすことも、自分のことを分かってもらうための行動なんだから、もっと使っていいんだぞ」

静かに、しかし頼もしく言い切ると、相田はゆつくりとブレーキを踏んだ。二人を乗せた車は大きな門扉の前に寄ると、そこで動きを止めた。昨夜出てきた時と全く同じ、大きな家には明かりは付いていない。唯一、表札を照らす小さな明かりだけが璃子の帰りを待っていたようだった。ゆつくりと白み始めた空には小さな雲がいくつか泳ぎ、まだ薄暗い地上の町では徐々に家々の輪郭が姿を現し始める。

相田は背広の胸ポケットから一枚のメモを取り出し、押し黙った璃子の手に握らせた。

「まずは少し頭と身体休めろ。受験校の相談だったらいつでも受け付けてやるから」

それだけ言うと、相田は璃子に目で車を降りるように促した。さすがに明るくなってきたら近所の人も起き出してくるだろう。冬とはいえ犬の散歩に出てくる人も居ないとも限らないし、そこで朝帰りを目撃されてもつまらない。璃子は素直に頷くと、ぺこりと頭を下げて助手席を降りた。

「ありがと、ございました……」

「おう、じゃ、またな」

運転席側に回り込み窓越しに璃子がしおらしく礼を言ってみると、相田はひょいと片手を上げて応えて窓を閉めた。そしてハンドルを握ると拍子抜けするほどあっさりと車を発車させ、一番近くの路地を右折して行く。あまりにもあっけない別れ方だった。呆けたように車を見送っていた璃子は、朝の空気の刺すような冷たさに我に返る。身震いして両肩を抱こうとして、かさかさと鳴る手に握らされたメモに気付きそれを広げてみた。

「……何、これ」

そこにあつたのは、二組の携帯電話の番号だった。

一つは相田のもの。

そしてもう一つは

「……紗織？」

遠くの山際から幾本もの明るい光の筋が伸び、それが空一面に広がった。日の出の時を迎えた街では、家々の屋根が、窓が、壁が、その光に照らされて鮮やかな色彩で浮かび上がる。その眩しさに璃子は目を細めて見入っていた。

冷雨

重い玄関ドアを開けて中に入ると、そこには昨夜璃子が飛び出したときのまま、全ての部屋のカーテンが閉められている薄暗い空間が広がっていた。しかし開け放たれたドアから覗くダイニングでは、モスグリーンのカーテンの隙間から僅かに差し込む光が細い光の帯となって空中に伸びている。その明かりに反射して空気中の塵がちらちらと光っている様は、家の中に金色の粉が降り注いでいるようにも見えた。そのあまりのまばゆさに誘われるかのように、璃子はダイニングへと足を踏み入れた。

光の中に漂う細かい塵は、璃子が手を伸ばすとその掌上でくると動きを変える。不規則な動きに目を奪われしばらくその様を見ているうちに、璃子は自分の体も浮遊しているような錯覚に囚われ始めた。

この数ヶ月間、毎日が体を動かすのが苦痛な程、璃子の体は心と同様に冷えていた。凝り固まった心はぬくもりを求めることも諦め、自らの身体にも頓着しなくなっていた。昨夜も薄着のまま外へ飛び出し、このまま体温が無くなるまで冷えて動けなくなってしまうばいいとさえ思っていたのだ。しかし不思議な浮遊感に逆らわずぼんやりと光と塵を眺めていると、手指がほんのりと温かくなっていくような感覚さえ覚える。実際ぬくもりが蘇ってきたのだらう。冷え切っていたときには分からなかった、手に握ったメモの薄い紙の少しざらついた感触をも感じることができた。

恐らく相田の卓上メモにしていたミスプリントの裏紙だらう。指先を軽く刺激するわら半紙に似た手触りのメモに書かれた、二組の電話番号に璃子は改めて目を落とす。行儀良く並んだ数字の向こう

に、いつでも受け付けてやると言った相田の顔が浮かんで消える。
そしていつも塾の教室で隣に座っていた、紗織の心配そうな顔がぼんやりと浮かび上がった。

「……友達って、何だろ」

紗織は学校と塾が同じ子。学校ではクラスが違うが、塾では同じクラス。名前と住んでいる大体の地区、誕生日は知っているが、ケータイのアドレスと番号を知らない。そんな関係は、一体何と表現したらいいのだろう。

顔馴染み以上、友達未満？

璃子は首を傾げた。どうもしっくりこない。そういえば、クラスメイトの殆どがケータイを所持する以前、友人付き合いとはどういったものだっただろう。メールアドレスもケータイ番号も、自宅の電話さえ知らない子とも一緒に下校し、ゲームやおもちゃを持ち寄って公園で遊んだものではなかったか。お気に入りの人形を見せ合いつこしたり、ブランコをどれだけ高く漕げるか競ったり、砂場や植木の陰にままごとセットを持ち込んだり、缶蹴りをしたり、鬼ごっこをしたり。夕方、薄暗くなつてそれぞれの家路に着くまで、一緒に遊んでいたその子ども達のこととは友達と思っていたのではなかったか。

遠い記憶を遡っている最中にふと、鼻先にむつとするような草いぎれの香りや、乾燥した空気に舞う砂埃の匂いが蘇った。乾いた地面に雨が浸み込む匂い、近づいてはいけないと言われても覗いていたどぶ川の匂い、クラスメイトの家に漂う線香の匂い、庭一杯に植えられた花の甘い匂い。匂いの記憶は連鎖し、当時の思い出を次々と引き出して行く。匂いの記憶だけではない。おもちゃの電子音や

流行っていた曲、一緒に遊んでいた子どものけたたましい笑い声や泣き声、息遣いまでもが耳元で再現されていくようだった。

あの頃も今も同じつもりなら、自分にとって紗織は友達なのかもしれない。いや、きっと友達なのだろう。

そう思った途端、それまでばんやりと宙を捉えていた璃子の目に光が差した。

使っていたおもちゃがどこかへ行ってしまったえば皆で探し、誰かが風邪をひいて外へ出て来なければ心配し、近所の子が引越することになれば涙を流した。お互いの関係に損得や利害、嫉妬がなかったわけではない。しかしそれらを含めて皆友達だと思っていたはずである。

匂いも、音も、その当時の感情も、それまで何故忘れていたのか分からなくなる程に鮮明だった。触覚の記憶も例外ではない。滑らかではあるがちくちくと産毛の生えた草の手触り、砂や土の温かくざらざらした感触、力を籠めるとくしゃりと潰れるセミの抜け殻、着せ替え人形の柔らかい髪。そして遊びの時間が終わって家に帰るその道すがら、自分の手を引いてくれた大きく柔らかい手の平の温かさも。

璃子ははつと息を飲んだ。

指先は小さな脈を打つようにじんわりと血が通い、徐々にその温かさを増していく。身体が温まっていくうちに泉が湧き出るように思い出された幼い頃の記憶は、璃子を少なからず困惑させた。五感に語りかけてくる記憶は鮮明であるが、いつ頃のことなのかはよく分らない。小学校低学年のうちはクラスメイトと遊んだことも覚えてるし、その相手が誰なのかなんとか思い出せる。しかし帰り道に手を引いてくれた、そんな人が居たことは今の今まで頭から抜

け落ちていたのだ。

母ではないはずだ。璃子の記憶の限り母はいつも怒っていたし、一緒に歩いて帰るということをした覚えもない。小学校に上がると宿題をしないうちに外へ出ることは許されず、指示された門限に遅れたら玄関で待ち構えていて激しく叱咤されたことは覚えている。手を引いて歩いてくれたその人はそこには居ない。顔も、姿も思い出せないが、思い出した手のぬくもりはとても温かい。璃子はその温かさを確かめるように、右手を強く握り締めた。

天井や床に伸びる光の帯はその太さと強さを増し、カーテン越しにも外の明るさが伝わってくるようだ。璃子はダイニングの窓辺へ歩み寄ると、腕を伸ばしてそつと厚手のカーテンを開けた。

無遠慮な朝日は冬にしては強い光をダイニングへと送り込み、それまで薄暗かった室内が一瞬にして明るく照らされる。光の帯の中で踊る塵達の存在は、圧倒的な光の波に飲まれその姿を消した。朝日が差し込む室内は、蛍光灯の人工的な明かりに照らされた時とはまるで違う鮮やかな色彩を持って璃子の網膜を刺激する。

窓と向き合うように置かれている、磨き上げられたアンティークを模倣したキッチンボードのガラス扉はきらきらと朝日を跳ね返し、リビングの白い壁紙に光の輪をいくつも散りばめる。手前に並べられた薩摩切子のタンブラーは使われなくなって久しいものの真紅に輝き、キッチンボードの中にその色を反射させている。ダイニングとの境を示すソファの黒いレザーも、まるでそれ自らが輝いているかのように隆起に沿って光を跳ね返した。光の洪水に目を瞬かせながら、明るくなった室内に向ける璃子の視線がダイニングテーブルの上で止まった。

テーブルの上には白い丸皿に乘せられてラップをかけられた、二つの小ぶりなおにぎりがあったからだ。

それは昨夜夕食を終えた時には確実に存在していなかった。あの家政婦が作って置いていったポリウムのある夕食を無理矢理胃に流し込み、汚れた食器をそのままにして自室へ閉じこもった時にはこんなものはなかったはずだった。しかし近寄ってみるとテーブルに放置したままだったはずの食器はきれいに洗い上げられ、キッチンボードの所定の位置に収まっている。シンクには水滴一つ残っていない。

璃子の落ち着きを取り戻していた心臓はまた跳ね上がった。誰だろうと考えを巡らせる半面、既に答は頭に浮かんでも居た。父ではないだろう。今更母がこんな家事をするわけも無い。思い当たるのは一人しか居なかった。長い黒髪を後ろで一つに束ね、エプロンを着け、家の中を闊歩している彼女の姿が浮かぶ。璃子は信じられない気持ちで首を横に振るが、しかしそれしか考えられない。

「……あの人、夜来たの？」

璃子は飛び跳ねる心臓をキャミソールの上から押さえつけるように、胸にぎゅっと握った拳を当てた。夜に家を抜け出したのがバレたかも知れない。何故こんな日に限って、あの女は夜中にこの家に居たりしたのだろうか。いかに父の命令とは言え、その存在を黙認し続けた自分に毒を吐きなくなつた。しかし速くなり過ぎた鼓動を落ち着かせるために一度大きく深呼吸をすると、璃子のはてと動きを止めた。自分の生活や父との逢瀬もあるだろうに、何故わざわざ夜の時間を割いてまで彼女はここに来たのだろうか。瞬間的に沸騰した頭を静め、考えをまとめるように璃子は唇をなめした。視線もダイニングテーブルの皿を見つめたまま動かなくなる。

そもそも食事の最中に彼女が何処に居るのか、食べ終えたまま放置する汚れた食器はどうなっているのか、璃子は考えたこともなかった。夕方家に帰ってから自室へ籠り、七時丁度からの食事が終

われはまた自室へ籠り、耳栓かイヤホンをしながら明け方近くまで机に向かつて階下の様子などを意識から遠ざけた。朝、家を出るときには人の気配がしないことから、彼女が昼間に仕事のために来たときに夕食の食器を片付けているのだろうとぼんやり思っていた。でもひょっとしたら、と璃子は手で口を押さえた。

相田に電話した以外身元が判明するようなことはしていないため、少なくとも彼女や父に今夜のことは知られていないはずだ。ということは、これは今朝に限ったことではないのではないのかもしれない。

まさか、毎日こうして食べないと分かっているにもかかわらず置いていくのではないか。そうだ、と璃子の喉がごくりと鳴る。以前も璃子が全く手を付けないことが分かっている夕食を、毎晩毎晩きつちり用意していたではないか。だとすれば、何故彼女はそんなことを続けるのだろう。果たしてそれは、いつ頃から続くことだったのだろう。

父への機嫌取りだろうか。それとも。

胸の鼓動に合わせて指先が脈打った。じんわりと血流が増していくと共に、右手は徐々に熱を帯び火照つていく。ただひたすらに家事をこなす、長い髪を後ろに束ねたやや厚みのある背中を思い浮かべた。母の香水の香りではない、味噌と炒め油の匂いが蘇る。

相田に璃子の様子を伝えた紗織の気遣い、不摂生をしている璃子へ食事を提供し続ける彼女の行動。それらの意味するところを想像し、璃子の心臓は体外に音が漏れるのではないかというほどに強く収縮し、痛みにも似た感覚を残していく。関係を断ち切っていたつもりだったのは、自分だけだったのか。璃子はメモを手にしたまま、困惑した表情でダイニングテーブルの傍らに立ち尽くしていた。

どれ程の時間、テーブルの上のおにぎりを見つめていたことだろう。開け放たれたままにされたダイニングのドアの向こうで、かちやりと鍵が開けられる音がした。次いで玄関ドアが開き、密閉された屋内の空気が一斉に玄関へ流れていく。同時に屋外の雀の鳴き声や行き交う車のエンジン音、自転車に乗って登校する高校生の笑い声が室内に飛び込んできた。静寂な空間が乱されたことに気がついたものの、未だ深く思慮を巡らせていた璃子は呆けた表情でドアを振り返った。

ドアの向こうに見える斜めに切り取られた玄関の空間には、コーヒー色のダウンジャケットを脱ごうとしたまま立ち止まっている女性の姿があった。その女性は室内に人が居ることを想定していなかったのだろう。遠目にも分かる程に目を丸くしている。しかし即座に表情を取り繕うと、素早くコートを脱ぎハンドバックを抱えておらずおとダイニングへと入ってきた。そしてまだ呆けたままの表情を晒し立ち尽くしている璃子に向かって、申し訳なさそうにはにかんだ笑顔を作る。

「り、璃子ちゃん……おはよう」

母親の金属的なそれではない、ややもすると甘ったるく纏わりつくような彼女の声音に璃子ははっと我に返った。深い記憶の狭間を彷徨っていた意識は浮上し、急速に璃子の視界のピントを合わせる。目の前に立つのが淡いクリーム色のニットを着たややふくよかな女性で、それがあのおにぎりを作ったであろうと思われる家政婦だと気がつく。璃子はぱっと彼女から視線を外して顔を背けた。何か声を返すべきか、いや返す言葉など何も無い。しかし何か返さなければ、でも話すのは怖い。璃子は顔を背けたまま、口を真一文字に結んだ。

そんな璃子の様子を見て彼女の手が動きを止める。視界の端に入る彼女の足が、一步を踏み出そうか踏み出すまいかとおどおどと動

いていた。恐らく彼女は太目の眉を八の字にし、それでも口元に努力して笑顔を作っているのだろう。今までは媚びた笑顔としか感じなかったが、今は彼女の真意が分らない。顔を向けてまじまじと彼女を見ることも躊躇われた。

二人の間に気まずい沈黙が流れる。それに耐えかねたのか、彼女はえつと口を開いてダイニングチェア的位置を直し始めた。音を立て椅子を几帳面に並べてから、彼女はテーブルに手をつく形で璃子に背を向ける。そしてすうつと一度大きく息を吸い込む音がすると、彼女は勢い良く振り返り口を開いた。

「璃子ちゃん、朝ごはんまだでしょ？　今から作っちゃうから食べてから学校行かない？」

一息に言い切り、彼女は璃子の顔を覗き込むように身体を傾けた。いつもより随分と軽快な、しかし甘いままの声音は学校へ行けと急かす様子も無い。むしろ頑なに顔を背ける璃子に対し、ここに留まるように言っているかのようにも聞こえる。

「おにぎりは昨夜のだから冬でもちよつと心配よね。パンと卵と、サラダか何か作ろうか？」

おにぎり、という単語に璃子の身体が揺れた。胸が痛いほど心臓が強く拍動し、かあつと頬が熱くなる。頬どころか耳や首まで赤くなっている気がした。やはりあれは彼女の仕業だったのだ。激しく打ち続ける心臓は胸を圧迫し、呼吸すら浅く速く、そして短くさせた。彼女の行為が嫌なのか、うれしいのか、気持ち悪いのか、照れくさいのか、申し訳ないのか、怒っているのか、自分で自分の感情がコントロールできない。璃子はいたたまれなくなり、弾かれたようにダイニングを飛び出した。

「璃子ちゃん！」

扉の向こうで彼女が叫んだ。その声に咎める様な色は無い。しかし背に彼女の声を受けながらも、璃子の足は止まらない。声を振り切って一息に階段を駆け上ると、二階にある自室へと飛び込んだ。後ろ手に部屋の扉を閉め、そのままドアノブの鍵を捻る。階下ではまだ彼女が自分を呼んでいる声があった。階段の下で聞こえるスリッパのぱたぱた動き回る音が、階段を登ろうかどうかどうしようか迷っているようだった。

璃子は背中で扉を押さえながら、腰が抜けたようにその場にへたり込んだ。剥き出しの膝が眼前に迫る。急な運動をしたせいではない、微かな膝の震えが自分の動揺を如実に表しているようだった。

「璃子ちゃん、嫌だったらごめんなさいね。朝ごはん、作っておくからお腹が空いたら食べて……」

階段を登ってくることを諦めた彼女の声が、吹き抜けを通じて璃子の部屋まで届いた。璃子を責める風でもない、怒りを含むわけでもない声。むしろ彼女が彼女自身を責めているかのような、やや甘さのトーンを抑えた躊躇いがちな声が、逆に璃子の耳に突き刺さる。璃子は両手で耳を押さえて膝に顔を埋めた。

一晩中起きていたせいで酷く空腹ではあったが、今は彼女の提案通りの行動を取りたくない。混乱した感情は理性を踏み倒し、彼女に酷い罵声を浴びせるかもしれないし、璃子に醜態を取らせるかもしれない。大人しく彼女に感謝を述べてしまってもいいかもしれない、謝ってしまうかもしれない。そんな取り乱したところを彼女に見られるのは、璃子のプライドが許さなかった。

しかし顔を膝に埋めて耳を押さえていても、璃子の全神経は扉を超えて階下に向けられていた。聞きたくないと思ってはいるがその

思いとは裏腹に、耳は階段の下の音を拾おうと必死になる。こちらへ来て欲しくないのか、来て欲しいのか、声を掛け続けて欲しいのか欲しくないのか、それすら分からなくなった。しかし彼女は二階に上がってくることはなく、呼び掛けの声もそれっきり聞こえることも無かった。

やがて吹き抜けの真下に居たらしい足音が遠ざかり、洗濯機や掃除機の稼働音が聞こえるようになると、璃子はゆっくり耳から両手を離して顔を上げた。彼女が部屋まで上がってこなくてほっとしている反面、残念なような、どこか寂しさに似た感情が湧いてくる。それに気がついて首を横に振るも、既に璃子には悪態や舌打ちといったものを出す余力は無い。一晩で色々なことがあり、考えすぎたお陰で、体力的にも精神的にも限界だった。

よろよろと立ち上がると、璃子はベッドにその身体を投げ出す。羽毛布団から空気が勢いよく飛び出し、布団の中に閉じ込められて逃げ場の無い羽毛達が柔らかく璃子の身体を受け止めた。厚みのある羽毛布団は、璃子のうつ伏せた顔も肩も腕も腰も剥き出しの足も包み込み、それほど高くない璃子の体温を受け取ると同時に自らが持つ高い保温能力を発揮した。じわりじわりと温かくなる布団に顔を埋め、璃子がそつと両目を閉じると、温められた上瞼は重みを増し下瞼に張り付いたように動かなくなる。脳全体が眼球ごと後頭部へ引き寄せられる錯覚を覚えたかと思うと、璃子の身体はそれきり動かなくなった。

力なく投げ出された両足の爪先はベッドからはみ出し、布団に埋もれた両手同様ぴくりとも動かない。しばらくするとうつ伏せた璃子の、布団の上に見える背中が僅かに上下し始めた。ゆっくりと規則正しいその揺らぎは布団の合間から漏れる寝息と同じリズムで繰り返され、璃子が深い眠りに入ったことを示していた。

顔の周りが熱い、と気が付いたのは数時間も経った頃だろうか。

夢も見ないまま泥のように眠り続けていた璃子が目を覚まし、枕元の目覚まし時計に目をやると時刻は既に正午を指していた。はっとして息を飲むも、最早今日は学校へなど行く気にもならない。気だるさの残る手足は四方に投げ出されたままで、起き上がるためにそれらを動かすことも億劫だった。鉛が付いているように感じる程重い頭だけ向きを変える。寝返りも打たなかったせいで寝違えたのか、首の筋がぴりぴりと痛んだ。

どうやら今日は天気が良いらしい。遮光カーテンの隙間から漏れる光をぼんやりと眺め、璃子はまだ熱を帯びているような重い瞼を閉じる。数時間の睡眠で頭の中身はかなりすっきりしていたが、身体の疲れは抜け切っていないようだ。手指をそつと動かしてみても、浮腫みが酷く関節をしっかり曲げることができない。口から大きく息を吸い込むと、うつ伏せで圧迫された肺が膨らみ身体が持ち上がる。やや苦しい姿勢で深呼吸を繰り返すと、新しい酸素を供給された身体は少しずつ軽くなっていった。

身体を起こす際、よいしょ、と思わず口を突いて出てきた言葉に璃子は顔をしかめた。なんだか自分が急にオバサンになったようで、そんな言葉を口にした自分を嫌悪する。しかし不思議なもので、たったその一言でも口にするのとはしないのでは、身体を動かす辛さや億劫さというものが違う気がした。もう一度よいしょと声を出し上半身を起こすと、璃子は腕を伸ばして大きく背筋を反らせた。不自然な形で伸ばされていた背骨が、腰の奥で軽快な音を立てて解放されていくのが分かる。

猫のようにしなった身体を戻し、ベッドの端に腰掛けてポケットを探ると、璃子は充電の切れたケータイを取り出した。真っ暗なままのサブディスプレイが見えるように、枕元のコンセントに差しっぱなしの充電器にセットする。通電が始まりサブディスプレイに小

さな赤いランプが付くと、すぐさまフリップを開き電源ボタンを押した。

開いたメインディスプレイにウェルカムメッセージが表示された後、見慣れた淡いブルーの待ち受け画面が現れる。璃子はそれが既に習慣になっているかのように、メールの新着確認のボタンを押した。新着確認画面に切り替わり、数秒後には新着メールも着信も無かったことを知らせる表示が出るはずだ。右京の件があつてからというもの、璃子のケータイがアラームやダイレクトメール以外でメロディーを奏でることはない。まして電源が切れていたのは深夜から平日の午前中だ。案の定、ダイレクトメールすら受信していない。細い溜息を漏らして璃子がケータイを充電器ごとベッドに放り投げると、フリップが開かれたままのそれはスリープモードに切り替わる。

耳を澄ませてみるが、階下の物音は殆ど聞こえない。昨夜から何も食べていない胃腸が空腹を訴えたが、階下に彼女が居るのか居ないのかもハッキリせず部屋の外に出るのは少々億劫だった。彼女に対する自分の気持ちも上手くコントロールする自信もないし、かといって空腹を紛らわすためにウェブサイトを巡る気分でもない。璃子はベッドの上に身体を転がし、いつの間にか手の平から落ちていた一枚のメモを拾った。二つ並んだケータイの電話番号が、メモに伝わる指先の微かな震えを受けて細かく揺れている。

かけて、みようか……。

璃子の耳の傍で別の璃子が囁いた。しかしすぐさま璃子はぎゅっと目を瞑りながら頭を振って、その考えを打ち消した。紗織のケータイを呼び出したところで今はまだ学校だろう。正午過ぎのこの時間、終業式間近の三年生の教室では、四時間目を受け持つ教師達が

教科書の内容を終わらせようと必死に授業を進めているはずである。紗織も恐らく教室にケータイを持ち込んでいるであろうから、こんな時間に着信音を教室に響かせるわけにもいかないだろう。たとえばそれがマナーモードのバイブレーションを使用していたとしても、あの振動音はかなり響く。

友達だと思っていてくれているらしい紗織に迷惑はかけられない、と諦める理由を思いつくと璃子は少し表情を緩めた。しかし璃子は、今すぐに電話できなくて残念だという思いより、良い理由を見つけてほっとしている自分に気が付いてもいた。だが紗織に電話をして天気や時候の挨拶をするわけでもあるまいに、一体何を話すつもりだったのだらうと指を止める。

心配かけてごめん？

それとも、心配してくれてありがとう？

それこそ自分らしくない。勝手に心配して、勝手にケータイの電話番号を超越したのは紗織なのだ。そこは璃子の側から触れるところではない気がする。しかしそれを考えたら、電話をしたところで何も話すことがなくなってしまうではないか。ふと、もう一度メモに書かれた数字に目を向ける。明け方の相田の言葉が頭をよぎった。

どれだけ受け身なの？

これも相田の言うような、受け身な感情なのだろうか。璃子はケータイのディスプレイを見つめて考えた。しかし今は授業中だ。電話をかけても取ってもらえる可能性は低いし、迷惑をかけてしまうかもしれない。迷惑をかけられた側である紗織が、次に璃子の電話を取ってくれる可能性はどれ程低くなるだろうと考えるのも、璃子

には少し不安に感じられた。ただ、紗織は璃子のケータイの番号を知らない。こちらからかけなければ、決して紗織からは電話をしてくることはないのだ。いつそのことワンコールだけして切ってしまうのか、いやそれは余計に迷惑がられて着信拒否されかねない。

たっぷり数十分間、璃子はケータイを掴んでは離し、ボタンに指を付けては離し、電話をしようかどうかどうしようか悩み続けた。そうこうするうちに目覚まし時計は一時半を示し、給食と昼休みの時間が終わることに気が付いた璃子は肩を落としてケータイを放り投げてしまった。放課後にしよう。電話できずにほっとしている自分に、若干の自己嫌悪を感じながらもそう言って自分を納得させた。

結果的にズル休みをしてしまった今日は、どうにも時間が過ぎるのが遅く感じられた。いつものようにイヤホンをして音楽をかける気にも、机に向かって受験勉強をする気にもならない。ましてや平日に白昼堂々と繁華街に出て行く訳にも、勤務時間中の相田に電話をする訳にもいかない。電話は取ってもらえるだろうが、進路相談したい訳ではないのだ。何かしら愚痴を言ったら、即座に切られてしまうかもしれない。

こんなことなら授業中に寝ていたとしても、学校へ行けばよかったと後悔するがもう遅い。ベッドに仰向けで転がりながら、璃子は何をするでもなくぼんやりと天井に貼られた壁紙の花模様を眺めていた。薔薇をモチーフにしたその壁紙は、淡い水色の小振りな薔薇と緑色の細い蔓が複雑に絡み合うデザインで、ペルシャ絨毯やミュシャのポスターの縁取りを思い出させる。璃子の目は複雑に絡んだ細い蔓の中から、ふと目に付いた一本の蔓を拾い上げて行方を辿った。

それは他の蔓の間に潜り込んだり、枝分かれしたり、影の部分に入り込んで見えなくなったり、かと思えばひょっこり姿を現したりしながら天井の端から端まで続いている。随所に小さな青薔薇をあ

しらったそれは、最後に壁際で小さな葉の芽となって、その姿を終えていた。その行方を確認すると、璃子は疲労を訴える目を閉じて鼻から大きく息を吐き出した。その途端、胃の辺りが動いて大きな音を立てた。

昨夜から何も食べていないため空腹感はピークに達しているが、彼女と鉢合わせたらどうしようかと思うと、階下で食べ物を物色するのも気が引ける。あと二時間も待てば彼女は買い物に行くだろうから、それまでの辛抱だと思っているが空腹のあまり胃がキリキリと痛んだ。ごろりと寝返りを打ち、腹を伸ばす仰向けから姿勢を変えてみるが痛みは増すばかりだった。

「いったあ……い……」

寝転んで羽毛布団に埋もれながら、璃子はぐつと鳩尾に握り拳を宛がう。チクチクと絶え間なく襲ってくる痛みは、やがて胃を捻りあげているのではと錯覚する程の痛みへと変わっていった。璃子は堪らず身体を起こし、どこかで聞いたことのある胃痛のツボとやらを探して指圧した。ベッドの端に座って前屈みになり、肘の高さで背骨の両脇を親指で押し続ける。それでも胃の痛みは治まる気配を見せず、仕方無しに璃子は薬を飲もうと立ち上がってドアノブに手を掛けた。そのとき。

「璃子ちゃん！ おばさん、ちょっとお買い物に行ってくるからお留守番お願い！ テーブルにお昼ご飯出しておくから、気が向いたら食べて頂戴ね！」

普段とは明らかに違う勢いと、声の大きさに驚いて璃子は身体を起こす。しかし扉と階段を隔てていては彼女の様子すら目で確認できない。あれ、と不審に思っているうちに、玄関の鍵が閉められ彼

女は出て行ってしまったようだった。

「……何、今の」

誰に言う訳でもなく、璃子は反射的に呟いた。しかし体勢を変えたことが悪かったのか、再び胃がちくりと痛む。空腹も良くないのかもしれない。眉を寄せ小さく舌打ちをすると、璃子は鳩尾に手の平を宛がいながら立ち上がった。そつと気配を伺いながら階段を降りると、玄関マットの脇にきちんと揃えられたスリッパが置いてあるのに気がついた。本当に彼女は買いい物に行ったようだ。

ほつとひとまず胸を撫で下ろし、璃子はそのままダイニングへと向かった。扉を開けてそつと中を見ると、確かに彼女の言うとおりテーブルの上には何か皿が置いてある。ほんの少しだけ、彼女の思惑通りに動くのが躊躇われたが、空腹と胃の痛みがそんな璃子の些細な意地を蹴り飛ばした。食べ物を意識した胃がぎゅると鳴る。おそろおそろ近づいて皿の上にあるものを覗き込むと、ラップが掛けられている皿の中身は今朝のものとは違うおにぎりだった。二つ並んだそれは艶のある海苔が巻かれており、ラップ越しにその匂いを想像した璃子の口内が唾液で満たされる。璃子は喉を鳴らした。

ふんわりと掛けられたラップを取り外す時間ももどかしく、璃子はおにぎりにかぶりついた。湿気た海苔の、独特な磯の香りが鼻腔をくすぐる。しつとりと米粒に張り付いたそれは、僅かな弾力を持つて璃子の歯を受け止めては千切れた。米の甘味と海苔の香りが口から鼻に抜け、微かに感じる塩分と共に空腹感を満たしていく。昨夜から何も飲んでいない、乾いた食道に米や海苔を張り付いた。それに時折むせ返りそうになりながらも、璃子はおにぎりを頬張り続けた。

最後の一口を飲み込むと、璃子は肩で息をしながら冷蔵庫に向かった。扉のポケットからお茶のペットボトルを取り出し、そのまま

ラッパ飲みで胃に流し込む。行儀が悪い、と幼い頃から良くないことだと叩き込まれていたが、コップを探す手間さえ惜しかった。華奢な喉仏が数回上下する。水分が不足した細胞がどんどん満たされていく、そんな感覚は部活を引退して以来だ。ペットボトルから口を離す頃には、その中身の大半が璃子の体内に流し込まれていた。

胃袋が満たされ、璃子は満足したように大きく息を吐き出した。気がつけば胃の痛みも殆ど無い。空腹すぎたせいか、と璃子は薬を探すことを辞めてソファにその身を投げ出した。

こんなことで手懷けられる気はない。家庭不和の原因の一端であり、不倫の事実が母にバレても居座り続ける彼女を憎らしくさえ思う。そうは思うものの、父を宥めていた様子やタイミングの良い食事などを考えると、正直有難いと思わなくもない。

彼女にとっても自分は愛人の娘であり、考えようによっては邪魔な存在なはずだろう。璃子が家から出て母親の元へと行ってしまえば、面倒な世話からも解放されるだろうし、この家に乗っ取り父と好き勝手にやれるのではないか。それなのに、と璃子は彼女の真意を探る。しかし答えは出ないまま、いくつかの憶測が浮かんでは消えていった。

ソファに身を委ねてぼんやりと宙を見つめ、彼女が居ない時間に彼女のことを考える。どうにも今朝思い出したことが彼女の姿と被って仕方なかった。自分の考えを鼻で笑いながら、しかしその考えを拭いきれないことに若干の苛立ちを覚える。何か確信を得る手立ではないものかと考えを巡らせるが、何も浮かびはしない。いや、一つだけ確実な手段があった。それに気が付かない振りをしようかと試みるものの、璃子の脳裏には再び相田の顔とあの言葉が蘇る。

どれだけ受け身なの？

頭の中で、今朝の相田の声音が再現された。呆れたような、哀れんだような、しかし生徒のミスを指摘する時と同じような鋭さをもった声。声と同時に、車の中で言われた時に感じた鳩尾への違和感も蘇った。

そつと右手を顔の前に持ち上げ、それを見つめると軽く握り親指で唇をなぞる。少なくとも彼女の真意と記憶にあるあの人物の事が分ければ、今のもやもやした気分は落ち着くに違いない。クラスメイトや塾内のことではないから、もちろんネットには頼れない。やるのは自分。璃子はぐつと目を上げた。

「……知りたい、かな」

そう呟くのとほぼ同時に、玄関の鍵が開けられる音がダイニングに届いた。すつと短く息を飲んで耳を済ませると、ビニール袋の擦れる高い音が廊下に響く。買い物が終わって帰ってきたのだろう。よいしょ、という声も微かに聞こえてきた。いつもであれば鍵が開く音でぱつと立ち上がり、玄関が開く前に階段を駆け上がるころだったが、璃子はソファに座ったまま彼女が姿を現すのを待った。

「ただいまあ……あ、と、璃子ちゃんが居たのね」

彼女はダイニングに入るなり璃子を見つけたらしい。独り言にしているやや大きく、少しだけわざとらしさが漂う声で呟いた。それを誤魔化すつもりなのか、一杯に詰まったレジ袋をダイニングテーブルに乗せると、派手に音を立てながら中身を取り出し始める。ゆっくりと、しかし目を逸らさない努力をしつつ璃子は彼女を振り返った。鳩尾の違和感のはつきりとした圧迫感に変わり、喉の奥に何か熱い塊が込み上げてくる感覚に襲われる。突然のことに彼女も意外そつな表情を隠さず、手を止め璃子の視線を受け止めている。震え

そうになる自分の身体を保つため、奥歯に力を入れてじつと彼女を見据えた。

緊張で生じる吐き気を堪えながら、璃子は頭の中で彼女へかける言葉を探した。思考の中を目まぐるしく単語や質問文が飛び交い、彼女へ対する疑問に一番近い言葉がシミュレートされる。その間も彼女は驚いた表情のまま、ビニール袋に入れた手を動かしもせず、璃子を見つめ続けていた。お互いの間に流れる沈黙。それが更に璃子を焦らせた。

何か、何か言わなくては。シミュレートが完了しないまま、激しい焦燥感に駆られた璃子は口を開いた。

「……おか……り、なさい」

それは蚊のなくような声だった。そして口を突いて出てきた言葉は、それまで考えていたものとは全く違うものだった。はっとして両手で口を押さえるがもう遅い。彼女の目が丸くなった。

「え……？ あ、ただ……いま」

頬を赤らめた彼女の顔を見た瞬間、璃子の血液も沸騰したかのように全身を一瞬で上気させた。

「え！ あ！ ち、ちがつ……」

頬どころか、耳や首まで真っ赤になりながら、璃子は必死に自分を取り繕うための言葉を探す。しかし慌てれば慌てるほど頭の中は真っ白になり、とても言葉を発せられる状況ではなくなっていった。そんな様子に頬を緩ませている彼女の様子も目に入り、更に情けなく居たたまれなくなる。

最低、最悪だ。舌打ちも溜息も飲み込み、きつく唇を噛む。カッコ悪い、と自分の不甲斐無さに璃子は頬を押さえながら俯いた。それでも逃げ出さないのは、璃子自身の意地でもあった。

「いいのよ、おばさん嬉しいから」

ありがとっ、と彼女の笑みを含む声がした。そしてレジ袋の中身を出して冷蔵庫に入れる作業を再開し、意識的なのかどうか璃子に背を向ける。璃子は顔を俯けたまま目で彼女を追った。心なしかその背中が弾み、動きが軽やかになっていくように見えた。それを見ていると、璃子の身体も軽くなつていくような不思議な感覚に包まれるようだ。これは心地よいと言える感覚なのだろう。頬から手を離し、璃子は浮遊感に身を任せるように顔を上げた。

彼女のやや厚みのある背中では、キッチンのシンクの前を忙しなく行き来している。殆どの場合この家で食事をするのは璃子一人のはずなのに、どうしても買い物が必要なのかと思う程、レジ袋からは多量の食材や雑貨が片付けられていった。最後にゴミ袋を所定の位置に仕舞い終えると、彼女は後ろで一つに束ねた長い黒髪を翻すように璃子へと向き直った。

不意を打たれざくりと身を固くしたが、璃子はその場から逃げようとはしなかった。まだここに居る本来の目的を達成していない。それをはっきりさせないまま二階へ逃げたら、つい先刻の恥ずかしい台詞と態度が無駄になる。璃子はきゅっと唇を結んで彼女を睨んだ。彼女の方と言えば、そんな璃子の様子を見ると、突如紅茶の準備を始めた。

彼女が茶筒を開けた途端、鼻に甘い匂いが侵入する。すんっと鼻を鳴らしながら息を吸い込むと、その香りは一層強く璃子の鼻を刺

激した。

その甘く、どこかほろ苦い香りは、階段へ逃げようとした璃子の足を止めるに十分な働きをしたようだった。それどころか胸いっぱいに広がるこの香りの元を目で探りながら、璃子は彼女に一步步近づいた。

「バニラティ、淹れるわ。ちょっといい匂いでしょう？ 良かったら飲んでからお勉強して？」

璃子の視線に気がついて振り返った彼女はにこにこ微笑んで、ティーポットの蓋を開けてみせる。そしてテーブルへ着くように目で促し、彼女自身はシンクへと向かった。

無言で背中を向ける彼女は、恐らく璃子が着いてくることを確信しているのだらう。傾き始めやや薄暗くなったリビングの方を見やりながら、戸惑いつつも璃子は椅子を引いた。大きな吐き出し窓から見える空は、昼間とは違いやや青みを深めている。ダイニングテーブルの上のペンダントライトが、テーブル上にオレンジ色の光の輪を作って紅茶と共に璃子を誘っていた。

ワイルドストロベリーのティーカップに並々と注がれた紅い液体の上にはうつすらと湯気が立ち昇り、同柄のソーサーにはビスケットが二枚置かれている。バニラの香りとビスケットから漂うバターの香ばしい匂いが、つい先刻おにぎりとお茶で満足したはずの舌と胃袋を期待で満たした。

「あつたかいうちに紅茶飲んでね。お勉強していると冷えるでしょう？ お夕飯もあつたかいもの作るから、食べてくれたらおばさん嬉しいわ」

いそいそと、というより浮き浮きと、という形容の方が合う。キッチンに向かう彼女の足取りは軽い。声も弾むように軽やかで、ややしっとりとした独特の甘さが耳に残るが、機嫌の良さが手に取るように分かる話し振りだ。普段全く言葉を交わすことがなかったせいか、彼女はこんなにも饒舌に話すのかと不思議な気分。璃子はその様子を見ていた。

「あ、おばさん嬉しくってつい喋りすぎちゃってるね。うるさいかしら、ごめんなさいね」

振り返って照れくさそうに肩を竦める彼女を見ても、不思議と嫌な感情は湧かない。璃子は黙って座ると、まだ冷めない紅茶を一口すすった。鼻に抜けるバニラの香りとは裏腹に、舌の上では紅茶独特の渋みとコクが広がる。油分を感じるコーヒーの味とは異なり、すっきりとした後味が目を覚まさせてくれるようだった。さっくりとしたビスケットを一口齧り、再び紅茶をすする。素直な糖分が、璃子を穏やかな気分にした。

今なら、と璃子は口を開いた。

「何で、うちに構うの？」

するりと口から零れ落ちた言葉には、目立った感情の色は無い。ただ聞きたい。その気持ちだけが言葉になった。そんな口調であったことに璃子自身も驚いていたが、彼女の方はもつと意外なことだったのだろう。皮を剥きかけた人参を片手に、彼女は困ったような顔をしながら璃子を見つめる。外は風が強いらしく、換気扇の羽が煽られる音がダイニングに響いた。

「……璃子ちゃん、お化粧しない顔は昔のまんまね」

沈黙をやり過ぎすため再び紅茶に口をつけようとした璃子は、彼女の言葉に顔を上げた。

「その方が可愛いわ」

彼女は薄く微笑むと、持っていた人参をまな板に戻した。そして、消え入りそうな声で一言、ごめんなさいと呟いた。

「え……」

「璃子ちゃんが言いたいこと、分かるわ。他人が自分の家の中をうろつろしていて、あまつさえ自分のお父さんと……、なんて、普通嫌よね」

「それは……」

「ごめんなさいね。おばさん、ちよつとでも璃子ちゃんに許してもらいたかっただけなの。でも、良く考えたらそういうのも嫌よね。受験前なのに、こんなことで悩ませちゃって本当にごめんなさいね」

言葉を選ぶ余裕も無いのか、彼女は少し早口で続けた。母のような捲くし立てる口調ではない。しかしその動揺が伝わる話し方に璃子は何も言い返せない。

「本当はもっと早いうちにこのお仕事も辞めるつもりだったの。でも、おばさんがぐずぐずしてるうちにこんな時期になっちゃって」

でもね、と彼女は口ごもった。

「あの、璃子ちゃんのことを、その、心配で……」

噛み締めるような一言が、璃子の胸に突き刺さる。少し哀しそうな顔をして俯く彼女の顔を凝視したまま、璃子は動くことができなかった。

彼女は、心配、と言った。

どういついきさつかは知らないが、結果として父を奪って母を追いやった張本人が、一体どの面を下げてそんなことを言うのか。優等生という役柄と学年一位という称号で、璃子が遠回りながらも必死に求めた父母との絆。それを容易く千切ってしまった存在の彼女が、何故璃子本人の心配をするのか。

風は更に強くなり、煽られた換気扇の羽が大きな音を立てた。

「璃子ちゃんは覚えていないと思うけれど、おばさん、あなたが小さい頃にお父さんの会社に勤めていたの」

璃子の口から罵声が飛び出しそうになった瞬間、意を決したように彼女は璃子を見つめて言った。

「その頃のあなたのお母さん、少し体調を崩されていたの。なかなか璃子ちゃんのお世話ができなくなっていたみたいで。おばさん、お父さんをお願いされて、何度か璃子ちゃんのお迎えにいたり、お弁当を作ったりしたこともあるのよ」

「それって……」

璃子の脳裏に朝の記憶が蘇る。幼い璃子の手を引いてくれた、温

かい手の平の感触。それはやはり、癩癩を起こしてばかりだった母のものではなく、この目の前に立つ女性のものだったということなのか。璃子は短く息を飲み込んだ。

「いつも璃子ちゃん、ちょっと寂しそうに遊んでいて、おうちに帰りたくないって泣いたりしてたの。それをお父さんに相談しているうちに、その、お付き合いするようになってしまっ……」

璃子の様子を気遣いながらも、彼女はゆっくりと言葉を続ける。

「ご家族に申し訳なくなってお父さんとはお別れして、会社を辞めた後も璃子ちゃんのが気になって気になって。お母さんがお仕事に行くようになったって聞いて、お父さんに頼まれておうちのことをする家政婦として雇ってもらったことにしたの」

「心配って……」

「ええ、お父さんをお願いされたのが嬉しかったっていうのももちろんよ。お父さんも、それを家政婦を探しているっていう口実を作ってくれただけなのかもしれないわ。本当だったら、こんなことになる前にお断りするお話だったの」

「だったら断ればいいじゃない！」

「でも！」

彼女が声を強めた。

「あなたのことが心配だったのは本当よ」

そういつて口を閉じた彼女の肩は、小刻みに震えていた。対する璃子も同様で、握り拳といい膝といい細かく震え、奥歯までがかちと音を鳴らしていた。興奮の余り視界も揺れる。まるで全身の筋肉が痙攣しているかのようだった。

彼女の言う言葉の意味が上手く理解できない。ただ、身勝手な行動の理由付けに自分が使われただけだと、そこだけは強く感じ取れる。心配という言葉振りかざし、自分にそれを押し付けようとしている。璃子の全身に鳥肌が立った。

「でも、きつと璃子ちゃんは、おばさんのことを良く思っていないって、そう思ってるから、おばさんも璃子ちゃんにどう声をかけていいか分からなくて。おばさんのご飯も本当は食べたくないって、分かってるの。それでもやっぱりお勉強もあるし、まだまだ璃子ちゃんも身体を作っていかなきゃいけない時期でしょう？ 女の子だし、食事くらいはしっかり摂ってもらいたくて……」

くどくどと言いつたがましい言葉を彼女は並べた。次第に声が小さくなり、また媚びた色を含み始める。璃子は激しく頭を振った。落ち着いていたはずの胃が再びキリキリと悲鳴を上げ、どす黒く熱い塊が喉を突き上げる。

「今更おばさんは良く思ってもらえるとは思っていないけど、でも、最近おばさんのご飯を食べてくれるし、少しは璃子ちゃんの役に立っているかしらって、嬉しくなっていたところなの。お父さんもなかなか会えないけど、璃子ちゃんのこと……」

「あんた達の心配なんて要らない！ ほつといて！」

璃子は込み上げた物を履き捨てるように、尚も続く彼女の言葉を遮った。

「あんた達の都合なんて知らないし、勝手に心配されたって迷惑なんだよ！ 親でもないくせに保護者ヅラすんな！」

「璃子ちゃん！」

「お父さんが何？ うちの知らないところで勝手に色々心配してるって何？ そんなのどうせまた世間体とかのためなんでしょ？ あんただって結局はお父さんに捨てられたくないからってだけでしょ？ もうあんた達の都合でうちのこと振り回さないで！」

堰を切ったかのように言葉は溢れ、その勢いに任せて璃子は怒鳴り散らした。全身の鳥肌は治まらず、込み上がって来る熱い物を抑える術も無い。璃子の目は鋭く彼女を睨み付け、握り拳はテーブルに叩きつけられる。その激しい剣幕に彼女も口をつぐんだ。

「結局あんた達が付き合っていたいからって、うちのことダシにしてるだけじゃない。本当はうちのことも、お母さんのことも、邪魔だと思ってるくせに綺麗事ばかり！ お父さんがうちのこと心配してるなんて嘘、あんたがうちを心配してるっていうのも嘘だ！」

彼女が口を開きかけたが、璃子はそれを許さない。畳み掛けるように言葉をぶつけ続けた。今朝の相田とのやり取りで、抑えていたものが溢れやすくなっているのかもしれない。

「うちが学校で何言われてるか知らないくせに！ ネットでだってもうあんた達のことは噂になってるんだよ？ あの夜のことなんて学校中皆知ってるし。うちがどれだけ肩身が狭い思いしてるか分かる？ 全部、全部あんた達のせいよ！ 今更世間体だなんて、笑わせないで！」

璃子の言葉に彼女の顔色が変わった。目が大きく見開かれ、唇が戦慄している。肩で荒い息を吐き、璃子はこの数週間の出来事がどれだけ忌々しかったかを思い出した。決してターゲットにならないように細心の注意を払って生活していたというのに、掲示板に晒され、ホームページも荒らされ、教室で一人惨めな思いをさせられたそもその原因はどこか。璃子の生活における綻び、右京という男に出会ってしまった元凶は父と彼女の存在ではないか。

奥歯を噛み締め、璃子は更に険しい目つきで彼女を睨み付けた。どこかでそれは責任転嫁であると理解している自分も居る。しかし、既に彼女の言葉によって理性の箍が外れる寸前である璃子に、それを止める余裕は無い。辛かったというその思いをぶつける以外に、正気を保てる方法が思いつかなかった。

「璃子ちゃん、今の本当なの？ 落ち着いてよく聞かせて……」

「ほら！ 結局自分のことじゃない」

懇願する様子の彼女の言葉をぴしやりと遮り、璃子は勢い良く立ち上がった。反動でダイニングの床に椅子が倒れ大きな音が響く。その音に触発されたように、璃子の体内に渦を巻くエネルギーが出口を求めて身体を揺らした。

衝動的にテーブルの上にあるバスケットを握り、彼女に目掛けて投げつける。ひっ、と短い悲鳴を上げ、彼女は身を竦ませた。

「気になるんでしょ？ 学校で噂になってるってことは、もうこの近所の大人だって知ってるってことよ！ あんた達がどれだけ汚いことしてるかなんて、バレバレなんだよ！」

「そんな……でも……璃子ちゃ……」

羞恥なのだろうか、それとも怒りや興奮なのだろうか。彼女の頬は紅潮し、両手は口元を覆っている。指の合間から見える、小刻みに震える唇はまとまった言葉を紡ぐことができないようだった。しかし哀願するようなその表情が、また璃子の感情に火を付ける。長い間抑えていた分、璃子自身も感情の暴発を抑えることができなかった。なっていた。

「恥ずかしくないの？ 自分のやってること」

両目は彼女を見据えたまま、璃子はゆらりと身体をダイニングテーブルから離れた。ぎくりと表情を変え、彼女は数歩後ずさる。

「あんたが居るからお母さんは帰ってこない。あんたが居るからお父さんはうちとお母さんを見ない。あんたが居たからうちは学校でイジメのターゲットにされてるんだよ」

自分が幼い頃から父や母に自分を見てもらえていなかった、その理由を自分なりに見つけた璃子の目は彼女を捕らえて離さない。怯えた顔の標的を定め、真っ向から言葉の刃を投げつける感覚に、璃子は快感にも似た興奮を覚えて身を震わせた。

「璃子ちゃん、少し落ち着いて……」

「こうなったのも全部あんたのせいよ！ お父さんとお母さんを返してよ！」

本来ならばぶつける相手が違っただろう。そんなことは分かっていた。しかし璃子は自分の感情の爆発に逆らうことなく、その口から発する凶暴な刃を彼女にぶつける。激しい興奮に唇が戦慄き、吐息

も震えた。

璃子の剣幕に、青ざめた表情で彼女もついに口を閉じた。テーブルを挟んだ二人の間に沈黙が流れる。換気扇から聞こえる風の音に水の撥ねる音が加わり、屋外で雨が降っていることを璃子に知らせた。窓の外はとうに暗くなっている。時折家の前を通過する車のヘッドライトが差し込み、薄暗いキッチンに立つ起伏の少ない彼女の顔を撫でた。

璃子はテーブルに目を落とした。湯気も無くなり冷えた紅茶からは既に甘い香りも飛んでいる。勢いに任せて投げつけてしまったビスケットの味も、興奮ですっかり忘れてしまった。興奮は幾分収まっていたが、沈黙をしたままの彼女に苛立つ気持ちが消えない。

こんなもので、と璃子はティーカップを持ち上げ、キッチンに立ち尽くす彼女の顔に向かって放り投げた。

息を飲む音がしたかと思うと、彼女は仰天した表情でティーカップを抱えて倒れこんだ。中身が残っていたティーカップは、彼女の顔とエプロンを濡らした。しかしティーカップが落ちて割れるのは防がれたようだ。璃子は大袈裟に舌打ちをし、忌々しいという気持ちを隠さずに彼女を見下ろした。前髪も濡れ、薄く書いたアイラインが滲んだ顔で、彼女はそんな璃子を申し訳なさそうに見上げる。

眉を八の字に下げ、目に涙を一杯に溜めた彼女を、璃子は醜惡なものを見る目で見下ろした。

一般的な美しさで言えば母がこんな女に負けるはずは無い。しかし父はこんな女を選んでいる。璃子は先日の騒動で久しぶりに見た記憶にあるより恰幅が良く、やや薄くなった頭に汗を浮かべた父を思い出した。目つきの鋭さは変わっていないが、他所の父親達と比べたら見た目が良いとは言い難いはずの父だ。

何故あの母が父を選んだのか、何故この女と父の二人が惹かれ合うのか、璃子には理解できない。しかし少なくともこの女を排除すれば、父は璃子や母を見てくれるに違いない。父が戻れば、母ももしかしたら璃子自身を見てくれるかも知れない。

幼い頃からの仕打ちを考えれば、璃子にとって母の存在は恐怖の対象である。しかしそれはもしかしたら、彼女の存在があつたからではないのか。そう考えると、母に肩入れするというより彼女の存在への憎しみが強くなる。

この女が居たから、昔から、自分は父母に愛されなかったのではないか。この女が居たから右京に出会つてしまい、今、惨めな思いをさせられているのではないか。

ならば、この女さえ居なくなれば。

「……ごめんね」

唐突に、しかし静かに彼女は呟いた。

興奮に任せた思考を中断させられ、何を言われたのか分からないまま璃子は彼女を睨み付ける目に力を籠める。涙に濡れた彼女の目は、じつと璃子を見上げたまま動かない。そして再び唇を開くと、きつぱりとした口調で告げた。

「本当にごめんなさい。でも、お父さんとお別れはできないの」

それまでのどこか自信のない話し方とは違う。一瞬、彼女の顔つきが変わったのを、璃子は見逃さなかった。涙を溜めた目は鋭く璃子を射抜く光を放ち、確固たる意思を覗かせる。その鋭さに璃子はたじろいだ。

「私のせいなのは分かってるわ。でも、こんな私を受け入れてくれ

るのは璃子ちゃんのお父さんだけだから、返して上げられないの。どうしてと言われても、これだけはどうしても譲れないの。だから、ごめんなさい」

静かに言い切る彼女に、璃子は二の句が告げない。まさか、こんな風に彼女が言い返してくるとは思わなかったのだ。それも父親との不倫を真っ向から認め、それでも引き下らないなどとは、璃子の感覚では到底理解できない行動だ。

「お別れはできない。だから逆に璃子ちゃんの場合は、自分の子どもだって思いながらお仕事してきたの。璃子ちゃんには受け入れてもらえなくても、私はそのつもりだったの」

たじろぐ璃子を説得するように、尚も言葉を続ける彼女はゆつくりと立ち上がった。それに気圧された璃子は数歩後ずさりたくなる。父のために自分の人生を棒に振っているようにしか思えない彼女の行動は、理由を聞いてもきつと理解できない。無意識に後ずさりながら、璃子は唇を震わせた。

父とは別れないと言い切る彼女の姿に、リビングで行われていた父との痴態が重なる。見なかったことにしたかったのに、記憶は薄まるどころか鮮明さを増していた。璃子の耳の奥に、あの日の声が蘇った。どす黒く、熱い感情が湧きあがる。

「何開き直ってるの？ あんたなんて、愛人の……クセにつ！」

吐き棄てるように呟いた言葉に、璃子自身が驚きはつと口を押さえた。わずかな沈黙が訪れた瞬間、璃子の胃と心臓には鋭く突かれたような痛みが走る。目の前の彼女の顔がみるみるうちに崩れ、ダイニングに小さくすすり泣く声が響き始めた。

彼女の声が遠ざかり、自分の言った言葉が耳に張り付いてこたま

する。ぎりつと音がする程、璃子は奥歯を強く噛み締めた。すすり泣く声は次第に大きくなり、その声は璃子の耳と胸を鋭く刺し続ける。

いたたまれずに璃子は彼女に背を向けた。

彼女の涙は見たくない。彼女の声も聞いて居たくない。既に制御できない程に昂ぶっている感情を、ここでこれ以上彼女に吐露するのも拒絶したい。

璃子は足元に転がった椅子を蹴り飛ばした。そして足を踏み鳴らしながらダイニングから走り出て、階段を駆け上り自室へ飛び込む。クローゼットから厚手のコートを取り出し財布とケータイを一台そのポケットに突っ込むと、まるで転がるように階段を駆け下り玄関に向かった。

ダイニングから彼女が何か叫んだ。

しかし璃子はその呼びかけには応えず、スニーカーを突っ掛けるとそのまま雨の屋外へと飛び出したのだった。

安息

クリスマスも間近なこの時期の雨は、肌に突き刺さるほどに冷たい。開け放したガレージに転がっていた一本のビニール傘を手に、璃子は重い足を引きずりながら住宅街を出た。

家を飛び出すときに咄嗟に目に付いた傘で雨は凌げているもの、走ったお陰でスニーカーやコートの裾は水浸しだ。安物のビニール傘の骨からは錆が浮いており、ところどころに茶色い染みのような跡がついている。冷たい雨水はスニーカーの縫い目から浸入し靴下にも浸み込んだ。足の指先がじんわりと冷たくなり、次第にかじかんで痛み出す。傘を持つ手も冷え、指先や節々が真つ赤になっていた。

傘越しに見える空には一筋の光もなく、ただ所々に設置された街灯の明かりを雨粒が反射している。雨に濡れた夜道がぼやけて見えるのは、涙で自分の視界が滲んでいるせいなのか、撥水効果の薄れた傘の上の水のせいなのか。璃子は何度も何度も、冷え切った感覚も無くなりそうな手で目を擦った。

胸が押し潰されるように痛む。コートの上から握り拳で叩いても、服越しの肌に爪を立てても、そんな表面的な痛みでは緩和できなかった。鳩尾の辺りから、肋骨の上から、熱した鉄の塊を押し当てられている、そんな気さえ起こる。この痛みに比べたら、手足の冷たさ等も気にならない。

彼女が泣いた。

あれだけきつぱりと父との関係を認めていた彼女が、璃子の言葉で泣き崩れた。どす黒い感情の塊を吐き出した途端、というより彼女の表情が変わった瞬間に、璃子は自分の吐いた言葉に後悔した。

誠実かはともかくとして、対話をしようとしていた彼女を、レッテル一つで拒絶したのだ。

どうしようと考えながらも、どこへ行くでもなくとぼとぼと璃子は歩き続けた。足全体を冷たい水が冷やし、既に指先の感覚は無くなりかけている。寒さはもうとつくに麻痺している璃子の思考能力を停止させていた。いつそのことこのまま自分が消えてしまえたらいいのに、とさえ思える。しかし、暗い裏通りを抜けネオンサインが煌く繁華街が近づいていることに気がつき、璃子ははっとして足を止めた。

足元近くを彷徨っていた視線は、ふわりと持ち上がり一つの建物の釘付けになる。

日も暮れて小さな商店が店を閉めた繁華街の外れ。オフィスビルも電気を落としている窓が多い中で、一つの窓だけに煌々と明かりが点いている建物を目にしたとき、璃子の両目からは涙が溢れた。

考えていた訳ではない、行こうと思っていた訳でもない。むしろこのまま全く関係ない所に行きたいと思っていたはずなのに。しかし、璃子の足は自然とこの場所 通い慣れた塾へと璃子を連れてきていた。

涙で景色が滲み揺れる視界の中でも、その明るい窓だけがやけにはつきりと見える。教務室の窓だった。途端に璃子は自分の心細さを自覚して震えた。

毎晩のように見上げていた窓枠の向こうに、見え隠れする黒い影は複数。どれも忙しく動き回っているように見える。その中に相田も居るだろうか。電話より先にここに来てしまつて、相田には呆れられるかもしれない。しかし、一人で居るのはもう耐えられない。明かりに誘われるままふらふらと建物に近づくと、璃子はその通用口の扉を開けて中へと入っていった。

冬季講座直前のためか、建物内に生徒達の姿はない。正面玄関も真っ暗で、非常口を示す緑色の明かりだけが辺りを静かに照らしていた。階段の上からは薄く明かりが漏れ、人の足音や機械の作動音に混じって聞き慣れた講師達の声が聞こえてくる。璃子は持っていた傘を通用口の扉に立てかけると、階段に足をかけた。

濡れたソールが床材と擦れる度、ゴムが軋む奇妙な音が廊下に響く。心細いくせに気付かれる心の準備ができていない璃子は、音になる度に息を止めながらゆっくり階段を上る。二階まで上れば教務室は目の前だ。コピー機やプリンターの作動音や、電話、雑談の聲がはつきりと聞こえる距離まで近づき、璃子は足を止めた。

扉一枚、壁一枚、ガラス窓一枚。教務室の中に居る講師達と自分を隔てるものはこれだけ。しかしいざここまで上って来たものの、教務室の中に入るにはもう少し思い切りが足りなかった。璃子は躊躇いながら、カウンターの窓ガラス越しに中を覗き込む。誰も自分には気がつかないだろうと思っていたら、入り口近くの女性が振り返った途端に目が合った。

「あれ？　り……ここ？」

「……あ」

璃子と目が合ったのは伊東だった。秋に比べると幾分髪が長くなっていたが、見間違えるはずも無い。伊東も口を開けたまま、元から大きい目を更に丸くしてこちらを見ている。璃子は思わず屈んでカウンターの下に隠れた。もちろんそれで居なかったことにはならず、ばたばたと教務室から足音が聞こえたかと思うと勢い良く扉が開けられた。

「璃子！」

飛び出してきた伊東に抱きすくめられ、璃子は驚いて身を固くする。鼻先に揺れる栗色の髪からは、いつか嗅いだことのある香水の香りがした。いきなりの抱擁に気恥ずかしくなり身を擦ると、スニーカーの中でずぶ濡れの靴下が泳ぐ音がした。

「こんなに濡れて冷えて！ 風邪ひいたらどうすんの、馬鹿！」

耳元では伊東の鼻声が自分を叱っている。体温とエアコンの暖気を含んだウールのジャケットを、伊東はさっと璃子に羽織らせると抱きかかえるように教務室へ向かった。

教務室の講師たちは皆、璃子を見て驚きの表情を隠さなかった。それはそうだろう。数週間前に塾を辞めた生徒が、授業もない日の夜にこっそりやってきたのだ。今更ながら場違いなところに来たのではないかと、璃子は伊東のジャケットに包まりながら身を縮めた。相田の姿を確認することもできず、ただ目を伏せる。

しかしそんな璃子に、講師達は誰も咎めるような声を上げない。璃子が知る限り一番長くこの校舎にいるはずの、恰幅のいい校主任がエアコンの設定温度を上げ、若い小川が客用のマグカップを持って席を立つ。璃子が促されるままに伊東のデスクに座ると、隣のデスクの栗林が足元の電気ストーブを璃子の方へと動かしてくれた。

「璃子、予備のストーブとスリッパ持ってくるから、靴脱いでちょっとこれ掛けてなさい」

引き出しからフリースのひざ掛けを引っ張り出し、璃子の膝の上に乗せる伊東。璃子の目の高さに合わせて、やや身を屈めて覗き込んでくるその目は心配そうに揺れていた。こくりと頷くと、伊東は璃子の肩を叩いて物置へと走っていく。その後姿を見送っていると、

小川が湯気の立つマグカップを持ってやってきた。

「寒かったでしょ？ 私の非常用ココア飲んで」

「……非常、用？」

「夜食とも言っかな」

くるつと目を動かして笑うと、小川は璃子にマグカップを差し出した。甘く濃厚な力カオの香りが胸に染み込む。かじかんだ手をそっと伸ばして、璃子はマグカップを受け取った。陶器のカップ越しに伝わる熱で、指先に少しずつ感覚が戻ってくる。

何故璃子がここに居るのか、理由も聞かない。講師達の優しさに胸が苦しくなり、それを誤魔化すように璃子はゆつくりとココアに唇を付けた。その時、頭頂部へ軽い衝撃が加えられ、視界が縦に揺れた。

「……つつ！」

予期せずに熱いココアが唇に触れ、反射的に璃子はマグカップから口を離す。唇をなめした舌尖に残る違和感は、ココアによる火傷だろうか。璃子は顔をしかめた。

「璃子、お前また何やってんだ？」

頭上から降ってくる呆れた声が、じわりと璃子の涙腺を刺激する。涙を溜めた目で声の主を探すと、分厚いプリントの束を持った相田が背後で悪戯っぽく笑っていた。あの束で叩かれたのか、と璃子は頭に手を当てた。昨夜殴られたような痛みはない。しかし、どうせなら痛いほうが良かった。思い切り殴られた方が、この胸の苦しみ

から解放されるかもしれない。

璃子の手が相田のジャケットの裾に伸びた。きゅっと摘むように、指先で紺色の生地を引っ張る。やめるとも何も言わない相田を見上げているうちに、初めは摘む程度だった指にどんどん力が籠っていく。相田を見上げる目に涙が溢れ、誤魔化せないまでもそれを落とすまいと堪えるうちに、璃子は歯を食いしばって唸り声をあげていた。唸りながら、ただ相田のジャケットを引き続けた。

「璃子？」

小川が心配そうな声を出しながら、璃子の顔を覗き込む。瞬きすることも堪え溢れすぎた涙で滲む視界は、ゆらゆらと揺らめく別世界のようで小川の表情さえ見えない。弱い自分をさらけ出すことは嫌だと思っではいても、もう行動が抑えられない。貯まった涙の重さに耐え切れず、璃子の瞼はついに動いてそれを頬にこぼした。はらはらと冷たい頬を伝って流れる涙は温かい。それが首を通り過ぎる頃には冷え、襟元を冷たく濡らす雫となった。璃子は指先で相田のジャケットを摘んだまま、ただ無言でぐいぐいと引き続けた。相田は黙って手に持っていたプリントの束を小川に手渡した。

「すみません小川先生、俺ちよっとこいつと個別教室行ってきます」

それだけ告げると、相田は璃子の頭を腕で抱え込むように立たせた。歩けるか、との声に頷きながら璃子は涙を流し続ける。食いしばった歯の間から漏れる唸り声は嗚咽に変わった。

璃子がよろけながら動き始めると、それに歩調を合わせて相田も動き出す。途中、伊東がストープを持ってきたと相田に告げると、相田はそれを個別教室に設置するように頼んだ。伊東の足音が遠ざかる中、璃子は相田に身体を預けるようにゆっくりと歩く。自分の

感情も、身体も、自分の意思では制御できない程に興奮していたのだ。

「相田先生……」

電気の点いた個別教室に着くと、一坪程のスペースしかない部屋はエアコンとストーブの暖気のふんわり乾燥した空気で璃子を包んだ。ストーブを設置していた伊東が璃子の身体を支えながら椅子に座らせる。璃子の手は相変わらず相田のジャケットを掴み、指先が白くなる程に力を込めていた。心配そうな声の伊東に対して、大丈夫、と相田は落ち着いた声で答える。

「事情は大体分かってるんで。落ち着いたら俺、改めて話聞きますから」

「……うん。じゃあ璃子、せめて靴と靴下脱いで、このスリッパ履いておきな。ね？」

雨で冷えた身体を気遣う伊東に、璃子は応える余裕も無い。伊東はひざ掛けとストールを璃子の身体に巻きつけ、ストーブの向きを調節した。

じゃあ、と伊東が去ると、相田は黙って璃子の隣に立ち頭をぼすんぽすんと叩き始めた。母親が幼子を寝かしつけるように、一定のリズムをもって触れるその手は温かく、そしてずしりと重い。心臓の鼓動と似たリズムの振動は、徐々に璃子を落ち着かせていった。

エアコンの温風が璃子の頬を撫でる。しばらく使われていなかったのか、それともメンテナンスを怠っていたのか、その風は少し埃っぽい匂いを含んでいる。鼻をすする度に、埃の匂いと授業プリントに使われているインクの匂いが交互に璃子の鼻腔をくすぐった。

「また、家でなんかあつたんだろ」

静かな時間が流れる個別教室に、相田の低い声がぽつりとこぼれた。璃子はこくりと頷く。

「そっか」

それ以上、相田は何も聞かない。ただずっと同じリズムで頭を叩き続ける。璃子は鼻から大きく息を吸い込み、長く震える吐息を漏らした。

「うち、生きてる価値ない……」

溜息と共に呟いた言葉に、相田の手が止まる。

「あの人も、お母さんも、うちを通してお父さん見てる。お父さんは、うちを通してあの人見てる。うちのことは、誰も見てくれない……」

だったら居ない方がいいのかもしれない、璃子は抑揚無く呟いた。相田の手は璃子の頭に乗せられたまま動かない。

「うちが居るから、お母さんとお父さんは離婚できない。うちがいるから、お父さんとあの人はうちを言い訳にする。うちが居なければ上手くいくことばかりなのかもしれない」

淡々と呟き続ける璃子は同意も反論も求めていなかった。ただ、言葉が口からこぼれていく。相田もそれが分かっているのか、何も言葉はかけない。じっと璃子の言葉に耳を傾けていた。

「もう、死んじやいたいかも……」

ガラスように脆いプライドで築いた牙城を傷つけられた。本当に欲しいと願っていたものに対する彼女の思いに負けた。そして不本意な言葉で彼女を傷つけた自分を嫌悪した。自分の生きている価値など針の穴ほども見出せず、消え入りそうな声で呟いた。

父や母とともに話しては居ないが、彼らが自分を見ていないことは明らかだったし、そんな自分がたまらなく惨めだった。何気なしに呟いた「死」という言葉が、たまらなく魅力的な響きに聞こえる。

呟き終え、璃子は背を丸めて頭を垂れた。伏せた視線はブランケットに包まれた膝の辺りを漂ってはいるが、焦点はまるで合っていない。

そうだ、死んでしまえばいいんだ。

一度口に出してしまった「死」は、それまでどうして避けていたのかと驚くほどに魅惑的だった。死んでしまえばこんな惨めな思いをしなくて済む、誰にも傷つけられずに済む。走っても追いつがなくても掴めない。急かされて追い立てられても先が見えないこんな生活が終わらせられる。もう疲れた。

狭い個別教室の小さな蛍光灯が、ブランケットに璃子の頭の影を作る。オレンジ色の生地に出来上がる影は、コントラストの差からやけにくつきりと見えた。虚ろな目でブランケットに写る自分の影を見つめながら、璃子は死んだ後のことをぼんやりと考える。

自殺は自分が解放されるための手段だ。しかし、自分で自分を殺すことで、後に残るものは何だろう。

父も母も、娘が自殺でもすれば世間体が悪くなり困るだろう。学校の連中もクラスメイトがこんな時期に自殺したとなれば、自分達のやったことだと動揺して高校受験に失敗する奴も出るかもしれない。彼女は、不倫の言い訳が無くなって居場所を失ってくれるかもしれない。

死ぬことで自分は解放され、そして自分を惨めにさせた人間に思い知らせてやれる。父のために、母のために、ずっと我慢を続けてきた璃子の、ささやかな復讐心がむくりと湧き上がった。それは救いを求めることより、激しい攻撃を望む心の声が強かったということなのだろうか。

そもその理由を作った、自分という人間を作った両親に向かって。

そうだ、死んで思い知らせてやればいいんだ。

じつと考え込む璃子の頭に乗せられた、相田の手が動いた。はっとして顔を上げると、相田の顔はこちらを向いて眉を吊り上げている。心なしか手の動きも乱暴で、幾分力が籠っているようにも感じた。璃子が口を開こうとすると、それを制するように相田の口が動いた。

「馬鹿なこと考えてるんじゃないぞ」

それが何を指していることなのか、もちろん璃子には分かっている。しかし既に死という魅惑的な言葉の虜になりつつある璃子は、相田の言葉に素直に頷ける訳もない。自殺すれば一石二鳥じゃないか、と思わず反論してしまいそうになり口をつぐんだ。

「お前が苦しいのも分かるし、そこから逃げたいのかも分かるけど、

死んだって何にもならないんだからな」

定型文だけどな、と相田は続ける。

「あてつけなんかのために、自分の人生棒に振るようなことするな」

あつさり凶星を突かれ、璃子の身体がびくりと反応した。頭上で相田が鼻を鳴らす。ふふんという音は、自分のことを全て見透かされた拳句に馬鹿にされているようだ。璃子のぶらんと垂れ下がる両手に、少しだけ力が入る。

「お前が死んだら」

幾分力加減を抑えた相田の手の平が、璃子の頭に乗った。

「あてつけられたって思う前に悲しむ連中だっているだろ。俺達だつてそうだ」

死ぬ以外に自分の身体も心も解放され、更に周りの人間に思い知らせてやれる方法など無い。璃子は唇を噛む。やはり相田も只の大人だ。受け持った生徒に自殺などされたら寝覚めが悪い。それだけだ。璃子の奥で、開きかけていた扉が閉まる音がする。

しかし相田はそんな璃子にはお構い無しに話し続ける。死んだらあれもできない、これもできない、皆が悲しむ。そんな辺り当たり障りの無い答えなど要求していない。止めて欲しいわけでもない。誰が悲しんだところで自分が死ねば分らないし、そもそもその苦しみを作った連中に悲しみと苦しみを残せばそれでいい。

璃子の目の奥が、紅く揺れる。自分の命の使い道を閃き、いつかケータイを駆使して他人を陥れた時のように一瞬だけ表情に艶が戻る。しかし、相田がその思考を遮った。

「ったく、お前、人の話きいてねえだろ」

そう言うが早いか、相田の顔が璃子の目の前に降りた。両手で肩を掴まれ、その力強さに璃子は思わず顔を上げる。

「お前がお前のことを消したら、俺はお前のこと忘れてやるからな。それでも良ければ思い付きで死んでこい」

璃子は息を飲んだ。

「人っていうのはな、忘れることができる生き物なんだよ。どんなに辛いことがあっても、時間が経てばその辛さも出来事も忘れることができるんだとさ」

今までに無い程に、相田は璃子の肩を掴んだ手に力を入れた。濡れて冷えた体にその熱が伝わる。目を合わせて語る相田の表情は真剣そのものだ。忘れてやるという言葉が璃子の耳に張り付いて離れなかった。

「お前があてつきたい人間だって、そのときはそりゃショックを受けるかもしれないけどな、時間が経てば必ずそれを忘れる。お前が思った程のダメージを与えられないことだってあるだろうし、思った程そのダメージを引き摺らないかもしれない」

一呼吸置いて、相田は続けた。

「忘れさせるために自分を消すのか？」

嫌だ。素直にそう思った。それは自分が望んでいることではない。

惨めな気分から解放され、更にそんな気分を味あわせてくれた奴らにダメージを残したいとは思った。しかしそれがほんの一時のことではなく、あとは緩やかに忘れ去られていくなど我慢ならない。璃子はふるふると首を振った。

相田は表情を緩ませ、ふつと手の力も抜いた。

「今朝、俺さ、お前に頭と身体休めろって言ったよな？」

璃子は小さく頷いた。

別れ際、自宅の前で手渡されたメモ用紙の手触りと共に、相田の言葉を思い出す。結局あの後心身を休めたとは言い難い事態が発生した。数時間の睡眠で回復するほど、璃子の体力も精神力も余裕があつたわけではないのだ。欲しいもののために自ら動く。そのためにはエネルギーが必要だ。しかし、今の璃子にはそのエネルギー、言い換えれば生きるための気力が不足しているのだらう。ブランケットに包まりストーブにあたっているにもかかわらず、未だに冷えたままの身体がそれを如実に表している。

「休めたくても休めないんだよな、お前……」

溜息混じりに呟く相田は、璃子の顔から目を逸らせた。伏せた睫毛が小さく揺れる。心身の限界に近かつたとは言え軽率な思いつきしたことを恥じながら、沈黙に耐えられず璃子も目を伏せた。

エアコンの温風が璃子の髪を静かに撫でた。

「一人でやりあつてんだもんな。誰も助けてくれなきゃ、そりゃ、疲れるよな」

そうだ、疲れてるんだ。素直に璃子はそう思った。学校、家、街、

どこにも逃げ場が無く、安心して身体や心を休ませる場所が無い。本来の休息場所は赤の他人に蹂躪され、頼るべき手を差し出されることは無い。あんな馬鹿げた考えが魅力的に思えるなど、健康的でないことくらい璃子も理解していた。

父や母に愛されたい。守られたい。彼女のこともこれ以上傷つけない。しかし、自分を追い詰める原因でもある彼らを、怒りのままに困らせ傷つけたくて堪らない。相反する感情の狭間で揺れ動く璃子の目は、その気持ちと同じように揺らいでいた。

落ちて着いていた涙が、またじわりと湧いてくる。鼻の奥がつんと痛み、璃子は鼻をすすり上げた。前髪に感じる相田の吐息がその存在の近さを教えてくれる。今朝泣きじゃくった時の感覚が蘇り、思わず相田の腕に飛び込んで泣いてしまいたい衝動に駆られた。

璃子さ、と相田が思い切ったように口を開いた。はっとして身を固くすると、相田は璃子の肩に置いた手に少しだけ力を込める。そして、今朝は悪かった、と小さな声で呟いた。璃子が涙を溜めた目で相田の顔を見つめ返すと、何かが吹っ切れたように相田は言葉を続けた。

「お前さ、今はまず自分を守ることを考えよう。親が頼れないんだったら、自分が自分をきっちり守って大事にしてやることを考えよう、な？」

「……ど、ゆこと？」

「今、お前すぐく疲れてるよな？　そういう時って、大体が親が守ってくれたりするもんだけど、お前んちそうじゃないじゃん。逆に親が余計に璃子を切なくさせてるだろ？　だから、無理して頑張るすぎたんだよ。身体が辛ければ休めばいいし、家とか周りの状況か

ら逃げたかったら逃げてもいいと思うんだ、俺」

「逃げる……？」

璃子を追い詰めているのが親達だと知っているからこそ、相田は一言ずつ丁寧言葉を選んで話し進める。自分を大事に、自分を守るために逃げてもいい。本来親から与えられる愛のある庇護を知らない璃子にとって、それはとても意外な提案だった。一呼吸置くと、相田は困惑している璃子の目を見てはつきり告げた。

「璃子、家を出よう」

たった一言だけれど、それは璃子の胸を強く突いた。その言葉を発した相田の目の光も強く、気圧された璃子は何も言えない。ただじつと強く光る目を見つめたまま、次の言葉を待った。

「本来の安心できる逃げ場が、璃子の場合はそうじゃない。このままだと、親御さんもちろん、璃子も自分で自分をどんどん追い詰めていくだろ？ そうしたらお前、また今みたいに自分のこと粗末に扱おうとするかもしれないし、それが家族に向けられるかもしれないしクラスメイトかもしれない」

璃子はそつと頷く。掲示板の書き込みは見ないようにしているものの、時折聞こえるクラスメイト達の言葉にある自殺やリスカという単語が、やけに耳に張り付いて離れないこともあった。学校帰りの繁華街で、優しく声を掛けてくる男についていきそうになったこともある。

そんなことをすればまた学校で噂になる。今、三学年で唯一のターゲットと言ってもいい璃子のスキャンダルには、皆恐ろしい程に敏感だった。こんなことで新しい弱みを作るわけにはいかない。そ

の思いだけでどうにかやり過ごしてきたのだ。

それなのに、家を出るといふ相田の提案の意図が分からなかった。家を出てどこに行けるものだろう。まさか自分が面倒を見るとは言わないだろうに、祖父母のところへでも行けとでも言うのか。

璃子は小学五年生の頃に他界した、父方の祖母の顔をぼんやりと思い浮かべた。人当たりの良い大柄な祖母が無くなると、残された祖父は長男だった父に施設へ入れられた。母方の祖父母に至っては、璃子がまだ幼い頃に数回会ったことがあるだけである。

「……うち、いくところ、ないもん」

親戚とてそれほど多くは居ない。璃子は相田の提案に首を振った。逃げたいのは山々だが、行き場が無くてはどうしようもない。璃子の目から再び涙が溢れてきた。ぽんぽんと、相田の手が璃子の肩を叩く。

「だからさ、まず児相行こう」

「ジソウ……？」

鸚鵡返しに呟くと、相田はこくりと頷いて続けた。

「児童相談所。こういう時こそ、お役所に頑張ってもらおうぜ」

自信有り気に告げた相田の表情は微笑んでいた。初めて聞く言葉だったけれど、相田の微笑みに後押しされるかのように璃子は即座に頷いていた。

卒業

「あ、雪だ」

整然と椅子が並べられた体育館で、前方に座った男子生徒の黒い頭と学生服の様子がまるで夜の海がゆっくり波打ち人を眠りに誘っているように見えて、璃子は欠伸をかみ殺しながら窓へと視線を動かした。アリーナを囲むようにはめ込まれた大型のガラス窓の外には、小さく白いものが風に舞踊っている。季節柄、花びらであればよかったのに、と璃子は少しがっかりした表情を浮かべて視線をステージに戻した。

二カ月半ぶりの体育館。周りはぐるりと紅白幕に取り囲まれ、ステージ上には校旗と並んで日の丸の旗が掲げられている。体育館ってこんなに狭かったつけ、と璃子は天井を仰いだ。

覆いかぶさるような天井の鉄骨の梁には、誰かが休み時間にもでも放り投げてしまったのだろう、バスケットボールが一つ挟まっていた。よく見るとカラーのゴムボールもいくつか挟まっている。自分が学校に来ていた頃にもあっただろうか、と璃子はぼんやり考えた。しかしその頃の自分はそんな些細な日常の風景を気に留めていなかったはずだと気がつく、改めて以前の自分の余裕の無さが笑えてくる。

壇上では市議会議員の代理人とかいう人が、きっと毎年何処の学校に行っても同じものを使いまわしているのだろうと思われる祝辞を、滔々と読み上げている。何故市議本人が来ないのか、毎年考えていたのだが答えは案外簡単だった。市内の中学校の殆どが、同じような日程で卒業式を行うからだ。ダブルブッキングだったり、他の用事とぶつかったりすることが多いのだろう。それでも断らないのは、所謂世間体なのか、中学生の保護者相手に宣伝することが目

的なのか、それとも君が代を歌うとか歌わないとかの主義を中学生達にアピールすることが目的なのか。いずれにせよ代理人もご苦労なことである。

長い祝辞が終わると場の空気がやや緩み、前方で揺れていた頭がいくつか起き上がる。璃子は周りに合わせて小さく拍手をした。

市議の代理人が降りると壇上にはまた別の来賓が立った。ステージの校旗と日の丸に一礼し、巻紙を広げて祝辞を読み始めるが、今度の来賓は随分と年配でその声も弱々しい。マイクを通してでさえボソボソと口の中で竈ったように喋るその声は、さながらお経のようだった。体育館全体の空気の流れさえ滞らせ、一層の眠気を誘う。璃子は欠伸を耐え切れなくなり、思わず下を向いて口元を手で覆った。

眠気を口から追い出し、顔を上げると目尻には僅かに涙が滲んでいる。それを数回の瞬きで視野から追い出すと、硬い椅子の背もたれに背を預けながら、璃子はまた窓へと視線を泳がせた。

窓の外でちらちらと光を反射する小さな粒は、風に煽られてその動きが定まらない。自分の意志とは関係なく煽られる様は、大人に翻弄される子どもの様子にも似て見える。強い風にもそよ風にも決して逆らわず、しかし目的地である地面まで迷わず落ちていく雪の姿はしなやかな強さも感じさせた。

卒業式か、と璃子は隣に座るクラスメイトに聞こえないように、鼻で小さく息を吐いた。しかし隣の少女は既にこっくりこっくりと舟を漕いでいた。じきに在校生の送辞が始まる。璃子はそっと彼女の肘を小突いた。はっとして目を覚ました彼女は、璃子と目が合うと気まずそうに顔を背ける。露骨に嫌な顔をされなかっただけ良いか、と璃子は苦笑いをする。と再び窓の外の雪を眺めることにした。

そんな笑いをこぼせるほど、璃子の心は穏やかだった。

中学を卒業するということに強い執着を持っているつもりだったが、なんだかあつけないな、と璃子は不思議な気持ちでねずみ色の雲に覆われる空を眺めた。早く大人になりたかったような、ずっとこのままで居たかったような、毎日じりじりと何かに追い立てられて焦っていた。それも今日で終わる。これで少なくともこの空間からは開放される。そういった気持ちが沸いてくるかと思いきや、それが殆ど無い。

ただ、冬休みと三学期を挟んで二カ月半ぶりに登校した璃子は、自分がやけに冷静で余裕があることに驚いていた。

ジソウ、と言われてピンと来ないくらい璃子にとって馴染みのない建物は、穏やかな雰囲気の中に幾分緊張した空気を持って二人を迎えた。お役所というイメージとはやや異なる、こじんまりとして明るいクリーム色の外壁を持つそれに門扉はない。また、雨も降る冬の夜だというのに、観音開きの玄関ドアを全開にしていた。開け放たれたドアからは、内部のオレンジ色にも似た明かりが漏れており、来るものを拒まないそんな外観にどこかほっとしたのを覚えている。

化粧も落とし雨に濡れた様子の璃子と、着崩したスーツ姿の相田がアポなしで訪れると、事務所に居た二人の職員は慌しくも毅然とした態度で二人を応接室へと通した。帰宅直前だったのだろうか、彼らのデスクには鞆が乗せられていたが、決して嫌な表情を見せずに璃子達を迎え入れた。そしてどうして良いか分からずに黙りこくっていた璃子の代わりに、相田が大まかな事の顛末を職員に説明し保護を求めたのだ。

初めは塾の講師と元塾生という二人の關係に疑問を持ち、訝しげな表情をしていた職員達も相田の説明が進むと目の光が鋭くなっていた。聞き取り調査票に相田の話を余すことなくメモをし時折顔を璃子に向けると、大変だったねと労う様な声が行う。それが更に璃子の居心地の悪さを助長した。

自宅があり、両親も健在だったことで全くこういった施設に縁の無かった璃子である。いざ相田が保護を求めると、急に居たたまれない気分になった。よく考えれば児童相談所とは虐待を受けた子どもや、家庭環境に恵まれない子どもが世話になるところではないか。そこへ自分が赴いて助けを求める等というのは、彼女のプライドが許さなかったからだ。

自分は決して可哀相な子ではない。可哀相だと思われたくない。

虐待をされているわけでもないし、経済的に教育を受けさせてもらえないわけでもない。酷く場違いだ。

居たたまれない気分のまま、しかしその場から立ち去る勇氣も氣力も無く、璃子は黙ってうなだれながら相田の話に耳を傾けた。父と彼女の話に及んだときは膝の上で握った手に知らず力が入った。また、母の話が出たときには、肩が小刻みに震えた。

璃子が直接事情を説明しているのではない。相田が語るその話を間接的に聞いているだけにも関わらず、璃子の身体は理性の制御を失っていた。彼らの存在は、例えば姿が見えない状態でも、璃子の心身に大きな影響を与えていた。

話が進むにつれ、足元から這い登る寒気と言いようもない不安感が璃子を襲う。肩の震えは次第に四肢へと移り、ついには噛み締めていた奥歯が鳴り始めた。酷い頭痛と動悸に璃子の呼吸も荒くなる。父と母、そして彼女の顔が眼前に迫る、そんなイメージから逃れようと璃子はぐっと目を閉じた。

その様子に気がついたのだろう。相田は落ち着かせるように璃子の肩を抱き、いつものリズムでばんばんと叩いてくれた。そして職員の一人はすぐさま別室で電話をし、当面の宿泊施設を確保してくれたのだ。

しかし璃子の身体は過度のストレスと冬の雨に打たれた冷えからか、宿泊施設へ向かう前に四十度近い熱を出した。聴取で夜も遅くなり、一旦は身体を休めるために宿泊施設へ向かおうとした矢先のことだ。そして相田と職員に付き添われて児童相談所から市民病院の救急外来へと搬送されると、肺炎の恐れがあるからそのまま入院することとなった。

その後のことは実はあまりよく覚えていない。

気がついたら白壁の個室で腕に針を刺されて寝かされていた。身体は鉛のように重く動かすことができなかったし、留置されている針から薬剤が身体に侵入する、その痛みを伴う感覚はやがて自分の脈拍と同化して消え失せていった。目を覚ました璃子は輸液のバツグから規則正しく滴下する透明な液体を見つめてはいたが、その意識は夢と現を彷徨っていた。

入院は一週間程であったが、その間はずっと相田と児童相談所の職員が交代で付き添っていてくれた。入院した翌日には担任の女教師がやって来て、簡単な見舞いの言葉と通知表を置いて帰っていったのをぼんやりと覚えている。後は伊東や栗林等の講師が時折顔を見せる以外、クラスメイトにも知人にも誰にも会わなかったような気がする。

そして、両親と彼女は、一回も姿を現さなかった。

退院後に聞いた話では、それは行政の処置だったらしい。両親と彼女の存在が璃子の心身を追い詰める原因であるとの判断が下され、しばらくの間一切の接触を絶つように相談所の職員が働きかけていたのだ。世間体を重んじる父がそれに反発したことは想像に難くない。しかし法律だか条令だかに守られた璃子に、彼らは近寄ることもできなかったらしい。

会いたかった訳ではない。むしろ、入院した自分の姿を見られたくないと思っただし、顔を合わせたら自分が壊れてしまうのではないかという恐怖もあった。事実、相談所を訪れた後からというもの彼らの顔を思い出そうとするだけで、璃子の身体は制御できないほどの震えに襲われたのだ。

そんな璃子に対し、相田は根気強く寄り添ってくれた。冬季講座で時間が取り難かったはずの入院中はもちろんのこと、退院後に保護施設へと移った璃子の元へも相田は足繁く通って来た。毎朝九時をまわる頃には姿を現し、仕事が始まる昼過ぎまで他愛ない世間話をして過ごす。正月休みはほぼ終日、三学期が始まってからもこのペースを崩すことなく相田は通い続けた。

何も急かさず、何も求めず。ただじつくりと傍に居て、同じ目線で物を見て話す。あるときは壁紙の模様、またあるときはテレビのドラマのストーリー、またあるときは飲んでいるコーヒの味。同意だけではなく反論もされ、二人で着地点を探す。そんな会話が延々と続いた。それだけではあったが、璃子の凝り固まった心を解すには十分だった。

学校へも行かず両親にも会わない。ケータイも手元から取り上げられ、時間を決められたテレビの視聴と、職員や通い詰める相田との会話以外は刺激も少ない毎日。三食をきちんと摂り、規則正しい生活リズムで日々を送り続ける。少し窮屈な位の保護施設での生活は次第に璃子の心身を癒した。

静かな環境は自分を見つめる時間をもたらし、その時間の中で璃子は自身の守り方を一つ学んだ。ひらひらと窓の外を舞う雪を眺め、自分が何を求めているのかを考える時間が増えた。そして施設入所から一月も経たないうちに、璃子は一つの決断を下した。

高校受験の申し込みのために学校の担任がやってくると、璃子は予め用意しておいた答を告げた。女教師はその肉付きの良い瞼から覗く細い目を精一杯見開いて、璃子に意思を確認したが璃子の考えは変わらなかった。しばしの間受験資料と成績を見比べていた担任も、璃子の決意と環境を考慮したのだろう。すぐに表情を綻ばせ、頑張つてと告げて書類を作成すると璃子の両親の元へと向かった。った。

K 高校を受験する。

以前相田に持ちかけられた時は、自分のプライドと両親の世間体を満足させるための選択肢でしかなかった高校に、璃子は自分の意思で受験を希望した。将来にやりたいことが見つかったわけではない。家を出て寮生活を送り、将来を模索する。今の自分には知らないことや足りないことだらけだ。自分自身を守り、自分のために力を付ける。そのための足がかりとして進学先を選んだ結果だった。

担任から報告を受けて両親がどのように考えたかは分からない。しかし数日後に担任はK高校の受験票を持って訪れたのだから、璃子の意思は了承されたと見て良いだろう。まずはそれでいい。璃子がそれを相田に告げると、相田は黙って肩を叩いてくれた。

それから二ヶ月。相変わらず外では冷たい風が吹き、受験当日も駅を降りた途端に雪が降った。一週間経った今も、気温や風の冷たさは変わらないが璃子達は三年間の中学生生活の終わりを迎えようとしている。

卒業式と聞くと多くの人が麗らかな春の日を連想しそうなものだ。璃子もその一人なのだが、毎年のようにその期待は裏切られた。三月はまだ厚い雲が空を覆い、日によっては気温も冬並みに下がり今日のように雪がちらつく。卒業式ソングによくある桜吹雪のフレーズなんて、絶対どこか遠い異世界の出来事に違いないとさえ思えた。毎年、ただ寒いなあとは思わなかった璃子だったが、さすがに自分の卒業式まで雪が降ってくるとなると、今後の人生を暗示されているような気がして憂鬱になる。

特に今日は正午頃にK高校の合否が発表される。嵐で無いだけマシか、と自分に言い聞かせるも、空の暗さを見るとやはりどこか心細い気分になった。

いよいよ卒業生退場の段になり、クラスごとに椅子から一斉に立ち上がる。これが終わればホームルーム。その後は校門で在校生が見送る中、花道を通って下校となる。部活で活躍したり信頼されたりしている者や下級生に人気がある者はそこで捕まり、なかなか帰れない代わりにプライドが十分満たされる時間。そうではない者は友人達と連れ立って、最後の中学生生活を共有できる貴重な時間。中学での人間関係をリセットするための、大切な時間でもある。

二ヶ月ぶりに登校したものの未だにネットで陰口を叩かれている璃子は、自分にはどちらの選択肢もないことを自覚していた。しかしそれでもいい。盛大な拍手の中、ホームルームに戻った璃子はスカートのポケットに手を入れて、そこにあったぼち袋をそつと撫でる。ぼち袋に入っている一枚のメモは、この三ヶ月のお守りだった。小太りな体に袴をつけた担任が一人一人に卒業証書とケースを配っている間中、璃子はぼち袋を撫で続けた。

そして、長い長い卒業式というセレモニーが終わり、璃子達卒業生が通用口から外へ出ると、そこには在校生達による長い花道が出

来上がっていた。これでお終い、そういう感傷に浸ってしまったのだろう。璃子の前で数人の女子生徒が肩を寄せ合って泣き出してしまった。しかし璃子は以前であればよく喋る仲だった彼女達の横を通り抜け、花道をくぐって校門まで歩く。あと一步。そこを出れば、中学生としての璃子は終わり新たな自分として一人で歩き始めるのだ。

最後の在校生の脇を通り抜け、璃子がその一步を踏み出した時だった。

「璃子！」

後方から自分を呼ぶ声が聞こえ、璃子のはつとして顔を上げた。振り返ると、すぐ後ろに息を切らせて立つ紗織の姿があった。冷たい風に煽られただけではない、黒髪が張り付いた彼女の頬はやや紅潮し、伏せがちな睫毛の奥に見える瞳には涙が貯まっているのが分かる。じつと見つめられ、璃子は息を飲んだ。緊張に身体を強張らせた璃子に構わず、紗織は璃子の肩を掴むとぎゅっとその手に力を込める。

「電話！　するからね？」

今にも泣きそうな顔で、紗織は怒鳴った。花道近くに屯する生徒達の喧騒で、その怒鳴り声も幾分小さく聞こえたが、それでもその表情は璃子の胸を打った。ポケットのぼち袋を取り出し中から一枚のメモを取り出すと、璃子はそっとそれを紗織に差し出す。メモを見た紗織の顔はくしゃくしゃに歪み、勢い良く璃子の首に抱きついて声を上げた。

「璃子の馬鹿。持ってたんだったら電話くらいしてよ、友達でしょ

？」

馬鹿、と紗織は璃子の肩に顔を埋めて呟く。その声が僅かに鼻声になっているのに気がつくと、璃子の鼻の奥もつんと熱く痛み始めた。ごめん、と声にならない呟きを漏らすと、肩に押し付けられた紗織の顔が左右に揺れる。制服越しに伝わる体温とふんわりと鼻先に香るシャンプーの匂いが、飾らない紗織の人柄を示しているようだった。卒業生と在校生の塊から少し離れたところで、紗織に抱きつかれたまま璃子はこっそり目尻を拭う。

遙か前方から、自分達を呼ぶ声がして璃子は顔を上げた。校門から離れた駐車場に、二つの人影が見える。ベージュのスカートスーツを着た人影は大きく上体を揺らし手を振っているようだ。長い栗色の髪が風になびき、身体一杯に喜びを表現している。隣に立つ背の高いもう一つの人影は、肩に何かを担いでいるようだった。

「璃子！ 合格してるって！ おめでとう！」

良く通るその声の主は、栗色の髪を揺らしながらこちらへ走り寄ってきた。声から分かる。人懐こい、タヌキのような顔をくしゃくしゃにしているに違いない。そしてもう一人は彼女のあとに続くように歩き始めた。

ダークグレーのスーツを着こなし、程よく散らした明るい色の髪を揺らす男はゆっくりだが確かな足取りで璃子に近づく。顔が分かる程にまで近寄ると、男は肩に担いだ物を頭上へと持ち上げた。それは、今まで璃子が見た事もない程に大きな花束だった。男はピンク色の花々が覗くそれを空に掲げて歩み寄ってくる。その人影に、空から降ってくる雪がまるで桜の花びらのように舞い落ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020o/>

わたしのあいしかた

2010年11月9日03時01分発行